

日本方言研究会

第 116 回

研 究 発 表 会

発表原稿集

▼午前の部 9 時 30 分～12 時 05 分

- 1) 介護現場における方言不理解の問題—仙台市の場合—……………山田はるか… 1
- 2) 静岡方言「いいにする」の多義性およびその使用・理解……………峯尾海成・谷口ジョイ… 9
- 3) 熊本方言における順接確定条件節の主節化……………阪上健夫…17

▼午後の部 13 時 35 分～18 時 15 分

- 4) 上方落語における方言の形式化について—『上方はなし』を例に—……………安井寿枝…25
- 5) 方言オノマトペの分布と変遷—「小聲で泣く様子」を例に—……………赤間咲良…33
- 6) 郷土料理〈しもつかれ〉を表す語の形式と方言分布……………新井小枝子…41
- 7) 言語地図データベースについて……………大西拓一郎…49
- 8) 南琉球宮古島与那覇方言のアクセント体系と弁別特徴……………新田哲夫…57

付 録

- 方言関係新刊書目 ……………65
- 2022 年度方言関係博士論文・修士論文・卒業論文一覧 ……………71
- お知らせ ……………奥付

令和5(2023)年 5 月 19 日(金)9 時 30 分から

青山学院大学

日本方言研究会会則

昭和 62 年 5 月 22 日 制定

平成 30 年 6 月 16 日 改定

1. 本会は日本方言研究会（Cercle dialectologique du Japon : Dialectological Circle of Japan）と称する。
2. 事務所は日本国内におく。その場所は別に定める。
3. 本会は、日本方言研究の促進と研究者相互の連絡を目的とする。
4. 本会の事業は、(1) 年 2 回の研究発表会の開催、(2) 機関誌の発行、(3) その他、とする。
5. 会員は、日本の方言研究に関心を持ち、本会の活動に積極的に参加するものとする。このうち、本会からの情報の提供を受ける個人・団体を連絡会員、機関誌を定期購読する個人・団体を購読会員とする。手続きは別に定める。
6. 役員としては、世話人 12 名をおく。人選は世話人会が行う。世話人の任期は 4 年とし、2 年ごとに半数を改選する。世話人の 2 期重任は認めない。ただし 2 年後の再任は妨げない。
7. 本会の運営のために次の委員会をおく。委員会は世話人と世話人外の委員で構成される。
研究発表会委員会、編集委員会、総務委員会
研究発表会委員会は研究発表会に関する業務、編集委員会は機関誌に関する業務、総務委員会は他の委員会の管掌する業務以外のすべての業務を担当する。委員の任期は 4 年とし、同一の委員会における 2 期重任は認めない。必要に応じ、委員会を臨時におくことができる。その構成と任期は別に定める。
8. 経費は、(1) 会費、(2) 寄付金その他、でまかなう。会費の額等は別に定める。
9. 会則の改定手続きは、その都度定める。

世話人 *新井小枝子・*大橋純一・*小川俊輔・*小西いずみ・佐々木冠・*澤村美幸・
下地理則・*高木千恵・竹田晃子・津田智史・中西太郎・原田走一郎
(*は 2025 年 5 月まで、無印は 2027 年 5 月まで)

研究発表会委員 *大橋純一（委員長）・*高木千恵（副委員長）・佐々木冠・津田智史・
*久保博雅・坂喜美佳・又吉里美・*三樹陽介
(*は 2025 年 5 月まで、無印は 2027 年 5 月まで)

山田はるか¹

1. はじめに

近年、災害現場・医療現場等で高齢者の方言が理解できないという問題が発生している。特に、方言を話す世代である高齢者を主な対象とする介護現場では、若い世代の介護関係者や他地域出身の介護関係者が方言を理解できないという問題が起こることが予想される。実際、今村・岩城（2020）では、弘前市内の介護現場で方言不理解が起きていることが指摘されている。そこで、本研究では仙台市内のこのような問題について考察する。

2. 先行研究と本研究の目的

介護現場における方言不理解についての研究には、今村・岩城（2020）の弘前市での調査がある。この調査では、弘前市内の短期大学生2年生（有効回答数94名）に介護実習中に利用者の方言が分からなかった経験の有無を尋ねた。その結果、48%が「あった」と回答し、半数近くの介護実習生に方言が分からない経験があったことが分かった。

また、具体的にどのような語彙で不理解が起きているかについて、小林・坂喜（2018）では、災害時の支援者向け方言支援ツール作成の際に a.「間違いやすい方言」（同じ形態の共通語がある語などの「気づかない方言」）、b.「分野別語彙」（特定の分野の支援者にとって特に重要だと思われる語彙）、c.「コミュニケーション語彙」（被災者と支援者との心的距離を縮めるためのもの）を取り上げている。特に不理解にかかわるのは、一つ目と二つ目の語彙である。一つ目の a.「間違いやすい方言」とは、共通語「投げる」と間違いやすい気仙沼方言の「なげる（捨てる）」など共通語に同形の表現がある方言である。二つ目の b.「分野別語彙」とは、医療・介護職員や災害時の支援者など、方言支援ツールの対象者となる人々にとって各分野で特に重要な方言である。今村・岩城（2020）では、弘前市内の介護施設の介護職の方を対象としたアンケート（有効回答数52名）を行い、介護の仕事をする上で覚えておいた方がよい方言語彙について尋ねた。回答で集まった語彙を意味分野ごとに分類し、看護師を対象とした同じ内容の調査と比較したところ、介護従事者は看護師よりも生活に関する語彙を多く挙げており、介護は医療よりも日常生活で使用する語彙がより必要であることが分かった。

本研究では、このような先行研究の結果を踏まえて、次の2点について明らかにするこ

¹ やまだ はるか（東北大学大学院生）yamada.haruka.s5@dc.tohoku.ac.jp

とを目的とする。

- (1) 仙台市内の介護現場で不理解が起きているかどうか
- (2) 介護現場で不理解が生じている仙台方言語彙にどのようなものがあるか

3. 研究の方法

2022 年 6 月～7 月、仙台市内の介護施設 22 か所を対象に、郵送・持参による記述式アンケートを実施し、介護関係者 281 名から回答を得た。アンケートでは回答者の年代・出身地等のほか、自由記述により利用者の方言が分からなかった経験の有無と具体的な方言語彙、不理解が生じた際の状況について尋ねた。

4. 研究の結果

4.1. 方言不理解の有無と地域・年代の特徴

自由記述の回答より、分からなかった経験が「ある」と答えた方、具体的な語を挙げた方を合わせると、方言不理解の経験があるとした方は 183 名となり、全体の 65.1% に上った。このことから、仙台市内の介護現場において、介護する側が介護される側の話す方言が理解できないという現象が高い程度で起きているということが分かった。

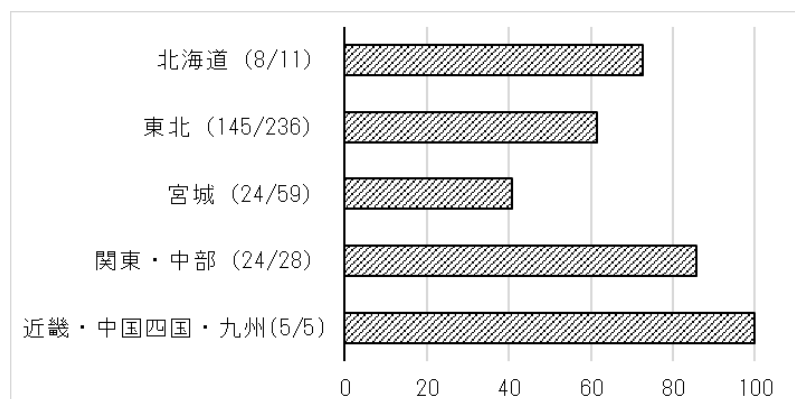


図 1 出身地域別の不理解経験者の割合

回答者の出身地・年代と不理解経験の有無との関係については、次のようなことが明らかになった。まず出身地について図 1 を見ると、各地域の回答者のうち不理解経験があったとする回答者の占める割合は、宮城県から遠い地域ほど高くなっていることが分かる。特に関東よりも西の地

域では、ほとんどの回答者が分からない経験があったとしている。また、東北地方出身であっても、宮城県以外の地域では比較的不理解経験者が多くなっていることが分かる。

次に、年代について図 2 を見ると、各年代の回答者のうち不理解経験があったとする回答者の占める割合は、20 代から 40 代にかけて増えている。介護士としての経験が増えるにしたがって分からない方言に出会う機会が増えていき、40 代でピークを迎えるのではないかと考えられる。

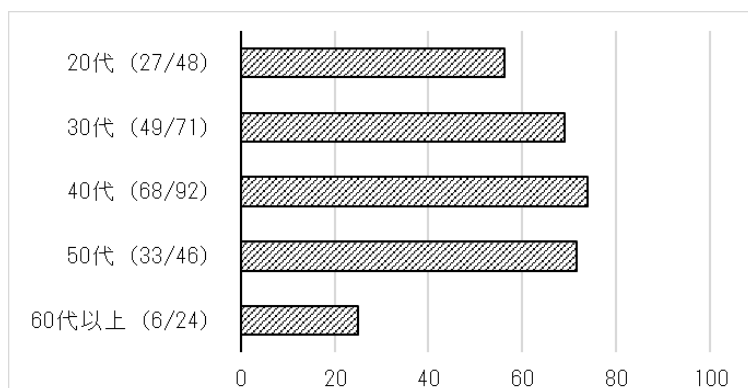


図2 年代別の不理解経験者の割合

このことから、介護士の出身地が宮城県から離れていればいるほど、仙台方言が理解できない問題が多く発生することが分かる。また40代より以前の年代で年齢を重ねるごとに分からない方言を聞く機会が増加している傾向が見られることが分かった。

4.2. 方言不理解が発生した語彙

以下、報告された不理解語彙について、①全体を意味分野によって分類する、②具体的な語彙の特徴を一つ一つ見ていく、の2つの方法によって検討していく。なお、仙台方言以外の語彙が回答された場合もわずかにあったが、それらは除外した。

4.2.1. 意味分野による分類

回答者がどのような語彙で不理解があったと報告しているかを分析するため、まず回答された語彙を意味分野別に分類した。括弧内の数字は、それぞれの語の回答者数を表している。語数の多い分野については下位分類を行った。

身体語彙：かっしゃ（頭）（1）、でび（おでこ）（5）、このげ（眉毛）（1）、まなこ（目）（1）、ぶんのこど（後頭部のへこんだ部分）（1）、つこ（乳）（1）、おべっちょ（女性器）（1）、ひじゃかぶ（ひざ）（1）、こむら（ふくらはぎ）（1）、あすのこば（足の甲）（1）、あすのししゃ（足の裏）（1）あくど（かかと）（1）

性向語彙：たんばら（短気な人）（1）、いんぴんかたり（へそ曲がり）（2）、けちゃむぐれ（へそ曲がり）（1）、かばねやみ（怠け者）（6）、たれか（怠け者）（2）、ほでなす（ろくでなし）（3）、あんこたれ（馬鹿者）（1）、おだづもっこ（お調子者）（15）

人間関係語彙：おっぴさん・ピーちゃん（曾祖父母）（10）、がが（母）（1）、しゃでっこ（弟）（1）、われ（私）（1）、おらほ（こちら側）（1）、やろっこ（男の子）（1）

感覚・感情語彙：感覚語彙/ひゃっこい（冷たい）（1）、ぬくい（暖かい）（1）、まつぼい（まぶしい）（3）、いずい（違和感がある）（50）、ゆるぐねえ（きつい）（1）、こわい（疲れた状態である）（16）、腹くっつい（お腹がいっぱい）（1）、おしっこつまった（小便がしたい）（5）感情語彙/ごしゃく（怒る）（9）、あんじだす（心配する）（1）、ししゃます（困る）（1）、やんだくなる（嫌になる）（1）、けっぱる（頑張る）（2）、おっかね（怖い）（1）、おしよすい（恥ずかしい）（24）、しずねー（うるさい）（1）、もぞこい（かわいそう）（1）、こばかくせ（馬鹿馬鹿しい）（1）、やずもね（馬鹿げたこと）（1）、わがらねえ（駄目だ）（1）、ずんけない（面倒くさい）（1）、めごい（かわいい）（1）

動作語彙：移動に関する語彙/あるく（（交通手段などを利用して）移動する）（1）、あぶ（歩く）（5）、むずる（曲がる）（2）、じゃんする（幼児語で、足を投げ出して座る）（3）食事に関する語彙/く（食

う) (1)、のどばみ (のどに詰まらせること) (2) 排泄に関する語彙/ぼんこたつ (大便をする) (1)、むぐす (便を漏らす) (1) 就寝に関わる語彙/ねむかけする (居眠りする) (1)、あおになる (仰向けになる) (1) 着脱衣に関する語彙/ (手袋を) はく (はめる) (1) 物の扱いに関する語彙/かっ
 ちゃぐ (掻き裂く) (1)、かます (かき混ぜる) (1)、ちょす (触る) (5)、ゆっける (結いつける) (1)、ねっばす (くっつける) (8)、うるかす (水につけてふやかす) (3)、(洗濯物を) おっこむ (取り込む) (1)、なげる (捨てる) (5)、じる (盗む) (1) 人との関係に関する語彙/かつける (～のせいにする) (1)、すける (助ける) (2)

状態変化語彙: おがる (育つ・大きくなる・いい気になる) (3)、ふくれる (太る) (1)、たがる (病気になる) (1)、あたる (脳卒中になる) (1)、はかはかする (息が切れる) (3) おる (弱る) (13)

様態語彙: あだりほどり (そこら中みんな) (1)、あっぺとっぺ (首尾一貫していないこと) (3)、なじよだりかじよだり (なんでもかんでも) (1)、なんだりかんだり (なんでもかんでも) (1)、いきなり (とても) (13)、もはや (もうすぐ) (1)、までだ (丁寧だ) (5)、ふだだ (豊富だ) (1)

生活語彙: 食べ物に関する語彙/おづげ (味噌汁) (1)、しおびき (鮭) (1)、たまな (キャベツ) (1)、ぺろ (麺類) (2)、お茶っこ (お茶) (2)、すずこ (とっくり) (1)、よごみ (生ごみ) (1) 衣類に関する語彙/どんぶく (半纏) (1)、ジャス (ジャージ) (11)、むんからちゃっぷ (麦わら帽子) (1)、おはよう靴下 (穴の空いた靴下) (6)、すっぱね (裾に跳ね上がった泥) (1)、たごまる (服がまくれる) (7) 場所に関する語彙/しずこ (清水の湧き出るところ) (1)、よっこより (寄り道) (1) 遊びに関する語彙/いしけんずー (じゃんけんぽん) (1) 天気に関する語彙/おれさま (雷様) (1)、おらいさん (雷様) (1) 道具に関する語彙/ジョイント (ホッチキス) (1) その他/おどけ (冗談) (8)、ほいど (乞食) (3)、あがはら ((子供の) 仮病の腹痛) (1)

挨拶表現: おみようぬづ (また明日) (1)、おぼんです (こんばんは) (1)、したっけ (それじゃ) (1)、へば (また、じゃあ) (1)

応答詞・感動詞: んだ (そうだ) (6)、だから (そうだよね) (15)、だれー (なにー) (1)、なにすや (なんだと) (1)、なじよすっぺ (どうしよう) (2)、わりごだ (申し訳ない) (1)

文末・語末表現: ～だっちゃ (だよ) (11)、～わ・よわ(～よ) (6)、～がす・でがす (～です) (2)、～すか (～ですか) (1)、～てけらい・けさい (～てください) (2)、～だいね (～なのだろう) (1)、～なきゃない (～なきゃいけない) (3)、～だでば (～だってば) (1)、～だけっども (だけど) (1)

表 1 各意味分野の語数と割合

	異なり語数	のべ語数
身体語彙	12 (9.6%)	16 (4.1%)
性向語彙	8 (6.4%)	31 (7.9%)
人間関係語彙	6 (4.8%)	15 (3.8%)
感覚・感情語彙	22 (17.6%)	124 (31.6%)
動作語彙	22 (17.6%)	47 (12.0%)
状態変化語彙	6 (4.8%)	22 (5.6%)
様態語彙	8 (6.4%)	26 (6.6%)
生活語彙	23 (18.4%)	55 (14.0%)
挨拶表現	4 (3.2%)	4 (1.0%)
応答詞・感動詞	6 (4.8%)	26 (6.6%)
文末・語末表現	9 (7.2%)	28 (7.1%)
合計	125 (100%)	393 (100%)

各意味分野の異なり語数・述べ語数と全体に占める割合は、表 1 のようになった。異なり語数・述べ語数が 10%を超えているのは「感覚・感情語彙」、「動作語彙」、「生活語彙」の 3 つであり、これらは介護現場で不理解が生じることの多い意味分野だと考えられる。「生活語彙」の割合が高くなっているのは、今村・岩城 (2020) で指摘されている、介護では医療以上に生活にかかわる語彙が必要であるという主張と一致してい

る。それに加えて「感覚・感情語彙」、「動作語彙」も介護では重要性の高い語彙分野である

という結果になった。「生活語彙」が必要となる理由として、今村・岩城（2020）で指摘されているように、治療が主な目的となる医療分野に比べ、介護分野は利用者の生活に寄り添うことが目的となることが挙げられる。また、「感覚・感情語彙」、「動作語彙」については、後述するように、介護現場において重要な語彙が多く含まれる語彙分野であるため全体に占める割合が高くなっていると考えられる。

4.2.2. 具体的な不理解語彙の特徴

次に、一つ一つの具体的な不理解語彙についてみていく。小林・坂喜（2018）で述べられている方言理解支援ツール作成時に取り上げるべき語の特徴を見ると、回答された語彙・エピソードの中で特に注意する必要があるのは、次のような語彙であると考えられる。

(a)共通語と語形が似ているために意味を取り違いやすい語

(b)介護現場で理解できなければ介護に支障が出る恐れのある語

(a)は語そのものに取り違いやすい原因があり、介護以外の場面でも不理解が生じる可能性のある語である。(b)は語の問題というより、介護現場で理解できないことに特に問題のある語である。以下、それぞれの特徴について見ていく。

(a) 共通語と語形が似ているために意味を取り違いやすい語

語の意味を誤解してしまったというエピソードや意見をみると、語の意味を誤解する原因として形態面の共通語との類似性が挙げられることが分かった。その中でも、①同形の共通語が存在する語、②類似形式の共通語に当てはめて誤解しやすい語の2種類に分けられた。

①同形の共通語が存在するために誤解しやすい語

この分類に当てはまる語には、特に回答者が多かったものに次の3語があった。

「いきなり（とても）」：不理解語彙に挙げているのは13名だが、自分の使い方と違っていたので戸惑ったという意見が見られた。この語は仙台市では程度副詞として使用される。

「だから（そうだよね）」：仙台方言で相槌や同意の意味で使われるが、理由の接続詞「だから」と誤解したという回答が見られた。不理解語彙として挙げた15名のうち、「後にく言葉を持った」、「だから何？」のような聞き返しだと思った」という方が7名いた。

「こわい（疲れる）」：16名が不理解語彙として挙げていた。「利用者が何かに怯えているのかと思った」「職員の対応が怖いのかと悩んだ」といったコメントが4名から得られた。

この他、1名ずつ回答していた語には「ふくれる（太る）」を「膨れる」と誤解し、「お菓子を勧めた時に「ふくれっから嫌だ」と言われ、お菓子が膨張するはずないと思った」とい

う回答、「おれさま（雷）」を自分のことを指していると誤解したという回答もみられた。

これらは、先行研究で「気づかない方言」とされ、特に誤解が起こりやすい語として注意すべき語彙に含まれる。早野（2016）では、「気づかない方言」の中のタイプの一つに「共通語と語形が同じで、用法が違うもの」を挙げており、このタイプは他地域の人に使うと、話し手と聞き手の間に誤解が生じる可能性があるとしている。仙台方言の中のこのような語彙でも、介護現場で実際に誤解が生じていることが分かる。

②類似形式の共通語に当てはめて誤解しやすい語

この種類の語彙には、特に回答者が多かったものに次の2語があった。

「おしよすい（恥ずかしい）」：不理解語彙として挙げたのは24名であり、このうち、「お小水」＝「小便」と間違え、トイレに行きたいのだと誤解したという回答者が7名みられた。「おしよすい」は入浴・排せつの介助中や歩行介助中に聞かれるという意見を合わせて回答した回答者もあり、その語が使用された状況も誤解を生じやすくさせているのではないかと考えられる。

「がおる（疲れる）」：不理解語彙にあげたのは13名であり、このうち怪獣の鳴き声の真似のように思ったという回答者が2名みられた。「がおる」は「我折」からきている（『日本方言大辞典』）が、音のイメージの強さから「疲れる」という意味を連想しにくいいため理解できなかったと考えられる。

この他、1名だが「たまな（キャベツ）」を「玉ねぎ」と間違えたという回答者がおり、「たまな（キャベツ）」は「玉菜」からきているため「たま」を「玉ねぎ」と間違えたと考えられる。このように、共通語と同形のもの以外にも、共通語との形態上の類似性や音が喚起するイメージが原因とみられる誤解が起こりやすい語があることが分かる。

(b) 介護現場で理解できなければ介護に支障が出る恐れのある語

回答されたエピソードを見ると、とっさに理解できず困った経験のある語彙があることが分かった。そこで、回答された不理解語彙の中で理解できなければ特に支障が大きいと思われるものを分類した結果、以下のようなグループに分けられた。

①利用者の生命に関わる語彙

不理解語彙として報告された語彙の中には、「のどばみ（のどに詰まらせる）」、「あたる（脳卒中になる）」など、高齢者の生命に関わるような語彙が見られた。

②利用者の健康状態の変化に関わる語彙

また、生命に直接関わるとは限らないが、高齢者の健康に関わる可能性のある語彙がみられた。『日本方言大辞典』によると「がおる（弱る）」は仙台市で「病気や疲労などで弱

る。衰弱する。また、しおれる」の意味で使われており、「こわい（疲れる）」は疲れた状態のほかに「だるい。大義だ」の意味でも使用される。このような語彙は単に疲れた状態だけでなく病的な状態も表すことがあると考えられる。「はかはかする（息が切れる）」は動悸・息切れする様子を表すオノマトペである。不理解語彙として挙げた回答者が50名と最多だった「いずい（違和感がある）」については、櫛引（2009）で目に入ったごみや体に合わないセーターといった異物が身体を刺激したことで生じる物理的な違和感を示すとされている。このことから仙台市における「いずい」も、高齢者の健康上の違和感を表しうる語として注意すべき語だと考えられる。以上のような語彙は、特に高齢者においては健康状態の悪化を表すこともあるため重要だと考えられる。

③利用者の排せつに関わる語彙

5名が不理解語彙として挙げている「おしっこつまる（小便がしたい）」は排せつしたいと訴える言葉だが、「詰まる」という言葉の意味から「出したいけど出ない」といった排尿困難のことであると反対の意味にとってしまった経験のある人が2名見られた。緊急性が高い一方で、反対の意味にとらえてしまう場合があり注意すべき語であると考えられる。この他、「むぐず（漏らす）」「ぼんこたつ（大便をする）」も排せつにかかわる語であり、とっさの対応が必要になる場面があると考えられる。

④利用者の通常動作に関わる語彙

「ベッドに誘導した際に「あおになっどええか？」と言われた時すぐに分からなかった」という意見、「地図を見ながら話していた時、「この角をむずればいいんだ」と話され分からなかった」という意見が見られた。このことから、「あおになる（仰向けになる）」「むずる（曲がる）」などの動作語彙が介助中に重要であると考えられる。他に、食事を利用者と作っていて、「それちよすな」と言われ分からなかったという意見があった。このように「ちよすな（触るな）」という禁止の形で使われた場合、すぐ理解できなければ不適切なものや危険な物に触ってしまう可能性が考えられるため、「ちよす（触る）」も重要性が高いと考えられる。このような観点から、「あぶ（歩く）」は歩行介助、「かます（かき混ぜる）」は食事介助などの場面で必要となると考えられ、通常動作に関わる語彙は介護場面で重要な語彙だと考えられる。

以上の分類を見ると、これらは介護現場でとっさに理解して対応する必要のある語が多く、緊急性が高い語が多いのではないかと考えられる。また、意味分類で「感覚・感情語彙」「動作語彙」に含まれる語が多く含まれており、このことから介護分野で重要な語彙であると考えられる。今回の調査で回答された語の他にも、このような①～④の分類に属する仙台方言は重要度が高いといえるのではないかと考えられる。

5. 結論

以上より、本研究の2つの目的について、次のようなことが言える。

(1) **方言不理解が起きているかどうか**：仙台市においても弘前市と同様に方言不理解が見られることが分かった。特に宮城県から遠い地域の出身者や40代より以前の介護士に不理解が起こりやすいと考えられる。

(2) **どのような仙台方言語彙で不理解が起きているか**：不理解語彙を意味分野ごとに分類した結果、先行研究の主張と同様、生活に関する語彙が多いことが分かった。他に感覚・感情や動作に関わる語彙も多く、介護分野ではこのような語彙分野が重要であると考えられる。具体的な語彙を見ると、次のような特徴が見られた。

(a) **共通語との類似性により間違えられやすい語彙**：同形の共通語が存在するため意味を取り違える語の他、形の似た共通語に当てはめようとして誤解してしまう語があることが分かった。こうした原因には、その語の音が喚起するイメージや語彙の成り立ちによる類似性などがあるのではないかと考えられる。

(b) **理解できなければ介護に支障が出ると考えられる語彙**：利用者の生命に関わる語彙、健康状態の変化に関わる語彙、排せつに関わる語彙、通常動作に関わる語彙に分類できた。これらは緊急性が高くとっさに理解して対応する必要があると考えられる。また、意味分類をした際の「感覚・感情語彙」、「動作語彙」に分類される語彙が多く含まれており、このことから介護において重要な語彙であると考えられる。

今後は、今回明らかになったことについて、方言理解支援ツール作成にどのように生かすことができるかという実践的な側面も見据えながら、さらに考えていきたい。

引用文献

今村かほる・岩城裕之（2020）「介護における方言の課題」小林隆・今村かほる編『実践方言学講座 第3巻 人間を支える方言』くろしお出版,pp137-156.

櫛引裕希子（2009）「意味変化の東西差—方言「エズイ」を例として—」『日本語の研究』第5巻2号,pp. 31-45.

小林隆・坂喜美佳（2018）「社会支援と方言語彙」小林隆編『シリーズ＜日本語の語彙＞8 方言の語彙—日本語を彩る地域語の世界—』朝倉書店,pp177-191.

尚学図書編（1989）『日本方言大辞典』小学館.

早野慎吾（2016）「気づかない方言」井上史雄・木部暢子『はじめて学ぶ方言学 ことばの多様性をとらえる 28章』ミネルヴァ書房,pp80-87.

静岡方言「いいにする」の多義性およびその使用・理解

峯尾海成¹・谷口ジョイ²

1. はじめに

静岡は、東日本の言語的特徴と西日本のそれとが接する位置にあり、「過渡的な地域（中田, 2002）」と表現される。また、静岡方言は音韻や語法的特徴から東海東山方言に属し、共通語とは大きく異なる語彙や表現形式を擁するが、近年、実証的な研究はほとんど行われておらず、その調査は急務であると言える。加えて、母方言話者が「方言だと認識せずに使用する語彙・表現」も複数あり（井上, 2022）、注目に値する。例えば、共通語の「エライ」は、通常、人物や行動などが非常に優れているさまを表すが、静岡、あるいは周辺の方言においては、身体的に辛く、苦しい様子を意味する（朝日, 2019）。

筆者らのこれまでの調査により、静岡方言は衰退しつつあり、その傾向は、今後も継続することが示唆されている（峯尾・佐藤・門戸・山岸・谷口, 2023）。例えば、「まめったい（＝主に「体を動かしてよく働く」の意味）」という語彙は、共通語の「まめだ」と競合関係にあるが、その使用・理解は、1950年代から1990年代にかけて段階的に減少しており、今後もその傾向が続くことが予測された（谷口・山岸・峯尾・佐藤, 印刷中）。また、静岡方言に見られる推量表現についても、「～ツラ」および「～ズラ」はほぼ消滅しており（大西, 2015）、代わって「～ラ」「～ダラ」が使用されるようになっているが、いずれも若年世代では使用・理解の割合が低下している（谷口・山岸・峯尾・佐藤, 2022）。その一方で、「方言接触によることばの再編成（朝日, 2010, p.29）」が生じることなく、方言形が維持される場合もある。

本研究は、静岡方言「いいにする」を対象とした大規模調査を行い、その使用・理解について明らかにすることを目的としている。また、得られたデータに対して独立性検定を行うことで、方言使用にかかる要因の特定を試みた上で、今後の変化傾向を予測する。「いいにする」は、県全域で使用され、あらゆる年代に浸透していること、また、上述の「エライ」と同様に、多くの母方言話者が方言だと認識せずに使用していることが予備調査から示されたことから、当該表現を選定した。

2. 静岡方言「いいにする」

「いいにする」を対象とした先行研究は管見の限り見当たらず、その用法や、使用・理解についての過去の状況は不明である。本調査の実施にあたり、静岡方言を母方言とする話

¹ みねお かいせい(静岡理科大学大学院システム工学専攻) 2221027.mk@sist.ac.jp

² たにぐち じょい(静岡理科大学) taniguchi.joy@sist.ac.jp

者を対象に予備調査³を行ったところ、静岡全域で用いられる「いいにする」という表現には複数の用法が見られることが示唆された。以下は、聞き取り調査から得られた回答の一例である（下線は筆者らによる）。

用例 1：（掃除を行う予定であったが）今日は掃除、いいにする。

用例 2：（購入する物品が決まったかどうか尋ねられ）いいのなかったけど、これでいいにする。

用例 3：（駐車中の工事車両について苦情があったという話を工事関係者から聞いて）工事中なんだから、いいにしてほしいよね。

用例 4：（短くなった鉛筆を使用し続けている子どもに対して、親が）もういいにしな。

このように「いいにする」という表現には多義性が認められるが、どのような意味で使用するかには、年代や出身地域（県東部・県中部・県西部）、家族による方言使用の有無が影響を与えている可能性がある。本研究では、こうした要因に着目し、以下 2 点を研究課題とする。

- (1) 静岡方言「いいにする」の使用・理解に関わる要因を特定する。
- (2) 静岡方言「いいにする」という方言形があらゆる世代において維持されている要因について検討する。

3. 調査方法

本調査は、静岡方言を母方言話とする 1,770 名（男性 421 名，女性 1,349 名）を対象とし（表 1 参照）、ウェブサイト上で回答する形式のアンケート調査（Microsoft Forms）により回答を収集した。調査にあたっては、ユーザー同士がメッセージを送受信することができるアプリケーションを用いて、静岡方言を母方言とする友人・知人に調査フォームの URL を送信する、あるいはソーシャルネットワーキングサービスによって調査協力を依頼する、という手法を用いた。

調査協力者には、性別、生年、出身地域⁴、家族の方言使用⁵について回答を依頼した。また、「いいにする」の使用・理解に関しては、以下の用例を含む文を対話形式で示した上で、「使用する」「使用しないが、理解できる」「聞いたことはあるが、理解できない」「聞いたことがない」という 4 つの選択肢を設けた。

³ 予備調査では、10 代～70 代までの各年代 10 名ずつ、合計 70 名に「いいにする」をどのような場面で用いるかについて聞き取り調査を行った。

⁴ 出身地については、中條修（1982）に基づき、地図を示した上で、東部・中部・西部の 3 地域を選択肢として設けた。出生から中学卒業まで居住していた地域、あるいはその期間、最も長く居住していた地域を回答してもらった。

⁵ 中学卒業までに同居していた家族の中で、静岡方言を話す人がいたかどうかについて回答を依頼した。

用法 (1) 風邪気味なので今日の散歩は、いいにする（＝しようとしていたことをやめる＝中止）

用法 (2) （まだ続けるか、と聞かれ）ここまでやったから、今日の仕事はもういいにしよう（＝十分ではないが、良いこととして一応納得する＝妥協）

用法 (3) （こんなに謝っているのだから）もういいにしてよ（＝許す/過失などを咎めない＝許容）

用法 (4) （野菜が食べきれない子どもに）もういいにしな（＝続けていたことを終わりにする＝中断）

分析については、調査協力者の性別、生年、出身地域、家族の方言使用という 4 つの指標を用いてカイ二乗検定を行った。

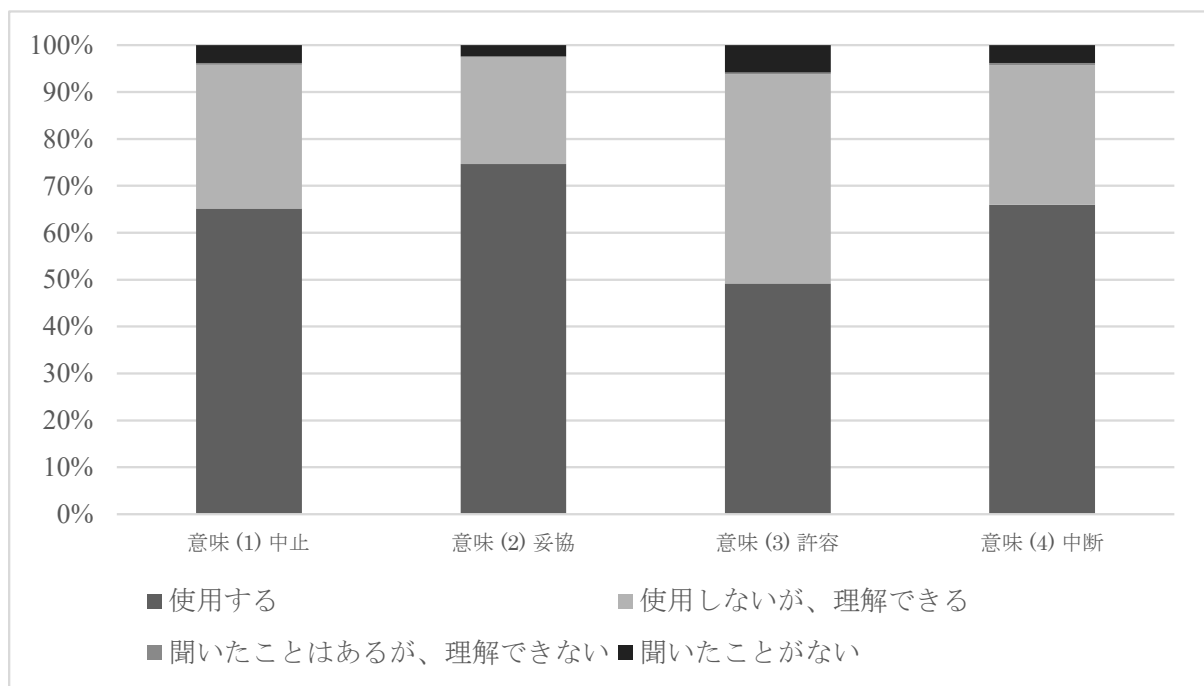
【表 1】 年代及び出身地域別の調査協力者数

	県西部	県中部	県東部	総計
10 歳代	33	52	30	115
20 歳代	187	245	127	559
30 歳代	147	183	113	443
40 歳代	79	149	73	301
50 歳代	55	130	53	238
60 歳代	8	71	12	91
70 歳以上	4	18	1	23
総計	513	848	409	1,770

4. 結果と考察

調査の結果、全ての用例において使用・理解の割合が高かった（図 1 参照）。特に、「十分ではないが、良いこととして納得する（＝妥協）」という用例では 74.63%が「使用する」、22.71%が「使用しないが理解できる」と回答している。また、「しようとしていたことをやめる（＝中止）」、「続けていたことを終わりにする（＝中断）」においては、それぞれ 65.14%、65.99%が使用すると回答している。一方で、「許す/過失などを咎めない（＝許容）」の意味での使用は、49.21%であり、最も割合が低かった。

表 2 は「いいにする」の理解・使用についてカイ二乗検定を用いて性別・年代・出身地域・家族の方言使用の 4 つの指標をもとにデータを集計したものである。その結果、2 項目（表 2 参照）を除き、使用・理解とそれぞれの指標との間に関連性が認められた。また、「出身地域」および「家族の方言使用」においては、1 項目を除いて p 値が有意水準 1%を大きく下回っていた。



【図 1】「いいにする」用例別使用・理解（静岡全域）

【表 2】 独立性検定結果⁶（静岡全域）

	意味 (1) 中止	意味 (2) 妥協	意味 (3) 許容	意味 (4) 中断
性別	0.044	0.001	0.007	0.001
年齢	0.060	0.002	0.002	0.008
家族の方言使用	8.58E-14	1.09E-06	3.16E-05	7.71E-08
出身地域	5.80E-30	4.72E-09	3.83E-13	9.59E-12

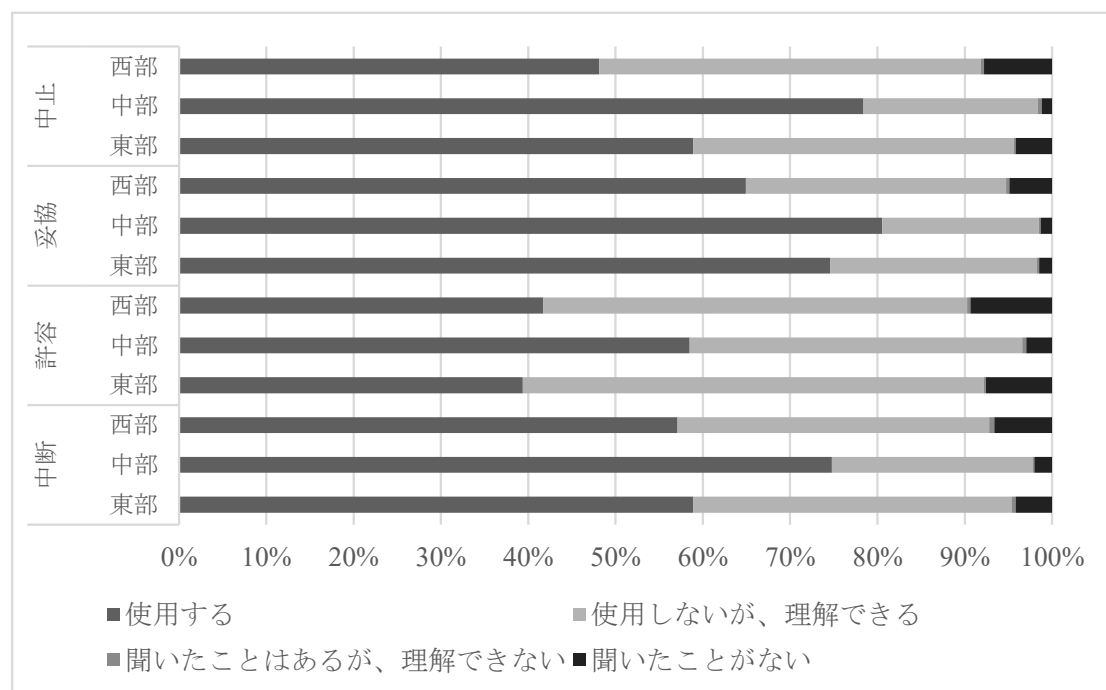
【表 3】 独立性検定結果の地域別まとめ

地域	静岡県西部				静岡県中部				静岡県東部			
用法	(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)
性別	0.2503	0.0084	0.0101	0.0267	0.0053	0.0394	0.0478	0.0529	0.0071	0.1102	0.4828	0.0034
年代	6E-11	7E-12	0.5435	7E-07	0.8842	0.4036	0.0355	0.3581	0.3678	0.9214	0.8264	0.7741
家族	2E-05	7E-06	0.0012	0.0003	2E-11	6E-05	0.0033	8E-08	9E-06	0.019	0.0247	6E-05

表 2 に示された結果から、方言区分（中條, 1982）に従い、調査協力者の出身地を西部（513 名）、中部（848 名）、東部（409 名）に分類し、カイ二乗検定を行った結果、「家族の方

⁶ 太字で表示された数値は、p 値が基準値（0.01）を下回るものである。尚、表中の E-x は、「1/10 の x 乗」を表す。

言使用」は、2 項目を除き、上記 (1) から (4) の用法の使用・理解に関わりが認められた（表 3 参照）。一方、年代、性別については、用法ごとに不規則な分布となった。

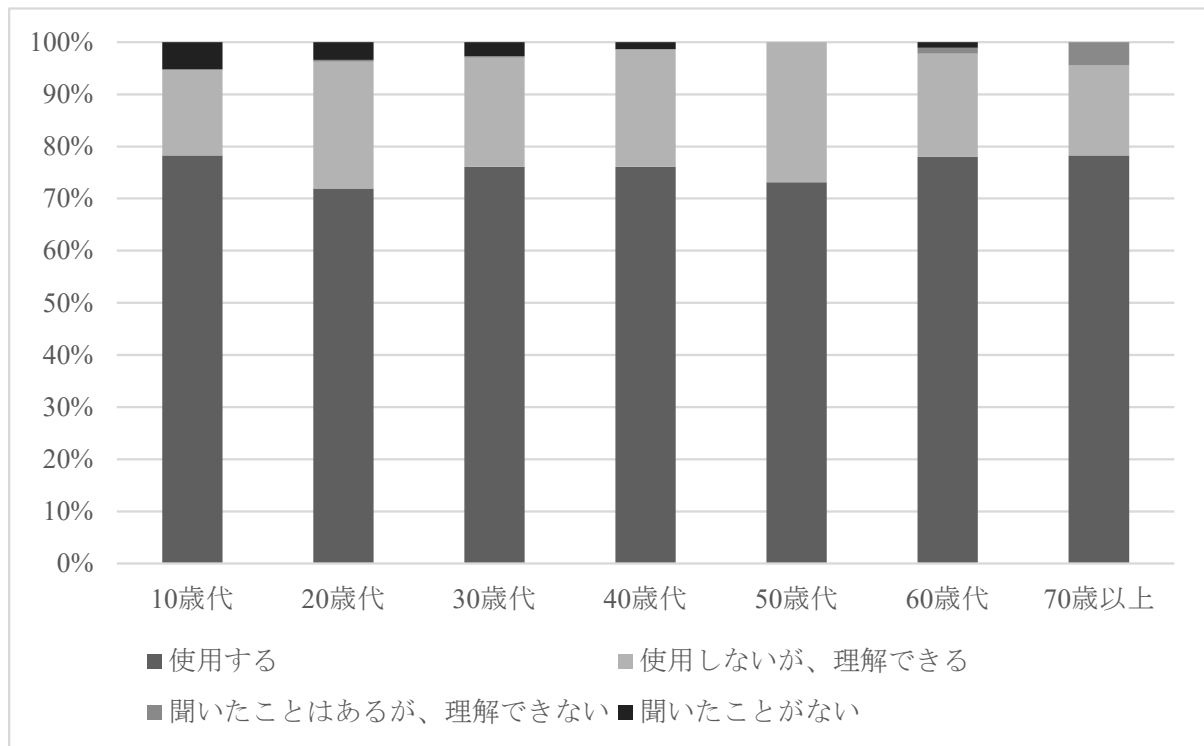


【図 2】「いいにする」用例別使用・理解（県西部・中部・東部）

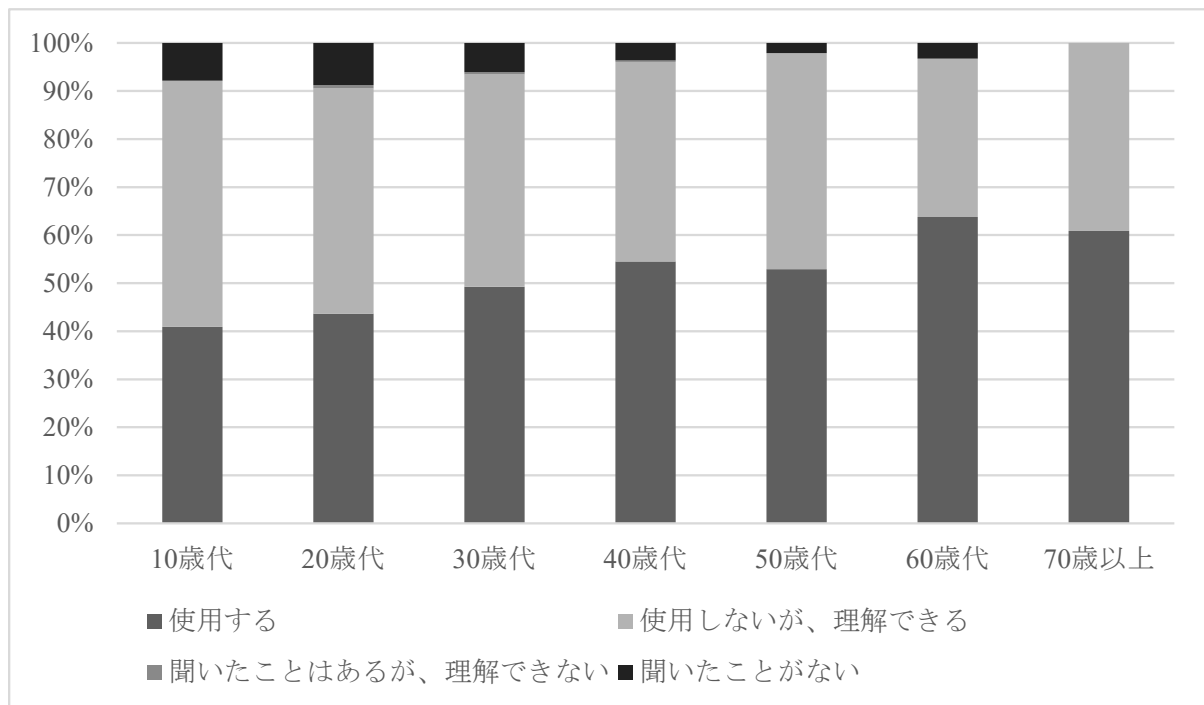
出身地域別に見ると、どの用法についても、県中部における使用・理解の割合が最も高い（図 2 参照）。用法 (1)「しようとしていたことをやめる（＝中止）」では、78.42%が「使用する」と回答し、「使用しないが、理解できる」の 19.93%を合わせると、98.35%が使用・理解すると回答している。用法 (2)「十分ではないが、良いこととして納得する（＝妥協）」という用例においても、80.54%が「使用する」、17.92%が「使用しないが、理解できる」と回答している。その他の意味についても、中部地域の使用・理解が最も高くなっていることが分かる。一方で、上記 (1) および (2) の使用・理解の割合については、東部地域が西部地域を上回っているものの、用法 (3)「許す/過失などを咎めない（＝許容）」、用法 (4)「続けていたことを終わりにする（＝中断）」については、両地域の使用・理解の割合は同程度となっている。

世代別の結果を見ると、最も使用・理解の割合が高いのは、用法 (2)「妥協」であり、10 代の話者で 78.26%、20 代の話者で 71.91%が「使用する」と回答している（図 3 参照）。一方で、最も割合が低い用法 (3)「許容」については、10 代の話者の 40.87%、20 代の話者の 43.65%が「使用する」と回答しており、その他の年代と比較し、わずかに低い数値となっている（図 4 参照）。また、用法 (1)「中止」、用法 (2)「中断」についても「使用する」と回答した若年層の割合は 6 割を超えており、「いいにする」が広く維持されていることが示

唆される。



【図 3】「いいにする」用法 (2) 「妥協」の年代別使用・理解



【図 4】「いいにする」用法 (3) 許容の年代別使用・理解

以上より、本研究における研究課題について検討を加える。

(1) 静岡方言「いいにする」の使用・理解にかかる要因を特定する。

静岡方言「いいにする」の使用・理解の割合は、用法ごとに差が生じており、主に「出身地域」および「家族の方言使用」が影響していることが明らかになった。前者については、特に県中部地域における使用・理解の割合が高いことが分かった。後者については、家庭内の方言使用が方言の継承に有用であることが改めて確認された。

(2) 静岡方言「いいにする」という方言形があらゆる世代において維持されている要因について検討する。

前述のように、この表現は、多くの話者が共通語だと認識していることが分かっている。聞き取り調査の中でも「方言だったんですか。え、かなりびっくりです（県中部・30代男性）」や「今まで方言ってことに気づいてなかったです（県東部・60代女性）」といった発話が聞かれた。こうした話者の認識が、方言形の維持に影響している可能性が考えられる。また、「いいにする」という表現は、共通語による置き換えが難しい。「よしとする」によって代替可能な場合もあるが、語感が大きく異なる。そのため、共通語への「取り替え」が起こりにくいのではないかと推察される。

5. まとめ

本研究の結果から、「いいにする」は、すべての用例で使用・理解の割合が高いことが明らかとなった。カイ二乗検定の結果から、出身地域による偏りが推定され、県中部において最も浸透していることが明らかとなった。また、地域ごとにカイ二乗検定をおこなったところ、「いいにする」の使用には「家族の方言使用」との関連が認められた。さらに、年代別に結果を可視化したところ、若年層においても使用・理解の割合が高かったことから、「いいにする」は今後も継続して使用されることが予測される。

一方で本研究には課題もある。今回は、「いいにする」を4つの用法に分類したが、これらの境界には曖昧性があることは否めない。例えば、調査において提示した「ここまでやったから、今日の仕事はもういいにしよう」は、「十分ではないが、良いこととして一応納得する（＝妥協）」の意味に分類しているが、文脈によっては「続けていたことを終わりにする（＝中断）」の意味としても解釈できる。他の例文についても同様であり、この曖昧性にどう対応するかが、今後の課題である。

また、「いいにする」は、静岡、あるいはその周辺地域以外でも使用されている。ソーシャルネットワーキングサービスによって収集した情報によれば、三重県北部、茨城県北部、広島県山間地、新潟県の一部地域、岡山県南部、鳥取県東部などで、「いいにする」、あるいはそれに類似した表現「ええにする」、「よっしゃにする」という表現が用いられるということである。今後は、他地域についても調査を行い、使用・理解にかかる要因、および方言形が維持される背景について、より詳細に検討を加えたい。

【参考文献】

- 朝日祥之（2019）「標準語のようで標準語でない愛知県の言葉」『2017 年度ワークショップ みんなの知らない方言の世界 報告書』3-24.
- 朝日祥之（2010）「方言接触とことばの変化」『日本語学会 2010 年度秋季大会予稿集』29-32.
- 大西拓一郎（2015）「〈共同研究プロジェクト紹介〉基幹型：方言の形成過程解明のための全国方言調査 方言分布の変化をとらえた!」『国語研プロジェクトレビュー』5(2), 68-77.
- 井上史雄（2022）「静岡の新方言と標準語の普及過程」『静言論叢』5, 1-27.
- 谷ロジョイ・山岸祐己・峯尾海成・佐藤道大（2022）「静岡方言における推量表現の変化—『ツラ』『ズラ』の衰退と『ダラ』の隆盛—」『日本語学会 2022 年度秋季大会予稿集』61-66.
- 谷ロジョイ・山岸祐己・峯尾海成・佐藤道大（印刷中）「静岡方言『まめったい』に見られる意味変化—多項分布型レジームスイッチング検出及び多群出現順位統計量を用いて—」『方言の研究』9.
- 中條修（1982）『静岡方言の研究』吉見書店.
- 中田敏夫（2002）「I 総論・II 県内各地の方言」平山 輝男他（編）『日本のことばシリーズ 22 静岡県のことば』明治書院.
- 峯尾海成・門戸巧・佐藤道大・山岸祐己・谷ロジョイ（2023）「回答者の生年に基づく語の意味変化の検出」言語処理学会第 29 回年次大会発表論文集. 947-951.

1. はじめに

基本的に文中に使われて節と節を繋ぐ接続助詞は、「(車道にはみ出している子供に注意する時に)自動車が来ているから」のように文末で使用される場合がある。熊本方言の順接確定条件の接続助詞の「ケン」には、「(雨が降っていることに気付いて知らせる意味で)ア、アメガ フットルケン」のように共通語の「から」が用いにくく終助詞と捉えた方が自然な文末用法がある。本発表は、熊本方言における順接確定条件の接続助詞が本来のものと異なる意味機能を獲得する過程を考察する。この過程は、順接確定条件節が主節に相当する意味を担う主節化としても捉えられる。

接続助詞の文末用法は白川(2009)が「(回転寿司で子供に)ウニは食べちゃダメよ。高いから。」のような倒置用法と、言語形式的に主節が表現されていない「言いさし」に分けている。その中でも文脈中に主節相当の内容が見出しにくい「では、この辺で帰るから。」のような用法は、それだけで意味的に完結する「言いつくし」とされる。本論ではこの言いつくしに当たるものを終助詞的用法と定義し、熊本方言の「ケン」について考察する。

本発表では2節で先行研究を示し、3節で調査方法を概説する。4節でその結果を示し、5節で順接確定条件節の主節化の過程を考察する。6節で結論と課題を述べる。

2. 先行研究

接続助詞は文全体をまとめる主節と特定の関係で結びつく節を導き、中でも連用従属節は主節や文全体を限定・修飾する(益岡・田窪 1992:188)。そして「今日は日曜日だから、車通りが多い」のように接続助詞「から」が導く連用従属節は主節と因果関係があり、成立が確定的・確信的な事態を表すため、一般的に順接確定条件節と呼ばれている。

また「から」の終助詞的用法について、白川(1991:253-255)は聞き手に期待する行動を実行させるために必要な情報を与える点が文中での本来的な用法と共通しており、2つの用法は連続的としている。「自動車が来ているから」は暗示的に「端に寄れ」等の行為要求をする表現と解釈できる。「あなたとはもう会わないから」のように一見具体的な行為要求を解釈しにくい用法でも、「そのことを認識しておけ」という含意が読み取れる。これは聞き手に行動の指針を示すため行為要求であり、行動の「背景の説明」としている。

終助詞的用法には、本来的な用法の影響だけでは説明できない面もある。「今日のことは忘れないから。」のように具体的な行為要求がはっきり分からない用法は、「から」以前の情報が話し手の主要な用件であり、それを聞き手に伝えることが話し手の目的である。つまり、「今日のことは忘れない」という発話内容が従属節ではなく主節に相当すると考えら

¹ さかがみ たけお(東京大学大学院人文社会系研究科博士課程) taburettotoh@gmail.com

れる。白川（1991:253-255）の行動の背景の説明という記述は、行為要求が暗示されておらず主節に相当する内容を表す終助詞的用法に当てはまるか否か疑問である。一方白川（2009:170）では「から」の終助詞的用法を、聞き手の認識状態に配慮して命題内容を提示する対人的モダリティを担う形式としている。対人的モダリティは主に主節に現れる。

接続助詞がモダリティに関わる意味機能を獲得する変化は文法化に含められる。Hopper and Traugott(2003:2-6)によると、文法化は言語形式が抽象的で文法的な意味を獲得する現象である。また、文法化の中でも複文において主節の節や文としての性質が減る現象は、加藤（2010）で非節化とされている。加藤（2010:37）によると非節化が生じている複文には「主節だけでは文が成立しない」「従属節が実質的な主節に相当する意味を担う」「主節を含む部分が文法的形式相当の機能を持つ」といった特徴がある。「赤ん坊は泣くものだ。」の例がそれに当てはまり、連体従属節の「赤ん坊は泣く」が主節化して「ものだ」が主節ではなく主節の述語に付く文法的形式というように構造解釈が変更されるとしている。

熊本方言の接続助詞「ケン」には、共通語の「から」と同様の終助詞的用法が見られる。原田（1953:178-182）は「アタシナラヨゴザリマスケン」のように主節を省略すると一種の終助詞的機能を担い、論理を超えた表現性が示されることが珍しくないとしている。神部（1992:108-109）は「ケン」類が文末に位置し表面上主節に展開しない場合も少なくないとして、話し手の主観性の勝った特殊な判断・主張を表現するとしている。

加えて、熊本方言の「ケン」には共通語の「から」で訳されているが終助詞「よ」を用いた方が自然に見える終助詞的用法が『日本語諸方言コーパス（COJADS）』で見られる。

(1)カエッテカル X 9 a チャン ケンカ シタナーテ ユータ トコルガ ソギャンカイ
タ オーオー ワシャ オボエトランナーテ イイナハルケン。(帰ってから「X 9 a ちゃん喧嘩したねえ」と言ったところが「そうかねオーオーわしはおぼえてないな」と言われるから。[子供時代のことを地元の知り合いと話した経験を語る際に])

[COJADS 熊本市高橋町,43_b_010, 69220, 43780. 収録 1981 年、話者 1897 年生女性]

ここでの「ケン」は行為要求の意味が薄く、単純に確信的な事態を知らせる意味で用いられている。こういった例では「ケン」が「から」より終助詞化が進んでいて、より聞き手の認識に働きかける対人的モダリティに近い意味を獲得しているように見える。このような熊本方言の現象を詳しく解明する研究はまだ見られない。熊本方言の「ケン」の用法を明らかにし、接続助詞の終助詞化の過程を考察することが本発表の目的である。

3. 調査の概要

調査は 2022～2023 年に熊本方言話者 6 名を対象に実施した。(2)に話者の言語形成期の居住地、生年、性別を記す。6 名とも調査時は熊本県外に居住している。

- (2)A：熊本県熊本市 1955 年生 男性、B：熊本県熊本市 1986 年生 女性
C：熊本県八代市 1992 年生 男性、D：熊本県熊本市 2001 年生 女性
E：熊本県阿蘇市 2002 年生 女性、F：熊本県菊池郡菊陽町 2002 年生 女性

本調査では「ケン」について文中での本来的な用法を確認し、「から」と共通した終助詞的用法で用いられることも確認する。そのうえで、「から」に置き換えにくい終助詞的用法について調査する。質問では共通語の例文を方言に翻訳してもらい、その際に下線部で「ケン」が使われなかった場合は、「ケン」を用いた例文を提示して可否を尋ねる。調査項目は大きく§1～§3に分かれる。調査項目の例文を順に示す。

§ 1. 文中での本来的な用法

- 〔1〕今日は日曜日だから、車通りが多いよ。
- 〔2〕今お茶でも入れるから、上がって。
- 〔3〕もうすぐおでんができるから、待っていて。

§ 2. 共通語の「から」と共通した終助詞的用法

§ 2. 1. 具体的な行為要求にとりやすい用法

- 〔1〕(道を歩いている時車道にはみ出して歩いている子供に)自動車が来てるから。
- 〔2〕(家の人に「留守番を頼むよ」のような意味で)ちょっと買い物に行ってくるから。
- 〔3〕(自宅にきた客に席を勧める時に)今お茶でも入れるから。
- 〔4〕(調理中、家族にもう少し待ってほしい時に)もうすぐおでんができるから。

§ 2. 2. 具体的な行為要求にとりにくい用法

- 〔1〕A：千葉県のビワは美味しいよね。B：熊本県のビワも美味しいから。
- 〔2〕(遅く帰ってきた家族に)布団はもう敷いておいたから。
- 〔3〕(会合等で退出する際に)では、僕/私はこの辺で帰るから。
- 〔4〕遅くに出かけてお化けに会っても知らないからね。

§ 3. 共通語の「から」に置き換えにくい終助詞的用法

§ 3. 1. 終助詞単独の用法

- 〔1〕(Aに自分の知識を伝える意図で)
A：熊本のからし蓮根が食べたいな。B：名産品のからし蓮根は高い__。
- 〔2〕(聞き手の意見を否定するような意味で)
A：スイカの食べ頃って分からないよね。B：食べ頃のスイカは色とか重さで分かる__。
- 〔3〕(自身が料理の担当で家族や班員との会話の最初に)今日はちゃんぽんを作る__。
- 〔4〕(依頼をした後、別れ際に)それでは、頼んだ__。
- 〔5〕(雨が降っていることに気付いて知らせる場合)あ、雨が降っている__。
- 〔6〕(目の前にいる人の襟が立っているのを見て知らせる意味で)襟が立っている__。

〔7〕(浜辺にゴミがたくさん捨てられているのを見て独り言として)本当に腹が立つ__。

〔8〕(近くで騒いでいる人がいる時に独り言として)うるさい__。

〔9〕(一人で歩いている時夕日を見て感動して)綺麗な夕日だ__。

〔10〕(Bを自然公園で見かけた次の日確認の意味で)昨日自然公園にいた__。

§3.2. 終助詞「ネ」との接続形

〔1〕(同じテレビ番組を見ている知り合いに会って)昨日のあの番組、すごかった__。

〔2〕A：今は耳にピアスをしている人が多いね。

B：そうだね。でも、びっくりする__。この頃は、鼻にも穴を開けているんだから。

〔3〕(子供時代に一緒に花火大会に行った人と話す際、同意を求める意味で詠嘆を込めて)

A：それから夏には花火を見に行った。

B：そうだったね。

A：あの花火は綺麗だった__。

〔4〕(自身の意見を述べて同意・確認を求める意味で)

A：今度沖縄に旅行しようよ。

B：沖縄に旅行するなら、やっぱり問題はお金だ__。飛行機に乗ることになるし。

〔5〕(旅行に行ってきたAと旅行の話になり、Aに同意する意味で)

A：阿蘇山から見える景色は良かったよ。B：あれは良い__。

〔6〕(〔5〕と同じ状況で)

A：料理店でメニューに馬刺があったよ。B：あー、熊本の飲食店にはある__。

〔7〕(高校同期のAと修学旅行に行った時の話になり、Aに同意する意味で)

A：あの時は他校の修学旅行生が200人くらい来ていた。B：あー、多かった__。

〔8〕(〔7〕と同じ状況で)

A：あの時は生徒が夜に外出すると先生が怒った。B：あー、夜間の外出を怒っていた__。

〔9〕(聞き手に関する不確かな情報を確認する意味で)君は九州出身だ__？

§2は共通語の「から」に見られる終助詞的用法で、大きく具体的な行為要求にとりやすいものにとりにくいものに分かれる。§3は「から」の本来的な用法における、聞き手の行動の背景説明という意味がとりにくい例である。そのため共通語では「から」が使いにくく、終助詞を使うのが自然となる。§3.1〔1〕～〔4〕は話し手の知識や行為を知らせるもので「よ」が使えるが、行動の指針ともとれるため「から」が使えなくもない。〔5〕〔6〕は単にその場で気付いた事態を知らせる例で、共通語では「よ」が自然となる。〔7〕～〔9〕は新たに生じた感情や感覚・評価といった話し手の認識を独話的に述べる例である。〔10〕は聞き手に関する情報の確認で、共通語の「ね」が使える。§3.2では共通語で終助詞の接続形「よね」が使える用例を尋ねる。「よね」には聞き手との一致を想定して話し手の認識を示し、聞き手に確認する機能があるとされる(蓮沼1992, 野田1993:10, 日本語記述文法

研究会 2003:266)。これらの先行研究では「よね」の用法を話し手の認識を表すものと、聞き手の方が詳しい情報の確認を求めるものに分けている。そのため〔1〕～〔8〕の話し手の認識を表す用法と〔9〕の話し手にとって不確かな情報を確認する用法に分けた。

4. 調査結果

調査結果を表 1,2 にまとめる。項目の番号の横に例文の一部を記す。下線部に「ケン」が使えると回答されたものに○、使えないと回答されたものに×を付ける。「ケン」単独ではなく「ネ」が必要と回答されたものに「ネ」を付ける。まず§1 と §2 について表 1 に示す。

表 1

		A	B	C	D	E	F
§ 1. 文中での本来的な用法							
	1：日曜日	○	○	○	○	○	○
	2：上がって	○	○	○	○	○	○
	3：待って	○	○	○	○	○	○
§ 2. 共通語の「から」と共通した終助詞的用法							
§ 2. 1. 具体的な行為要求にとりやすい用法							
	1：自動車	○	○	×	○	×	○
	2：買い物	○	○	○	○	○	○
	3：お茶	○	○	○	○	○	○
	4：おでん	○	○	○	○	○	○
§ 2. 2. 具体的な行為要求にとりにくい用法							
	1：ビワ	×	○	○ネ	○	○	○
	2：布団	○ネ	○	○ネ	○	○	○
	3：帰る	○	○	○	○	○	○
	4：お化け	○	○	○ネ	○	○	○ネ

6 名の話者の回答を見ると、全体として共通語の「から」の用法は「ケン」にもあることが分かる。§2.1〔4〕であれば「モースグ オデン デクッケン。」、§2.2〔2〕であれば「フトンワ モー シートッタケンネ。」のように文末で使えるそうである。「ケン」の使用に関する年齢差も見受けられなかった。加えて、B は 2 節の(1)のような例も「不満を表すなら『オボエトランッテ イワレタケン』と言える」とのことだった。F もこのような場合の「ケン」には驚きや不満の意味合いがあるとしている。これは共通語の「から」が使いにくい§3 の用法に当たるものと思われる。続いて§3 の回答を表 2 に示す。

表 2

		A	B	C	D	E	F
§ 3. 共通語の「から」に置き換えにくい終助詞的用法							
§ 3. 1. 終助詞単独の用法							
話し手の知識	1：名産品	×	△ ²	×	○	○ネ	○
	2：食べ頃	×	○	○	○	○ネ	○
話し手の行為	3：作る	○	○	○	○	○	○
	4：頼んだ	○	○	○	×	○	○
その場の知覚	5：雨	×	△	○	○	×	○
	6：襟	×	○	×	○	×	×
独話的な言明	7：腹が立つ	×	×	×	×	○	×
	8：うるさい	×	×	×	×	×	×
	9：夕日	×	×	×	×	×	×
聞き手に確認	10：公園	×	×	×	×	×	×
§ 3. 2. 終助詞「ネ」との接続形							
話し手の認識	1：番組	×	×	○	×	○	×
	2：ピアス	○	○	○	×	○	×
	3：花火	○ネ	○ネ	○ネ	×	×	○ネ
	4：沖縄	○	○	×	○	○	×
	5：景色	○ネ	×	○ネ	○ネ	○ネ	○ネ
	6：馬刺	○ネ	○ネ	○ネ	○ネ	×	○ネ
	7：他校	○ネ	×	×	×	○ネ	○ネ
	8：外出	○ネ	○ネ	×	×	×	○ネ
不確かな情報	9：出身	×	×	×	×	×	×

§3.1 の回答から「ケン」が〔1〕～〔6〕のような聞き手に行動を考えさせる意味が読み取りにくく、単純に発話内容を知らせる意味でも使えることが分かる。〔5〕〔6〕では話者間で差があるが、「ケン」にも一定の許容度がある。一方で〔7〕～〔9〕の独話的な言明や〔10〕の聞き手への確認では許容度が低い。このような意味では「ケン」を使えないと言える。

§3.2 では「ケン」と「ネ」の接続形が、〔5〕の「アレワ ヨカケンネ」のように話し手の認識に言明して聞き手との共有を確認する意味で使えることが分かる。Bは〔8〕で「先

² Bは〔1〕〔5〕で「(メーサンノ カラシレンコンワ タッカケン)買えないよ」「(アメン フットッケン)傘を持って行け」等の含意があれば「ケン」を使えると回答したため△とした。

生に不満の感情があれば『ヤカンノ ガイシュツバ オコットッタケンネ』と言える」と回答したが、ここでも「ケンネ」は同様の意味機能だと思われる。一方〔9〕の不確かな内容を確認する例では「ケンネ」だと断定的・確定的な意味になると回答され、全ての話者で許容されない。次節でこの結果をもとに接続助詞「ケン」の変化の過程を考察する。

5. 熊本方言における順接確定条件節の主節化の過程

調査結果から、熊本方言の「ケン」には話し手の確信的な事態を一方的に知らせる意味の終助詞的用法があると言える。発話内容について聞き手との共有・一致の確認をする場合は「ネ」と接続する³。この意味機能は、「そのことを認識しておけ」という共通語の「から」の終助詞的用法と共通した意味がより抽象化された、聞き手の認識に働きかける対人的モダリティに近い意味用法である。確定条件節は基本的に成立が確信的な事態を表すため、「ケン」の話し手にとって成立が確定的・確信的な事態に付くという性質は、順接確定条件の接続助詞の本来的な意味機能に由来すると考えられる。そして、「ケン」に見られる現象は順接確定条件節の主節化ととれる。§3.1〔5〕の「ア アメガ フットルケン」であれば「ケン」節の内容が聞き手の行動の背景情報ではなく話し手の主要な用件であるため、実質的な主節に相当する意味を担う。また、文末の「ケン」が聞き手への働きかけに関わる終助詞として解釈できるため、接続助詞が主節の述語に付属する文法的形式相当の機能を持つ。これらの特徴は主節化の条件に当てはまり、(3)のように構造解釈が変更される。

- (3) [ア アメガ フットル (従属節) ケン (接続助詞) そのことを認識しろ (主節)]
→[ア アメガ フットル (主節)]ケン (文法的形式：抽象化された知らせの意味)

この変化は共通語の「から」節にも生じているが、§3.1〔5〕のような用法がある熊本方言の「ケン」節ではより進んでいると言える。聞き手への知らせの意味の「ケン」の終助詞的用法は、驚きや不満等の強い感情表出があった方が使いやすいのかもしれない。

ただ、一部で「ネ」と共起した方が「ケン」を文末に使えるという意見があった。§3.2以外の聞き手との共有の確認を表さない例文では「ネ」の付加が任意だと想定していたが、§2.2や§3.1でも「ネ」の付加が必要という回答がいくつかあった。Aも§3.2の「ネ」との接続形の方が§3.1より「ケン」を使える割合が高い。こういったことから、熊本方言ではまず「ケンネ」という形式から終助詞的用法が発達した可能性もある。だとすれば、「から」と共通した用法からのさらなる拡張ではないことになる。「ケンネ」という形式は「今日は車通りが多いなあ」という発話に対して「ニチヨービダケンネ」のように、聞き手も知っ

³ §3.1〔10〕では「キノー シゼンコーエンニ オッタネ。」といった形式が多く回答されており、この「ネ」は共通語と同じく聞き手との共有を確認する意味機能を持つと言える。

ていると想定して原因・理由を提示する意味で使えるという回答があった。共通語でもこのような場合、相手に同意する意味で「日曜日だからね」と言うことができる。ここでは「日曜日だから、車通りが多い」という意味で、「ケンネ」が暗示的な主節の内容の原因・理由を表す節を導いている。このような用法で「ケンネ」が先行発話への同意のみを表し、話し手の主要な主張に付くようになったとも考えられる。そうだとすれば「ケンネ」が聞き手の認識に働きかける文法的形式相当の機能を持ち、主節化が生じていると言える。§3.2〔5〕のような例も(4)のような構造解釈の変更で説明できる。

(4)[アレワ ヨカ (従属節) ケンネ (接続助詞) 含意 (主節)]
→[アレワ ヨカ (主節)]ケンネ (文法的形式)

ここでは「ケン」で話し手の確信的な事態を一方的に言明し、「ネ」で聞き手への共有の確認を行っている。B の回答にもあったように、驚きのような感情表出を伴った表現になる可能性もある。いずれにしても、共通語で「よね」が適切で終助詞の接続形と捉えられる用法がある点で、熊本方言の「ケン」の変化の方が共通語より進んでいると言える。

6. 結論と課題

熊本方言の「ケン」は、共通語の「から」よりも抽象化した、話し手の確信的な事態の一方的な知らせという対人的モダリティの意味で主節に付加すると言える。「ケン」に見られる終助詞的用法の意味機能は、「から」と共通した用法からのさらなる拡張で説明できる。共通語の「からね」に当たる用法からの拡張で説明できる可能性もある。「ケン」の文末用法の感情表出等のニュアンスは、今後さらに調査する必要がある。

参考文献

加藤重広(2010)「日本語における文法化と節減少」『アジア・アフリカの言語と言語学』第5号,35-57
／神部宏泰(1992)『九州方言の表現論的研究』和泉書院／白川博之(1991)「「カラ」で言いさす文」
『広島大学教育学部紀要』第2部第39号,249-255／白川博之(2009)『「言いさし文」の研究』くろしお出版／日本語記述文法研究会(2003)『現代日本語文法4 モダリティ』くろしお出版／野田恵子(1993)「終助詞「ね」と「よ」の機能：「よね」と重なる場合」『言語文化と日本語教育』第6号,10-21
／蓮沼昭子(1992)「終助詞の複合形「よね」の用法と機能」『対照研究—発話マーカーについて』筑波大学つくば言語文化フォーラム 63-77／原田芳起(1953)『熊本方言の研究 郷土文化叢書4』日本談義社／益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版／Hopper, P. J. and Traugott, E. C. (2003²) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

謝辞

本研究にご協力くださった方言話者の方々に深く感謝を申し上げます。

上方落語における方言の形式化について —『上方はなし』を例に—

発表者 安井寿枝¹

1 はじめに

竹村明日香（2021）の概説によれば、『上方はなし』は昭和 11 年（1936）4 月から昭和 15 年（1940）10 月にかけて全 49 集発行された上方落語に関する同人誌であり、「竹内梅之助（5 代目松鶴の本名）」を編者とし、「落語荘」と名付けられた松鶴の自宅を発行所としている（p. 230）。また、「一番の目玉は 5 代目松鶴が口述した速記落語である。各集に 1～2 話ずつ収録されており、全体で 56 話を収める。いずれも上方の古典落語である」（p. 230）。

本発表では、お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション TeaPot に公開されている初版雑誌（原本）の紙面を使用し、速記本に書かれている方言と、1990 年代、2000 年代に演じられた音声落語²とを比較しながら方言の差異³を報告する。対象とした演目は、「住吉駕籠」（1937.4）「葎の火」（1938.5）「三枚起請」（1938.10）「お玉牛」（1939.1）「高津の富」（1939.2）「宿屋仇」（1939.7）「くしゃみ講釈」（1940.4）である。音声落語のテキストは次による。

○NHK アーカイブ保存

「住吉駕籠」2001 年 7 月 21 日放送・三代目桂米朝・日本の話芸

「葎の火」1993 年 7 月 30 日放送・五代目桂文枝・落語スペシャル

2001 年 6 月 16 日放送・五代目桂文枝・日本の話芸

「三枚起請」1991 年 10 月 4 日放送・三代目桂米朝・日本の話芸

「お玉牛」1979 年 1 月 13 日放送・三代目桂春団治・夜の指定席落語二題

2000 年 12 月 16 日放送・二代目桂ざこば・日本の話芸

「高津の富」1996 年 9 月 14 日放送・月亭八方・日本の話芸

2001 年 2 月 17 日放送・二代目笑福亭松之助・日本の話芸

2003 年 7 月 19 日放送・桂吉朝・日本の話芸

「宿屋仇」2002 年 4 月 20 日放送・月亭八方・日本の話芸

「くしゃみ講釈」1995 年 2 月 19 日放送・四代目桂福団治・日本の話芸

1995 年 12 月 22 日放送・三代目笑福亭仁鶴・日本の話芸

2000 年 2 月 12 日放送・桂吉朝・日本の話芸

¹ やすい かずえ（関西外国語大学）k-yasui@kansaigaidai.ac.jp

² 資料は、NHK アーカイブス学術利用トライアル 2022 年度後期公募に採択され、閲覧したものである。

³ 速記本と音声落語の録音の関係について、矢島（2013）では「たとえその内容が一致する箇所でも、表現が完全に対応関係にあるものはほとんどなく、細かく見ると少しずつ異なる表現を用いる場合が多い」（p. 396）と指摘されている。本発表において使用した資料についても同様のことがいえる。しかし、本発表で使用する速記本と音声落語には 60 年ほどの隔りがあるため、本発表ではできる限り逐語比較を行い、時代差を考察したい。

2 原因理由の表現について

矢島正浩（2013）⁴には、「くしゃみ講釈」は音声資料の用例数が少ないこともあるが、ノデが見られる点において特徴的な演目である。同書は速記本でもノデを多用しており、素材・話題の影響があることが想像される」（p. 427）とされている。速記本でノデが使用されている箇所を音声落語で確認したのが表1である。当該内容がないものは省いた。

表1 「くしゃみ講釈」のノデ

1940 笑福亭松鶴	1995 桂福団治	1995 笑福亭仁鶴	2000 桂吉朝
読物が宜い ので	三拍子揃てる さかい	三拍子揃うて て	読みもんがおもしろいちゅう んで
おもやんにベツタリと逢ふた んで		べったり会うたんや。	
怪太糞が悪い ので	おれ臭い から		わい臭い さかいに
物覚えが悪いとき て	俺は忘れや から	わたいが物覚え悪い さかい	あいつがいちちとき て
其様な時分に行た事がない ので	江戸時代からおりま つかい な。	わたい生きてへん さかい	そんな時分生まれてへん さかい
嚏が出ると云ふた んで	胡椒がない ので	くっしゃみが出る言 うて	えぐいくっしゃみが 出 ますちゅう さかい
来るのが遅い ので	遅過ぎたが な 。		
モヤモヤと来ました ので	煙は上がってくる 方 です から		煙がすうっと上 が ってきよった ん 。
皆は気の毒なと云ふ ので		皆気の毒やちゅう て	皆気の毒や て
胡椒が無い ので	胡椒がない ので	胡椒がない さかい	胡椒がない さかい
※ノデを多用	※カラを多用	※サカイを多用	※サカイを多用

矢島（2022）には、「談話資料と比較すると、落語の「会話」ではカラが少なく、音声落語ではサカイやヨッテ、『上方はなし』ではノデ・デ・ヨッテを高頻度で用いている様子が見て取れる」⁵とされている。

また、金沢裕之（2000）では、『上方はなし』の「お玉牛」では、ヨッテ系が5例、サカイ系が5例使われていることがあげられている。音声落語における各演目での形式別の使用数をまとめたのが表2である。マクラ部は省いた。

表2 各演目における原因理由の表現

演目	カラ	ノデ	デ	サカイ	ヨッテ	他
住吉駕籠（2001）	2	2	0	26	1	1
菫の火（1993）	0	6	1	2	0	0
菫の火（2001）	0	8	1	2	0	0
三枚起請（1991）	0	1	0	33	7(5)	0
お玉牛（1979）	1	0	1	11	0	0
お玉牛（2000）	6	1	0	3	0	0
高津の富（1996）	15	3	1	8	0	0
高津の富（2001）	9	16	1	9	3	0
高津の富（2003）	3	4	3	10	1	0
宿屋仇（2002）	10	1	1	18	1	0

⁴ 「天王寺詣り」「船弁慶」「くしゃみ講釈」を対象としている。

⁵ 音声落語は、「大阪落語 51 話（1903-26 年）落語家 10 名」（p.(28)）である。

金沢（2000）では、「大正～昭和においては、（多分、拮抗期を経た上で）徐々にサカイ系がヨッテ系を圧倒してきたものと考えられるのではなかろうか」（p. 153）とされている。峪口有香子（2022）では『近畿言語地図』⁶においてサカイが近畿中央部で盛んにみられることを述べている。

3 断定の表現について

3.1 ジャ

速記本では、「住吉駕籠」の侍、「苺の火」の和泉の暴れ旦那、「高津の富」の田舎者風体のお方、「宿屋仇」の万事世話九郎はジャを多用している。これらの使用は役割語だといえ⁷、同じ人物は音声落語でもジャを多用している。一方で、「三枚起請」「お玉牛」「くしゃみ講釈」では、同じ人物でも以下のような差異が確認でき、音声落語では上手の人物ほどジャを使用するようになっている。

- (1) 「そうか。訳を聞くと気の毒な訳やなア。」「今まで欺されて居たかと思ふと残念な。」
「そらお前の怒るものも尤もや。」「妹が不憫な。」「もつともや。」「残念な。」「道理。」
「口おいしいわやい」

「話を聞きゃ、もっともじゃな」「妹が不憫」「道理じゃ」「あいつがかわいそうや」「もっともじゃ」「不憫なわやい」（三枚起請 1991）

- (2) 「なんや。」

「なんじゃい」（お玉牛 2000）

- (3) 「(略) 今度此处へ講釈の新席が建つたんや、(略)」

「(略) ほんでまあ、講釈場にやり直したんじゃ」（くしゃみ講釈 1995）

上林葵（2019）ではジャは「マイナス感情・評価の対象に現場性を伴って接触したとき」に実現するとある。

一方で、「住吉駕籠」の酔っ払いは、速記本ではジャを多用するが、音声落語ではジャを用いない。

- (4) 「お袖知つてるぢやろうがな」／「嘘ぢやと思つて居るな」
「お袖や。知つてるやろ」／「お前嘘や思てるか」（住吉駕籠 2001）

3.2 ダス・ゴワス

丁寧は、速記本では駕籠屋や奉公人にダス・ゴワスの使用がみられるが、音声落語ではダスやゴワスが別の形式に替わり、ダスは少なく、ゴワスは使われなくなっている。

⁶ 2010 年から 2014 年にかけて、「その地域で生まれ育った 65 歳以上の方」（岸江他編（2017：2））に調査を行ったとある。

⁷ 竹村（2021）には、「作品の中には「大名将棋」や「苦ヶ島」のように武士が登場する話もあるが、彼らの台詞も役割語研究に資する可能性があるため、コーパスからはあえて除外しなかった」（pp. 230-231）とある。

- (5) 「(略) お宅まで遣らせて貰ひましたら結構だす」
 「(略) お宅まで送らせてもらいまひよか」(住吉駕籠 2001)
- (6) 「もうお帰りに成りました。これ斯う云ふお遊び方だす。」
 「えらいお客さんだんなあ。金を皆ばらまいて一文も持たんとすつと帰ってしまはりましたわ」(葎の火 1993)
 「えらい旦那さんでんなあ。ある金全部ばあつとばらまいて一銭も持たんとすつと帰ってしまはりましたわ」(葎の火 2001)
- (7) 「願ひが出来ませんもんだすやろか」
 「お願いできませんもんかいなと思ひましてな」(高津の富 1996)
 「ご無理願えんもんでっしゃろかな」(高津の富 2001)
 「お願いでけんもんでおまっしゃろかな」(高津の富 2003)
- (8) 「イエ然うちやごわせん (略)」
 「こないなるやないか。もう氣に障ったら堪忍して。(略)」(住吉駕籠 2001)
- (9) 「(略) お駕は何うでごわす。(略)」／「あゝ左様でごわすか。(略)」
 「(略) お駕籠はいかがでございます。(略)」／「はいさよで。(略)」(葎の火 1993)
 「(略) お駕籠はいかがでございますかいな。(略)」／「へえ、承知いたしました。(略)」
 (葎の火 2001)

4 否定の表現について

4.1 イデ・ヤヘン

速記本では、「関わいでも」(葎の火)「云はいでも」(高津の富)などイデの使用が確認できるが、音声落語には数が少なく、否定はほぼン・ヘンに統一されている。たとえば、速記本の「住吉駕籠」ではイデが多用されているが、音声落語では1例もみられない⁸。また、速記本ではヤヘンが確認できるが、音声落語ではヤヘンは使われていない⁹。

4.2 ナンダ

速記本では、マセナンダの使用がみられるが、音声落語では確認できず、音声落語のナンダはすべて普通体とともに使われている。

4.2 ナラン・イカン・アカン

竹村(2016: 32)には、速記本におけるナラン系の約64%が二重否定の当為表現であることが示されている。速記本で二重否定の当為表現が使われている箇所を音声落語で確認すると、当該内容があるものはすべて二重否定の当該表現になっている。

- (10) お客さんを引かんならんと云ふので、
 お客さんを引っ張らんならんというので、(高津の富 2001)
- (11) 「(略) 駕屋さんにお賃を上げねば成らぬ、(略)」
 「(略) 駕籠屋さんに駕籠賃を払わんならんねやが、(略)」(葎の火 1993)
 「(略) 駕籠屋さんに駕籠賃を払わんならんのじゃが、(略)」(葎の火 2001)

⁸ 米朝の「壺算」(1979年1月13日)では、ン・ヘンに加えてイデも多用されている。

⁹ お玉牛(2000)にはキエヘンの例が確認できる。

竹村（2016）には、「当為表現に次いで多いのが、四二例（約二三％）の「ドムナラン（どうも成らぬ）」という定型表現」（p. 32）であり、「ナランは、全体的な用例数が多いものの、そのほとんどは当為表現と「ドムナラン」の定型表現に固定化して使用されており、語法としては衰退傾向にあったと考えられる」（p. 33）とされている。音声落語におけるナラン・イカン・アカンの使用数をまとめたのが表 3 である。マクラ部は省いた。

表 3 各演目におけるナラン・イカン・アカン

演目	ヘン ナラン	(ドム) ナラン	ナラン	イカン	アカン
住吉駕籠（2001）	2	2	1	3	9(1)
葎の火（1993）	1	0	0	1	10
葎の火（2001）	1	0	0	3(2)	5
三枚起請（1991）	2	0	4	2	4
お玉牛（1979）	0	0	0	3	1
お玉牛（2000）	0	0	0	3	1
高津の富（1996）	0	2	1	5(1)	1(1)
高津の富（2001）	2	2	0	2(1)	3
高津の富（2003）	0	2	0	0	2(1)
宿屋仇（2002）	2	2	0	3	3
くしゃみ（1995.2）	0	0	0	2	8(1)
くしゃみ（1995.12）	1	1	2	4(1)	3(3)
くしゃみ（2000.2）	1	1	1	3(1)	5(1)

竹村（2016）には、「ナランの禁止表現は二〇例（約一〇％）、そして〈良くない〉の意味をもつ例は三例（約一％）と極めて少ない」（p. 33）とされている。矢島（2013：362）では、平成談話の二重否定の当為表現においてアカンが多用され、ナランは使用されていない様子が示されている¹⁰。

5 敬語の表現について

速記本より音声落語の方が尊敬語の使用が少ないことがあげられる。たとえば、「くしゃみ講釈」に注目し、胡椒を買う場面で客の動作への尊敬語の使用数をまとめたのが表 4 である。あいさつは省き、補助動詞も 1 とした。

表 4 「くしゃみ講釈」の尊敬語

尊敬語	1940 笑福亭松鶴	1995 桂福団治	1995 笑福亭仁鶴	2000 桂吉朝
アリ	12	8	5	13
ナシ	13	17	16	18

5.1 ヤハル

速記本では、「住吉駕籠」「葎の火」でヤハルの使用が確認できるが、音声落語では使用が確認できない。以下に速記本の用例と、音声落語に当該箇所があるものを示す。

(12) 「オイ〜違ふ〜オイ待て〜尋ねに来やアはつたんや」

「戻っといで。尋ねてはんねや、この人。根っから存知まへんな」（住吉駕籠 2001）

(13) 「キヤーツ。姐ちやんあんな処まで転こんで行きやはつた。」／「（略）あれ丈け皆が丁重にしやはるのは御親類かいナ。（略）」／「あゝお前処へ行きやはつたか。」

¹⁰ イカンが 3 例、アカンが 16 例。

「なにかいな。おまはんとこへ行たんかえ。(略)」(葎の火 1993)

「あんたどこへ行たんか。行たんかえ。(略)」(葎の火 2001)

音声落語で「行く」「来る」「する」に接続する尊敬語の使用数をまとめると表 5 になる。

あいさつは省いた。中井精一

(2009a)¹¹によれば、五段活用は「大阪市を中心に「言いはる」(iiharu)が優勢で「言わはる」(iwaharu)は河内地方で優勢と言える。(中略)尊敬の「ハル・ヤハル」は、「ナサル」が幕末から明治初頭の時期に変化して生じた助動詞である」(p. 231)。さらに、中井(2009b)によれば、「五段以外の動詞にはミヤハル(見る)・シヤハル(する)・キヤハル(来る)の

表 5 各演目における「行く」「来る」「する」

演目	ヤハル	ナハル	ハル	ナサル	他
住吉駕籠 (2001)		0/2/4			
葎の火 (1993)		0/0/1	1/0/1	1/0/0	
葎の火 (2001)		0/0/1	1/1/0	1/0/0	1/0/0
三枚起請 (1991)					1/0/0
お玉牛 (1979)		2/1/0			0/0/1
お玉牛 (2000)		2/1/0			
高津の富 (1996)		1/0/2	0/0/1		
高津の富 (2001)		0/0/2	0/0/1	0/0/1	3/0/0
高津の富 (2003)		0/0/11	0/0/2		
宿屋仇 (2002)		0/0/1			
くしゃみ (1995.2)		1/1/1	0/2/0		
くしゃみ (1995.12)		1/1/6			1/0/0
くしゃみ (2000.2)		0/1/2			

ように「ヤハル」で接続するのが明治中期頃までは一般的であった。／それが明治後期以降、キヤハル(キヤハル)→キハルのように、ヤハルの「ヤ」が脱落して「ハル」の形をとるようになった。(中略)大阪市に近い地域ではキハルのような形式をより多く使用する傾向にある。一方、内陸部などを中心に古いキヤハルが使用される傾向にある」(p. 231)。

5.2 ナアル

速記本では、「三枚起請」「高津の富」でナアルの使用が確認できるが、音声落語では使用が確認できない。以下に速記本の用例と、音声落語に当該箇所があるものを示す。

- (14) 「(略) 待つてとくなアレやと内らへ這入つて持て来た風呂敷包。(略)」／「(略) なんでそれを先に云ふとくなアレへんね。(略)」／「(略) あんたら別々においなアル依てにそんな目に逢ひまんねで。(略)」／「オゝいやゝの、貴方反古を持つて歩いてなアルのか嬉しやの。(略)」／「(略) さうならさうと打明けて云ふとくなアつたら宜いやないか。(略)」／「(略) あんたら三人徒党してお来なアつたんやな。(略) 叩くのんならお金を積んで叩いとくなアレ。(略) 証文持つて来て貰うとくなアレ。(略)」
- 「(略) ちょっと待つてと、中へ入ったらこんな風呂敷包み出してきて、(略)」／「(略) なんでそれをはよ言うてくれはらしまへん。(略)」／「(略) あんさん方ら別々にお越しになる。(略)」／「まあ、源さん反古持つようになったの。(略)」／「(略) 別れたいなら別れたいとはっきり言うたらどやねん。(略)」／「(略) あんさん方徒党しておいなはったか。(略) 金積んでから、どうぞどつき殺しておくれやす。(略) 証文持つて直に来てもらうように言うて」(三枚起請 1991)

¹¹ 調査は、1990 年 7 月から 1992 年 9 月にかけて行われた(岸江(2009: 1))。

(15) 「アゝ左様か、貴方も買ふてなあるのか、(略)」／「惚気やおまへん。まあ、聞きなアレ、(略)」／「(略) 何も食べんと寝んね仕な一れ。(略)」

「あんたも買うてなはる。(略)」／「いえいえ。惚気言うてるわけやおまへんねやけどな。(略)」／「(略) なんにも飲まん食べんと寝なはれ。(略)」(高津の富 1996)

「そうでっか。へ、あんたも買うてる。(略)」／惚気やおまへんがな。まあ、聞きなはれ。(略)」／「(略) 何も食べんと寝なはれ。(略)」(高津の富 2001)

「そうですがな。あんた買うてはりまんの。(略)」／「惚気やおまへんがな。まあ、聞きとおくれやすいな。(略)」／「(略) なんにも食べんと寝んねしなはれ。(略)」

(高津の富 2003)

5.3 ナサル・ナスル

速記本の「住吉駕籠」では、ナサルやナスルが多用されているが、音声落語では使用が確認できない。以下に速記本の用例と、音声落語の当該箇所があるものを示す。

(16) 「(略) 何うかお乗りなすつて、人間二人助かることだす、(略)」／「へエ向うで一服なさるので」／「(略) 歩いてお帰りなすつたら宜いちやありまへんか」／「(略) モシ何うぞ親分御了簡なすつて下さい、(略)」／「(略) あんじよ懷中へ入れてお呉んなされ」／「(略) 南から来てまた南へ行つて居なさるがな、方角を取り違へて居なさるのやろう」／「へエ旦那何時の間にお這入りなすつて」／「イエ、お乗りなすつて下され (略)」

「(略) 助ける思て、乗ったとくなはれ」／「あっこで一服」／「(略) この茶店やったら乗る手間で歩いた方が早いがな」／「(略) 親方、どうも相すまんこって。(略)」／「(略) 懷へ入れる」／「(略) 南から来てまた南へいnderがな。方角も何も分からんようになってるねん。(略)」／「ああ、駕籠の中でやすかいな。外ばっかり探してました。まさか、あんた中に乗ってはるとは思わんさかい」／「出てもうてはどんなりまへん。よう、よう乗っておくんなはった。(略)」(住吉駕籠 2001)

金沢 (2000) には、明治期の状況として落語速記本では「ナサル」は依然として有力な語形ではあるが、若年層においてはかなり「ナハル」への移行が見られる」(p. 211) こと、落語 SP レコードでは「ナサル系敬語辞の主流が、(「ナサル」から)「ナハル」にはっきりと移っていること」(p. 213) を示されている。

5.4 ヤス

速記本では、「三枚起請」にオを伴わないヤスの使用が確認できるが、音声落語ではオ～ヤスである。

(17) 「おいでやす。源さん如何してゝやつたんや。(略)」／「(略) 黙つて恐い顔をしてどないしてやつたんや。(略)」

「(略) ちょっと待つておくれやつしゃ」／「どなたも皆お上がりやす」

(三枚起請 1991)

6 その他の表現について

6.1 自称詞

同一の登場人物の自称詞の使用に注目すると、男性は速記本では「俺」「私」を多く使用するが、音声落語では「わし」「わい」を多く使用している。また、侍の自称詞に注目すると、たとえば、「宿屋仇」では速記本は「某」「拙者」を使用するが、音声落語は「身ども」を使用している。

6.2 はばかりさん

速記本では、上手の人物は「憚りさん」のみを使用し、下手の人物は「おおきに」やアリガトウ系を使用している¹²が、音声落語では、上手の人物も「おおきに憚りさん」のように「おおきに」を使用するようになっている。

7 その他の表現について

速記本と音声落語を比較すると、60年ほどの隔たりのなかで時代とともに使われなくなっている方言形を確認することができる一方で、1990年代、2000年代には使われなくなっている方言形が音声落語では確認できた。このことから、上方落語では古い方言形が古典らしさを表現するために使われており、一部の方言形は形式化していると考えられる。

引用文献

- 上林葵（2019）「関西方言における終助詞的断定辞「ジャ」の機能—マイナス感情・評価の提示—」『日本語の研究』15（2）、pp. 1-17
- 岸江信介（2013）「大阪のことば地図—概要—」『大阪のことば地図』和泉書院、pp. 1-7
- 岸江信介・清水勇吉・峪口有香子・塩川奈々美 編（2017）『近畿言語地図』徳島大学日本語学研究室
- 金沢裕之（2000）『近代大阪語変遷の研究』和泉書院
- 峪口有香子（2022）「から・ので—原因・理由を表す接続助詞の地域差」『地図で読み解く関西のことば』昭和堂、pp. 238-250
- 竹村明日香（2016）『『上方はなし』コーパスを通してみる京阪方言語彙—近世上方語及びナラン・イカン・アカンの諸相—』『国語語彙史の研究』35、pp. 23-40
- 竹中明日香（2021）『『上方はなしコーパス』について—近代大阪方言の速記落語—』『コーパスによる日本語史研究 近代編』ひつじ書房、pp. 229-250
- 田島優（2022）「上方のオーキニの発生と定着」『近代語研究』23、近代語学会、pp. 183-206
- 中井精一（2009a）「項目 090 《ハル（接続）》」『大阪のことば地図』和泉書院、p. 231
- 中井精一（2009b）「項目 091 《キハル・キヤハル》」『大阪のことば地図』和泉書院、p. 231
- 矢島正浩（2013）『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院
- 矢島正浩（2022）『『上方はなし』に描かれる文法—原因理由辞を指標として—』『国語国文学報』80、愛知教育大学国語教育講座、pp. (25)-(48)

¹² 田島優（2022）には、江戸の影響で「上から下への表現から下から上への表現へと変化した」ことが指摘されている。

方言オノマトペの分布と変遷―「小声で泣く様子」を例に―

赤間 咲良¹

1. はじめに

方言オノマトペの研究では、一地点における形態的特徴の記述などが行われつつあるものの、全国を対象とした地理的研究は僅かである。しかし、個々のオノマトペの分布と解釈は、各地点の形態的特徴を地理的な視野から相対化したり、その方言形成について考察したりするために有効だと思われる。そこで、本発表ではひとつの事例研究として、「小声で泣く様子」を表すオノマトペを対象とし、その形態的特徴がどのような地域差として表れてくるのか、また、オノマトペの分布がどのように形成されてきたのかを明らかにする。

2. 先行研究

方言オノマトペの地理的な研究として、都竹（1965）、三井・井上（2007）、小林（2010）などがあげられる。都竹（1965）や三井・井上（2007）では、文献資料や談話資料をもとに全国の方言オノマトペの特徴を概観し、大まかな地域差を明らかにしている。また、小林（2010）では、「大声で泣く様子」のオノマトペについて、地理的分布データを用いて形態的特徴の地域差と歴史を考察しており、本発表と直接的に関連している。「大声で泣く様子」のオノマトペは母音で始まる語形が主流であり、「小声で泣く様子」のものとは異なると言及されているものの、後者の実態は明らかではない。本発表では、方言オノマトペの形態的特徴における地理的分布とその形成を問題とし、地域差と変遷がどう関係するかを解明していく。また、文献との対照も行い、中央語の変遷との対応についても考察する。

3. 調査方法

3.1. 調査データ

(1) 方言資料

方言資料は、東北大学方言研究センターが 2000 年度から 2002 年度に実施した「消滅する方言語彙の緊急調査研究」によるものである。この研究は、方言地理学的な分布を明らかにすることを目的としたもので、全国を対象とした通信調査によりデータを収集している。本発表の調査対象である、「小声で泣く様子」を表すオノマトペは、第 6 調査票（2002 年度調査）の 42 番目の項目の回答として設定されている。調査文は次の通りである。

42、声を出さずにしくしく泣くようすを、どのように泣くと言いますか。

参考クシクシ、シカシカ、ゾメゾメ、ニシリクシリ、ヘチョヘチョ、メソリメソリ

¹ あかま さくら(東北大学大学院生) akama.sakura.r1@dc.tohoku.ac.jp

調査によって得られたこの項目の回答は 922 地点であったが、そのうち、当該市町村で言語形成期を過ごし、現在もその市町村に居住する話者のもの 786 地点分のデータを資料とし、分析する。

なお、質問に制約があることから意味の考察には立ち入らず、形態を中心に見ていく。

(2) 文献資料

文献資料は、『日本国語大辞典』『角川古語大辞典』などの辞書類と『日本語歴史コーパス』（短単位での語彙素検索）を使用し、当該のオノマトペを収集した。

3.2. 対象とするオノマトペ

対象とするオノマトペは副詞的なものとし、「シクシク（と）泣く」のほか、「シクシク」単体で回答されたものも対象とした。一方、動詞化したものや名詞化したものは扱わなかった。「クッスンクッスン」と「クツスンクッスン」など、表記が異なっても同じ発音だと思われる場合もあり、その場合は同一語形とみなした。

回答で得られた語形がオノマトペであるか迷った場合、『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』『日本国語大辞典』『日本方言大辞典』を用いて確認し、そこに記載があるものをオノマトペとして認定した。

4. 考察

4.1. 分析観点

本発表では、オノマトペの語形を「語基」と「オノマトペ辞」とに分けて考える。語基について、「シクシク」を例としてあげると、「シク」を語基として認定し、「シクシク」は語基「シク」が反復していると捉えた。

「オノマトペ辞」は、川越（2014）によると、「オノマトペが語として機能する際に必須の要素」である。また、その役割は、「オノマトペの意味の中心となる語基からさまざまな語形を派生させる機能」と述べている。一方で、語基の中に割って入って入るものは「強調辞」として別に考えている。本発表では意味については深入りできないこともあり、語基に付加するものは、語基の中に割って入って入るものも含めて全て「オノマトペ辞」として扱うことにした。本発表のオノマトペ辞は、促音、撥音、ラ・リの 4 つを認定した。

さて、全回答のうち 100 地点以上から回答のあった語形は、「シクシク」と「メソメソ」である。「小声で泣く様子」を表すオノマトペでは、「シクシク」と「メソメソ」が過半数以上を占めており、他の語形も形態の類似性をもとにどちらかのグループに分類できる。そこから、大きく「シクシク類」と「メソメソ類」に分けて考えていく。具体的に言うと、「シクシク類」には「クシクシ」「グシグシ」「ヒックヒック」などを含めた。また、メソメソ類には「メチョメチョ」「ヘチョヘチョ」「ゾメゾメ」などを含めた。

4.2. 語基の分布と変遷

4.2.1. シクシク類

(1) 分布

シクシク類は 227 地点から回答があった。全国的に分布しているが、近畿と西日本に比較的多い。シクシク類の語形には、クの子音が有声化した「シグシグ」やシとク・グの位置が交替した「クシクシ」「グシグシ」などの形がみられた。

そこで、語基の子音に注目し、それらの組み合わせの分布を示したものが図 1 である。まず、k と g の対立では地域差が見られなかった。一方、s と k (g) の対立では地域が現れた。つまり、「k・s」「g・s」のように、k (g) が語頭に立つ語形は、東北北部、近畿周辺、九州南部の 3 地域に固まっており、東西の周辺及び中央に分布している。

(2) 変遷

図 1 の分布を踏まえて、「k・s」「g・s」を「A」、「s・k」「s・g」を「B」として表したものが図 2 である。図 2 では、A は東北、近畿、九州、B はそれら以外の地域であり、これに方言圏論を適用すれば、「A→B→A」と変化したと推定される。

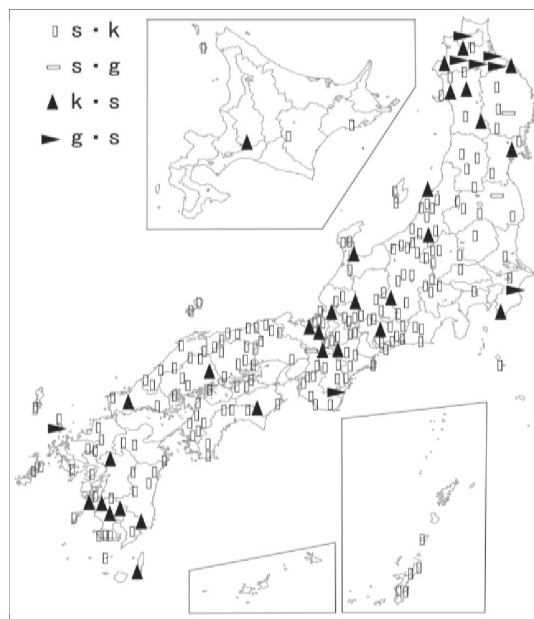


図 1 シクシク類の語基の分布

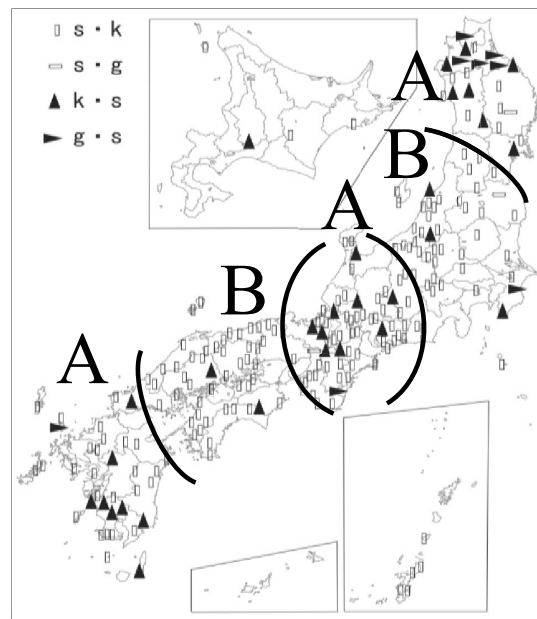


図 2 シクシク類の語基の分布（解釈図）

4.2.2. メソメソ類

(1) 分布

メソメソ類は 475 地点から回答があった。メソメソ類もシクシク類と同様に、全国的に分布しているものの、やや東日本に比重がある。メソメソ類の語形では、語頭子音の b が p や h に交代した「ペソペソ」「ヘチョヘチョ」、2 音節目子音の s が c に交代した「メチョメチョ」「ベチョベチョ」などの形がみられた。

そこで、語基の子音に注目し、それらの組み合わせの分布を示したものが図 3 である。

これによれば、「m・s」はまんべんなく分布しているが、「b/p/h・s」「m・cj」「b/p/h・cj」といった語形は東北や関東に偏り、四国・九州にも存在することがわかる。

(2) 変遷

図3の分布を踏まえて、b/p/hやcjを含むものを「A」、それ以外を「B」として表したものが図4である。図4では、Aは東日本と九州・四国、Bはその他の地域であり、これに方言圏論を適用すれば、「A→B」と変化したことが考えられる。

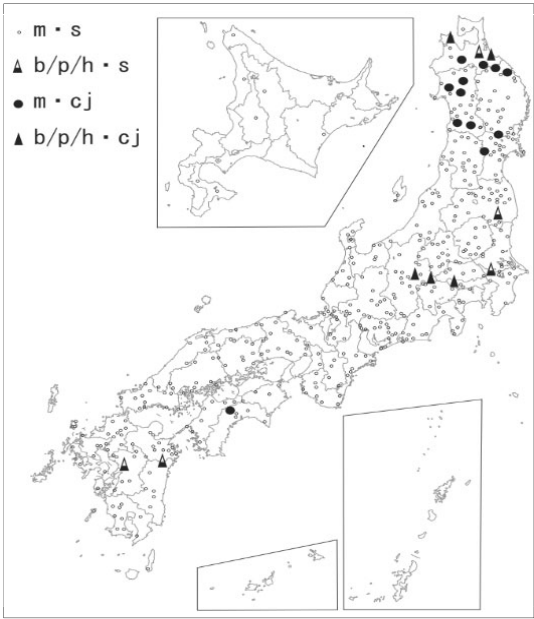


図3 メソメソ類の語基の分布

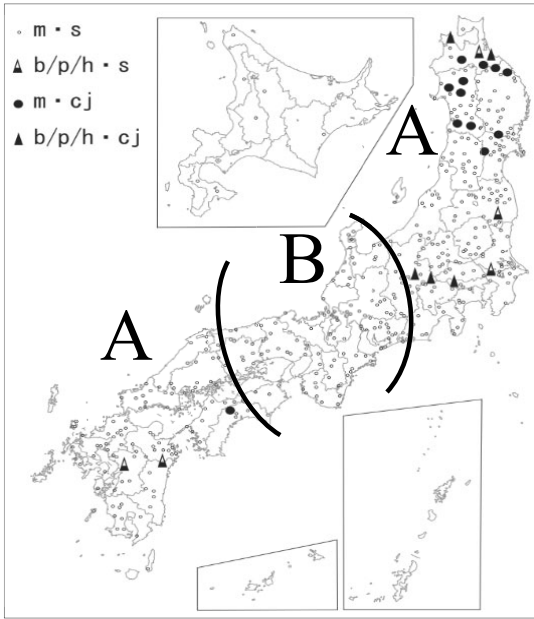


図4 メソメソ類の語基の分布（解釈図）

4.3. オノマトペ辞の分布と変遷

(1) 分布

まず、オノマトペ辞が付加された語形の一覧が表1である。シクシク類の「シクイシクイ」「シクイハクイ」は、リがイに変化したとみなし、オノマトペ辞の「リ」に分類した。シクシク類では促音、撥音、ラ・リが付加されており、メソメソ類では促音、ラ・リの2種類が付加されている。

そこで、シクシク類、メソメソ類を総合し、オノマトペ辞

表1 オノマトペ辞付加のオノマトペ

オノマトペ辞	シクシク類	メソメソ類
促音	シクシク、ヒクヒク、ギクギク、クッスクッス	メッソメッソ、メッチョメッチョ、ベッチョ
撥音	シクンシクン、スケンスケン、クスンクスン、クシュンクシュン	
ラ・リ	シクリシクリ、グスリグスリ	メソラメソラ、メソリメソリ、メツリメツリ、ペソリペソリ
促音＋撥音	クッスンクッスン	
促音＋ラ・リ	シククリシククリ、シククイシククイ、シククイハククイ	

の分布の様子を示したものが図 5 である。図 5 では、促音が付加されたものは東北と九州という日本の周辺地域に多くみられ、ラ・リが付加されたものはそれより内側に分布し、さらに日本の中心部になるとオノマトペ辞がほとんど用いられていないことがわかる。

(2) 変遷

図 5 の分布を踏まえて、促音を含むものを「A」、ラ・リを含むものを「B」、オノマトペ辞なしを「C」として示したものが図 6 である。これに方言圏論を適用すれば、「A→B→C」という変化が描け、オノマトペ辞が促音からラ・リへ、さらにオノマトペ辞をなしへと変遷したと考えることができる。

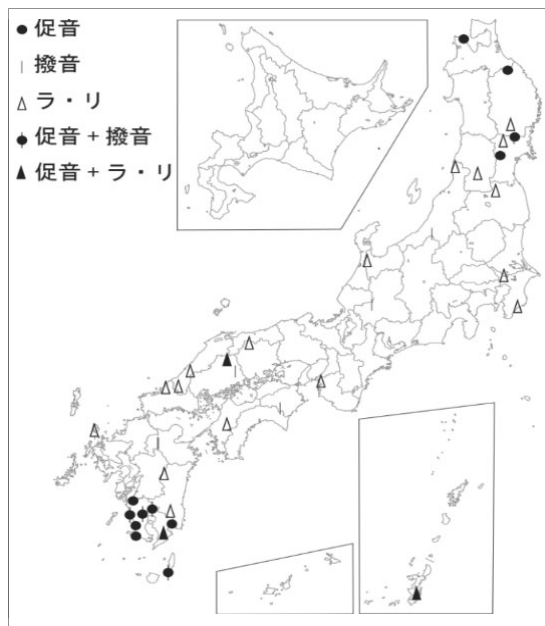


図 5 オノマトペ辞の分布

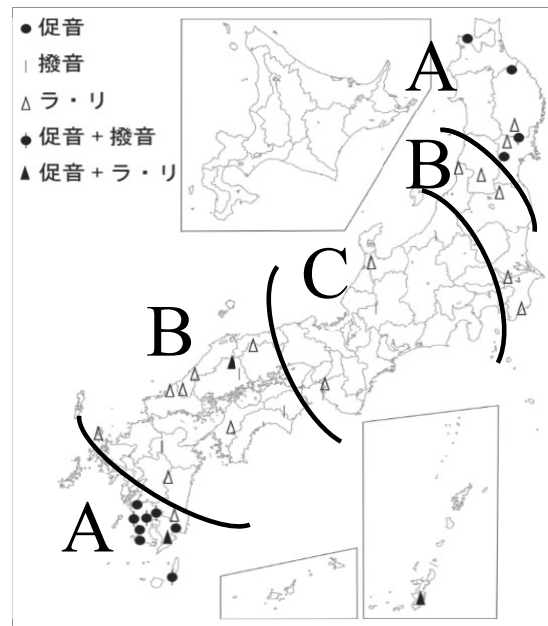


図 6 オノマトペ辞の分布（解釈図）

5. 文献との対照

文献で出現したオノマトペを整理したものが表 2 である。表 2 では、オノマトペが出現した年代を記号で表した。○は「京都・大阪周辺」の文献に、▲は「江戸・東京周辺」の文献に現れたことを示す。語基欄の (A) (B) は分布の解釈図の記号と対応している。

表 2 をもとに、「シクシク類」「メソメソ類」「オノマトペ辞」において、方言オノマトペの変遷と文献でのオノマトペの出現状況との対応を考察していく。

(1) シクシク類

シクシク類のうち、文献で出現したオノマトペは「シクシク」「スクスク」「クシクシ」「グシグシ」「グスリグスリ」である。表 2 によると、B (s・k, s・g) に属する「シクシク」はすでに 13 世紀から文献に現れ、最も古くから使用されている語形であることがわかる。一方、A (k・s, g・s) に属する語形では、「クシクシ」が 17 世紀に、「グシグシ」が 18 世紀に、「グスリグスリ」が 20 世紀に現れており、その出現は「シクシク」に大きく遅れる。

表 2 文献で出現したオノマトペ

語基 (分布の 解釈)	シクシク類					メソメソ類			
	s・k、s・g (B)		k・s、g・s (A)			m・s (B)			b・s、 m・cj など (A)
語形 世紀	シク シク	スク スク	クシ クシ	グシ グシ	グスリ グスリ	メロ メロ	メソ メソ	メソリ メソリ	ベソ ベソ
13	○								
14	○								
15	○								
16	○								
17	○		▲			○			
18	○			▲		○	▲	▲	▲
19	○					▲	○ ▲		▲
20	○ ▲	▲			▲		○		

ただし、表 2 の○と▲の現れ方に注目すると、「シクシク」は古くは京都・大阪周辺の文献にしか現れず、20 世紀になってようやく江戸・東京周辺の文献に登場して来ている。一方、「クシクシ」「グシグシ」「グスリグスリ」は、京都・大阪周辺の文献には現れず、江戸・東京周辺の文献にのみ出現していることがわかる。

そこで、それらの変遷と分布との関係が分かりやすいように描いたのが図 7 である。白矢印は通時的な変化を表したものであり、それぞれ京都・大阪周辺と、江戸・東京周辺での変遷を示している。斜めの破線は、それらの地域の変遷と分布との対応関係を表示したものである。

まず、江戸・東京周辺での変遷について考えてみよう。

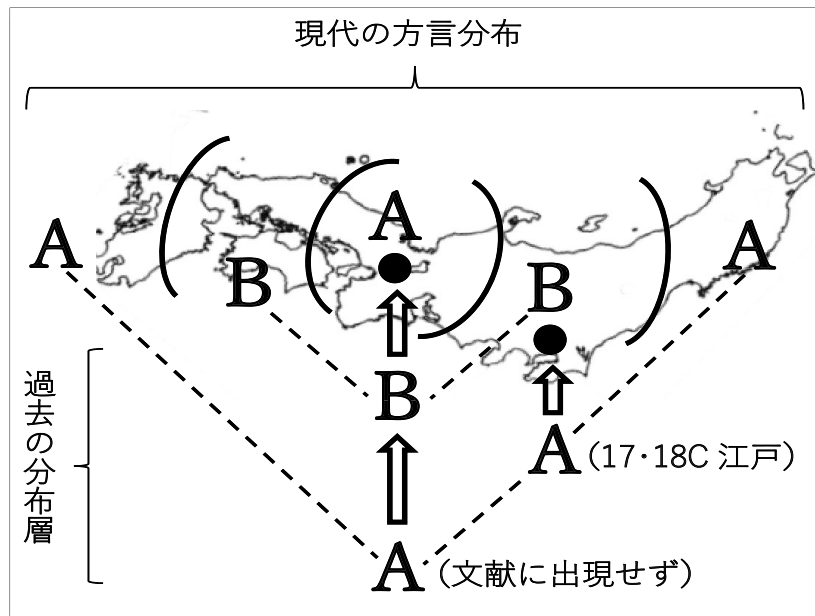


図 7 シクシク類の変遷と分布との対応

現在、ここは B の地域となっているが、表 2 の文献の現れ方から明らかなように、近世 17・18 世紀には、この地域は A の領域であったことが明らかである。すなわち、江戸・東京周辺は近世から現代にかけて「A→B」と変わったことになる。方言分布から推定された「A→B→A」という変遷は中央（京都・大阪）のものであり、そのうちの最初の「A→B」の部分が江戸・東京で実現しているとみなすことができる。

次に、京都・大阪周辺について検討してみる。表 2 の文献の現れ方からは、この地域は一貫して B のみであったことになる。しかし、方言分布から、現在この地域に A が使用されていることは確かである。したがって、比較的最近、京都・大阪周辺では「B→A」という変遷が起こったと推定される。これは、「A→B→A」の後ろの「B→A」の部分と対応する。それでは、最初の「A→B」の部分はどうか考えたらいだろうか。この点については、B が載る文献の初出が 13 世紀であり、それ以前の状況が文献からはわからないことがヒントになりそうである。すなわち、13 世紀以前、京都には A が存在したが、それを載せる文献に恵まれなかったという可能性である。もし、そのように考えることができれば、それは「A→B→A」の変遷が実際に起こったということになり、方言による推定とも一致することになる。

(2) メソメソ類

メソメソ類のうち、文献で出現したオノマトペは「メロメロ」「メソメソ」「メソリメソリ」「ベソベソ」である。いずれも近世以降の出現であり、その点で、「シクシク」に比べて新しい語形であると言えることができる。また、これらの語形の多くは、江戸・東京周辺の文献に現れており、東日本的な性格を持つ可能性も考えられる。先に、分布上、メソメソ類はシクシク類に比べて東日本に分布の比重があるようだと指摘したが、文献での出現状況はその特徴とも呼応すると言えそうである。主要な語形である「メソメソ」の出現が、京都・大阪周辺の文献では 19 世紀であるのに対して、江戸・東京周辺の文献では 18 世紀であるというように、わずか 1 世紀の差ではあるが、東日本が先行していることも合わせて考えるべきである。

ただし、「メロメロ」の出現は 17 世紀であり、メソメソ類の中では最も早い。しかし、この語形は方言分布に痕跡が見当たらず、急速に衰退したものらしく、歴史的な解釈が難しい。また、方言分布による推定で注目された A（b・s、m・cj など）の語形としては、文献では「ベソベソ」しか採取されず、その出現は他のメソメソ類と同時期であるため、やはり通時的な解釈が困難である。「A→B」という変遷は、文献からは立証できなかった。

(3) オノマトペ辞

オノマトペ辞が付加されたオノマトペのうち、文献で出現したものは「グスリグスリ」「メソリメソリ」であった。表 2 より、前者は 20 世紀、後者は 18 世紀でどちらも江戸・東京周辺の文献に現れていることがわかる。東京周辺は、現在、B（ラ・リ）から C（オノマトペ辞なし）へ移行する境目の位置にあるが、近世もほぼ同様の状態であったか、ある

いは、B の勢力が今よりも強かった可能性が考えられる。方言分布から推定された「A→B→C」の A（促音）の段階は、残念ながら文献からはとらえることができなかった。

6. おわりに

本発表では、「小声で泣く様子」のオノマトペを事例として、その語形の地理的・歴史的展開について考察した。語基とオノマトペ辞に分けて分析した結果、いずれについてもかなり明瞭な方言分布が存在することが明らかになった。その分布パターンには、他の言語分野で指摘されている中心と周辺という対立に類似する傾向が認められ、方言圏論的な解釈が適用できるのではないかと考えられた。文献資料の調査により、その一部は補強できたものの、そもそもオノマトペの文献への出現が十分でないことから、古い時代の状況については不明の点が残った。

今回は「小声で泣く様子」のオノマトペについて取り上げたが、先行研究にある「大声で泣く様子」のオノマトペとの違いについては今後考えてみたい。また、今回は保留としたシクシク類とメソメソ類の意味的な関係も、これから取り組むべき課題と言える。

参考文献

- 川越めぐみ (2014)「山形県寒河江市方言におけるオノマトペの強調法」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』25-2 pp.39-49.
- 小林隆・篠崎晃一 (2003)『消滅の危機に瀕する全国方言語彙資料（「環太平洋の言語」成果報告書 A 4-021）』大阪学院大学情報学部
- 小林隆 (2010)「オノマトペの地域差と歴史―「大声で泣く様子」について―」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見―知られざる地域差を知る―』ひつじ書房 pp.21-47.
- 都竹通年雄 (1965)「方言の擬声語・擬態語」『言語生活』171 pp.40-49.
- 三井はるみ・井上文子 (2007)「第 2 章 方言データベースの作成と利用」小林隆編『シリーズ方言学 4 方言学の技法』岩波書店 pp.39-89.

使用した辞書・データベース

頼原退蔵著・尾形侑編 (2008)『江戸時代語辞典』角川学芸出版、大久保忠国・木下和子編 (1991)『江戸語辞典』東京堂出版、小野正弘編 (2007)『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館、尚学図書編 (1989)『日本方言大辞典 (全三巻揃)』小学館、上代語辞典編修委員会編 (1967)『時代別国語大辞典 上代編』三省堂、土井忠生・森田武・長南実編 (1980)『邦訳 日葡辞書』岩波書店、中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編 (1982～1999)『角川古語大辞典』角川書店、日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2000～2002)『日本国語大辞典 第二版』小学館、前田勇編 (2003)『江戸語大辞典 新装版』講談社、前田勇編 (1964)『近世上方語辞典』東京堂、室町時代語辞典編修委員会編 (1985～2001)『時代別国語大辞典 室町時代編』三省堂、国立国語研究所『日本語歴史コーパス』(中納言 2.7.1 データバージョン 2023.03) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search> (最終閲覧日: 2023/04/17)

郷土料理〈しもつかれ〉を表す語の形式と方言分布

新井 小枝子¹

1 はじめに

栃木県を中心とした北関東及び福島県南部において、初午（2月最初の午の日／2023年は2月5日／3月1日が旧暦2月10日）に食される〈しもつかれ〉という郷土料理がある。

発表者は、この料理の継承、振興、発信を図ることを目的とした「とちぎ食文化調査研究発信事業」（令和4年10月～令和5年3月／栃木県教育委員会事務局文化財課／文化庁「食文化ストーリー」創出・発信モデル事業）において、言語（方言）の領域を担当した。

2 本発表の目的

〈しもつかれ〉という料理の起源は、『宇治拾遺物語』（1242年までの成立か）にあるとされる。初出の語形は「すむつかり」で、近江国浅井郡の郡司による発話に現れる。栃木県の事例としての初出は、『海録』（1820～1837）のスミズカリである。語の形式も、それが表す料理の内容も、時間と共に変容し、かつ、存在する空間を移して現在に至っている。「すむつかり」が起源だとされる語形の変容を、方言分布の推移によって把握し、料理の内容が変化の様子と照合しつつ、語形変化が生ずる要因を述べる。

まず、栃木県における〈しもつかれ〉の内容を調査、記述し、料理としての実体を把握する。〈しもつかれ〉の実体を、その通時的変化に注視しながら、玉村豊男（1980）の「料理の四面体」に位置づけて記述を試みる。時代ごと、地域ごとの多様性を述べる。

さらに、その実体への名づけである語形を考察する。「とちぎの食文化調査研究委員会」が調査した方言データを用い、令和4（2022）年における〈しもつかれ〉を表す語の方言地図を作成し、現在の方言分布の実態を明らかにする。この分布地図を、先行する大橋勝男（1976）および栃木県教育委員会（1973）と比較対照し、分布の推移を考察する。

3 郷土料理〈しもつかれ〉の内容（実体）とその歴史

3-1 『宇治拾遺物語』にみる内容と語形

『宇治拾遺物語』（巻4ノ17「慈恵僧正戒壇つきたる事」）には、次のようにある。

これも今は昔、慈恵僧正は、近江国浅井郡の人なり。叡山の戒壇を、人夫かなはざりければ、え築かざりける比、浅井の郡司は親しきうへに、師壇にて仏事を修する間、此僧正を請じたてまつりて、僧膳の料に、前にて大豆をいりて、酢をかけけるを、「なにしに酢をばかくるぞ」ととはれければ、郡司いはく、「あたゝかなる時、酢をかけつ

¹ あらい さえこ（群馬県立女子大学）

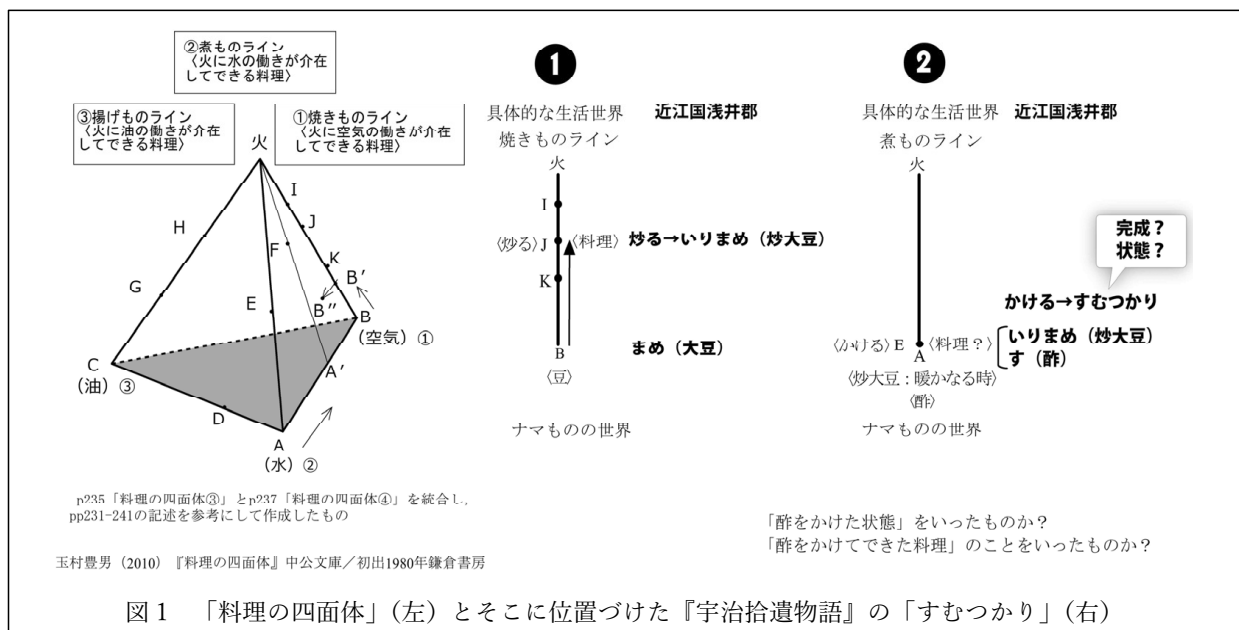
れば、すむつかりとて、にがみて、よくはさまるゝなり。しからざれば、すべて、は
さまれぬなり」といふ。(新日本古典文学大系 42 岩波書店 1990／下線は発表者)

文脈から考えると、この「すむつかり」は、「炒った大豆に酢をかけた料理」を指す語な
のか、「酢をかけてにがみている（皺の寄った）状態」を指す語なのか判断に迷うところ
はある。どちらであったとしても、「すむつかり」に「にがみて」という説明が続くことか
ら、「すむつかり」という表現の成り立ちは、「す」と「むつかり」に分けられよう。そう
であるとすれば、「す」は〈酢（柚酢か）〉を指す語であろう。「むつかり」は、動詞「むつ
かる（憤る）」の連用形とみてよいだろうか。「むつかる」は、上代から見られる語であり、
「機嫌が悪くなる。ぶつぶつと小言をいう。腹を立てる。むつける」（『日本国語大辞典 第
2版』）という意味用法がある。機嫌が悪くなった時の人の顔に皺が寄るということと、大
豆が酢の水分を吸って皺が寄るということを重ね合わせた比喩的な表現といえよう。

3-2 〈しもつかれ〉の内容が複雑化していく様子

『宇治拾遺物語』にある「すむつかり」と、栃木県およびその周辺地域に存在している
料理とでは、〈大豆〉を用いる点が共通する。本節では、〈しもつかれ〉の作り方を玉村(1980)
の「料理の四面体」(注1・図1左側)に位置づけて記述し、料理の内容の違いを確認する。

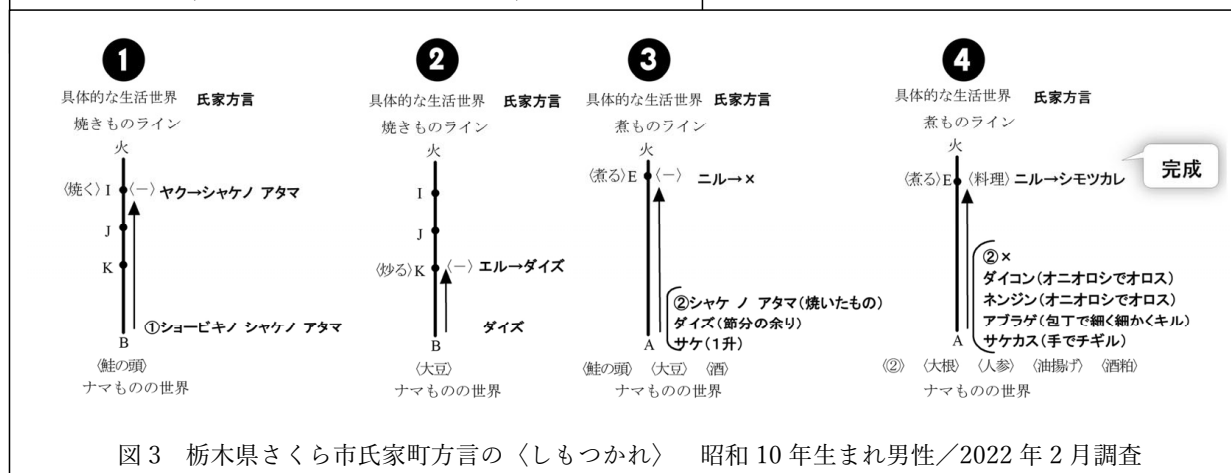
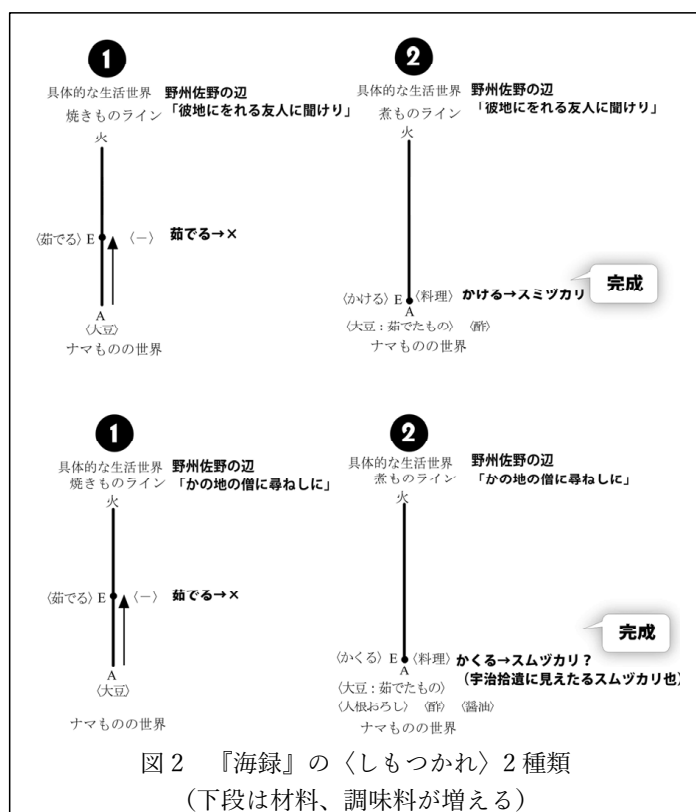
図1右側は『宇治拾遺物語』の「すむつかり」である。❶は、料理の四面体から、空気
を媒介とした焼きものラインを取り出して示したものである。「大豆をいりて」の部分
は、焼きものラインにおいて加熱されるということを示す。さらに、「酢をかけけるを」の部
分は、煮ものラインに位置づけられ、加熱されずに「ナマものの世界」にあるということな
ので、❷のように図示できる。「すむつかり」が料理の完成品を表しているとすれば、これ
でできあがりである。かなり単純な料理である。図2は栃木県の料理としての初出『海録』
にある2種類の記述を、料理の四面体に位置づけたものである。図1と同様に、工程は単



純であるが、特に下段では、材料に〈大根おろし〉がみられ、調味料も多様化している。

一方、栃木県さくら市氏家の〈しもつかれ〉を、料理の四面体に位置づけると、図3のようになる。図1、図2に比べると、複雑な料理であることがみてとれる。①と②が焼きもののラインである。①はショービキノ シャケノ アタマ（塩引きの鮭の頭）をヤク（焼く）という工程である。②はダイズ（大豆）をエル（炒る）という工程である。焼きもののラインは、二つの食材を別々に準備する段階である。③と④は煮もののラインである。③は、①のシャケノ アタマと、②のダイズを合わせて、ふたたび「ナマものの世界」からあらためて加熱が行われる。サケ（酒）でニル（煮る）という工程である。④は、③とダイコン（大根）、ネンジン（人参）、アブラゲ（油揚げ）、サケカス（酒粕）を合わせて、ふたたび「ナマものの世界」から加熱が行われる工程である。これで、料理の完成となりシモツカレという名づけが行われる。

さくら市氏家の①～④は、当地における手持ちの材料と工夫によるものである。『宇治拾遺物語』の「すむつかり」が表す意味内容（料理の内容あるいは大豆の状態）から、さくら市氏家のシモツカレが表す意味内容への変化の過程には、地域にそなわる手持ちの材料にどのようなものがあるかということや、料理を作る方法としてどのような工夫がくり返されてきたかが関与していると考えられる。それゆえに、内容が変化するのだろう。〈大豆〉を使うという基本があり、他の材料との混合・非混合、加熱・非加熱、酢の使用・不使用



などによって多様性が認められる。

4 〈しもつかれ〉の方言分布の実態

4-1 2022 年調査の方法と地図化の方針

令和 4（2022）年現在の〈しもつかれ〉を表す語の方言地図を作成するにあたり、まず「とちぎ食文化調査研究発信事業」による調査の方法を確認する。各自治体に依頼を行い、アンケート調査を実施した。このアンケートでは、回答者の生年や言語形成地といった、方言話者としての情報は得られていない。したがって、得られたデータは、調査時（令和 4 年）において各自治体で用いられていた語形として捉え、その時点での共時態として扱う。

料理として完成した〈しもつかれ〉の名称をたずねる質問文は次の通りである。

質問文：設問 1（注 2）で「①ある」、「②過去にあったが現在はない」と回答した市町村にお聞きします。その料理は何と呼ばれていますか（呼ばれていましたか）。カタカナでお答えください。（複数回答可）

さらに、得られた語形は「平成の合併前（平成 11 年 3 月 31 日時点）での市町村毎」に整理されている。そのため、地図記号をおく地点を厳密に定めることができない。この状況に鑑み、市町村の領域内に調査地点をとる方法をとった。図 4 がその分布図である。

地図化にあたっては、国立国語研究所によって開発されたプログラム「グラフィックソフト Illustrator 用プラグイン」と、方言分布地図用に作成された地図記号を用いた。

得られた語形のうち、「すむつかり（『宇治拾遺物語』）」およびスミズカリ（『海録』）に近い語形をスミツカリ、スミツカレ、スミズカリ（スミヅカリ）、スモツカリ、スモツカレ、ツムツカリと認定した。これらを「スミツカリ類」とし、そのほかの語形の内シミツカリ、シミツカレ、シミズカリ（シミヅカリ）を「シミツカレ類」、シモツカリ、シモツカレ、シモズカリ（シモヅカリ）を「シモツカレ類」として考察する。

4-2 方言分布の推移

2022 年調査による図 4 の方言分布をみる前に、先行研究（図 5）の分布を確認する。

まず、図 6 の大橋（1976）である。話者は明治 21（1878）～明治 43（1910）年に生まれた女性で、調査期間は昭和 41（1966）～昭和 44（1969）年である。質問文は次である。

質問文 128 しもつかれ：①初午の日に、ここでは、何かごちそうを作りますか。

②大根と人参をガリガリとこまかくして、それに大豆の煎ったものと、鮭の頭、酒か

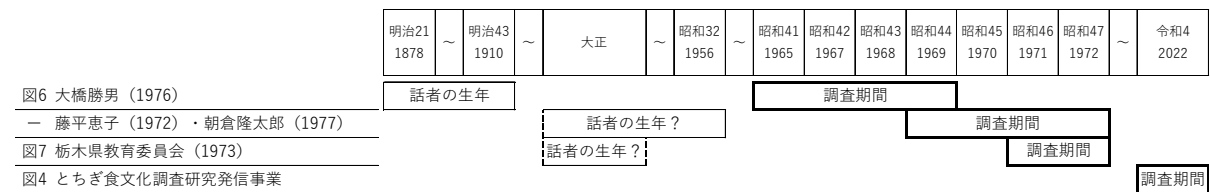
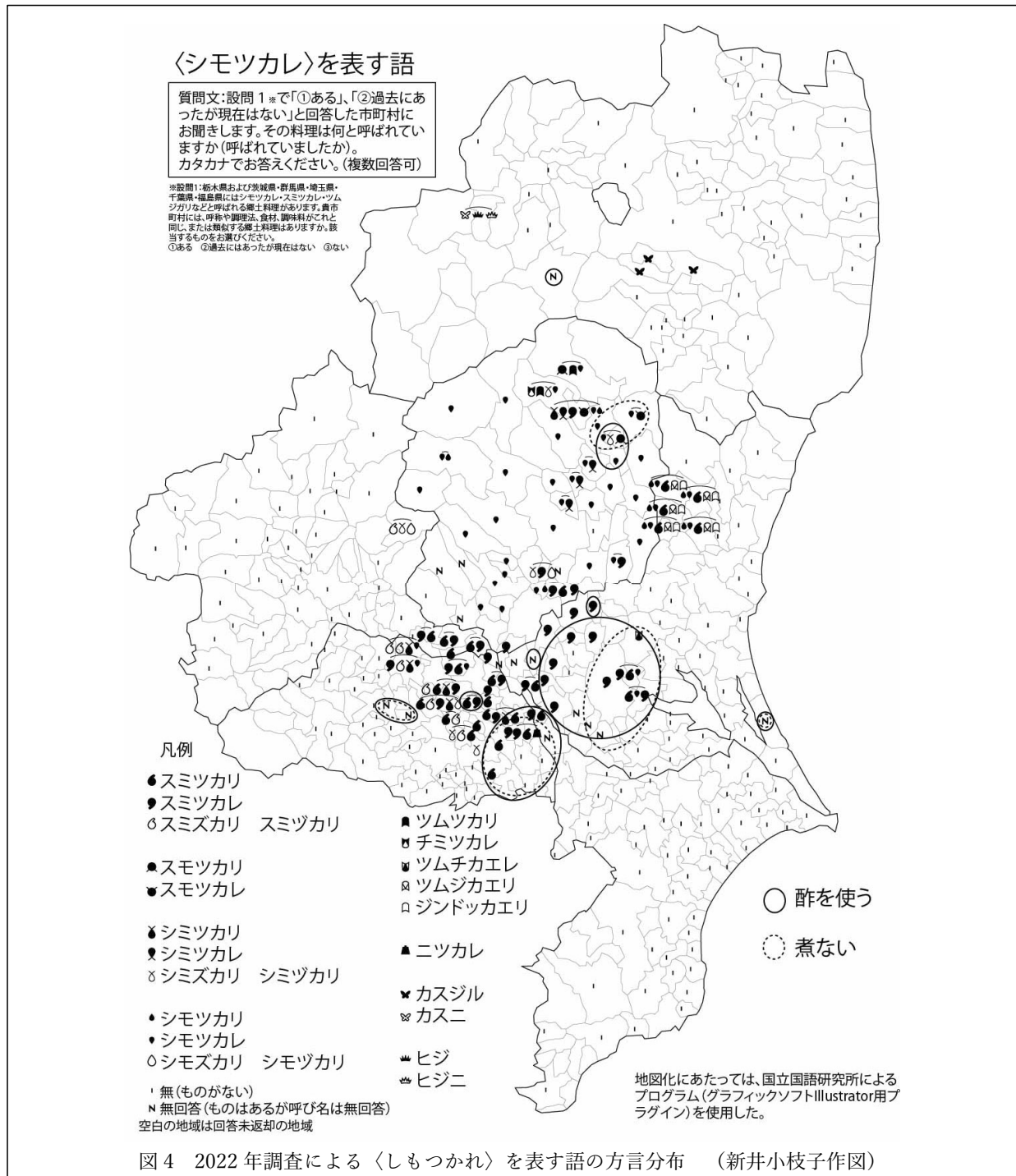


図 5 それぞれの方言分布図の調査期間と話者の生年（？は推定であることを示す）

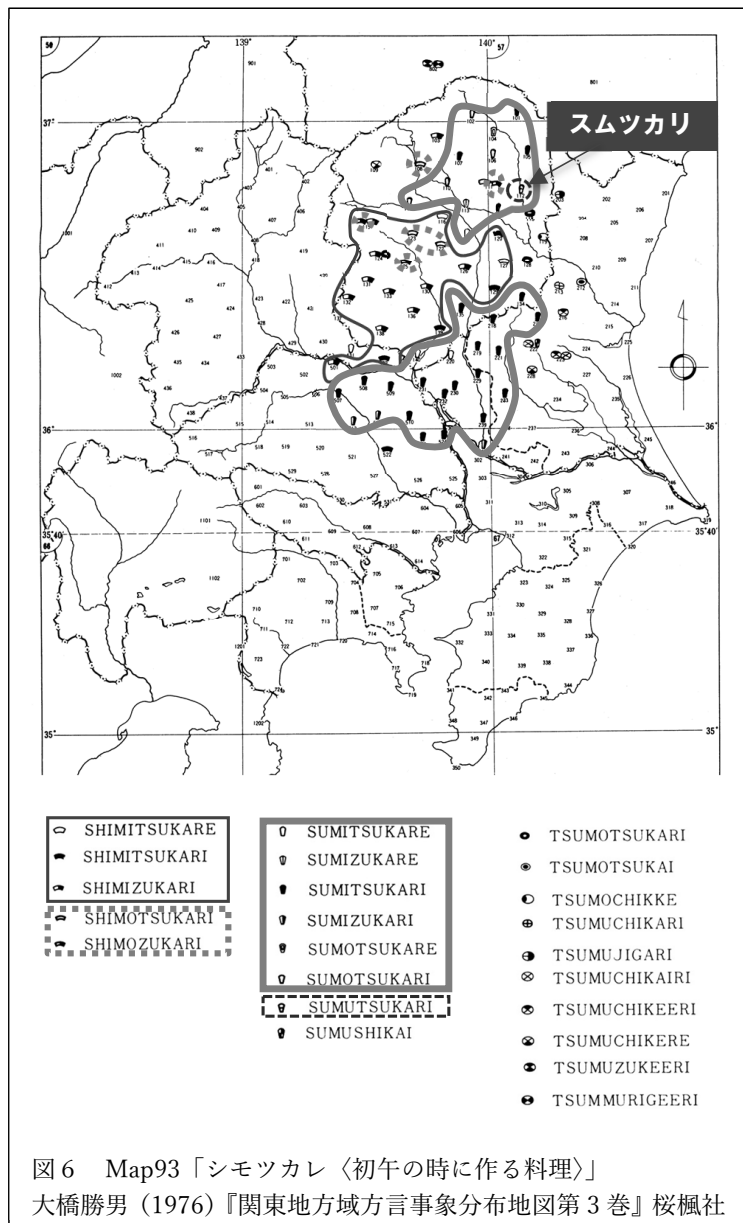


す、油あげを煮合わす料理は作りませんか。(作るとされた場合) その名前を何と言っていますか。(図 6)

図 6 ではシモツカレは見られず、その一方で、スムツカリが 1 地点に見られる。前者にもっとも近い語形は、シモツカリ(宇都宮市、鹿沼市、藤原町)、シモズカリで 6 地点に分布する。スムツカリが分布するのは、那須郡湯津上村佐良土古宿(図 6→部)である。県南にシミツカリ、シミズカリが分布域をもち、県北にスミツカリ、スミズカレ、スモツカレ、スモツカリ、ツモツカリなどが分布する。茨城県、埼玉県の隣接地域には、スミツカ

リ、スミヅカリ、群馬県の隣接地域にはシミツカレ、シミツカリが分布する。大橋勝男(1991)は、「茨城県、埼玉県、栃木県の分布事象がよく一致し、近接の栃木県の分布事象と対立しているところを見ると、周辺部への事象伝播は、栃木県側から放射状に平均的ににじみ出していくような伝播方式は、採らなかったのではないかと推察される。周辺域は周辺域として流伝していったのではないかと考えられるのである」とする。

つぎに、図7の栃木県教育委員会(1973)では、シモツ(ヅ)カレ(リ)が全県に分布(●)し、県南にはシミツ(ヅ)カレが広がる(●)。スミツカレ(リ)、スモツカレ・ス



ても、シモツカレが栃木県内に広い分布域もっていることを確認できる。藤平(1972)は「栃木県内49市町村の教育委員会社会教育課あるいは文化課」へ、朝倉(1977)は「栃木県内の中学校」への通信調査によっている。大橋(1976)の話者が最も生年が早いと推察されるものの、図6になかったシモツカレが、図7で一息に分布域を広げているように見える状況は、慎重に検討すべきである。

最後に、図4を見ると、栃木県にはシモツカレ類が広く分布し圧倒的な勢力を持つ。それに対して、群馬県、茨城県、埼玉県、千葉県における、栃木県との隣接地域ではシミツカリ類が分布する。茨城県、埼玉県に分布する語形は、図4でも大きな変化はみられず、栃木県内ではシミツカレの勢力が弱まり、シモツカレの勢力が増大しているようにみえる。〈しもつかれ〉が栃木県に特有の料理であるということを、県民

が明確に認識していることのあらわれと考えられないだろうか。形式「すむつかり」に付随する造語当時の語源意識が薄れてくると、音声変化は進行しやすかったであろう。特に、栃木県において〈しもつかれ〉に慣れ親しむ人びとが語源解釈をしようとするとき、栃木県に特有の料理であることを自ら認識しているという点は、音声変化を生じさせる要因として大きく関与してこよう。「しもつけのくに（下野国）」からの類音牽引によって「すむつかり」などとの混交が生じ、シモツカレ類が勢力を広げていると考えられる。

4-3 語源意識の多様性

ところで、これらの多様な語形の背景には、地域における〈しもつかれ〉の内容（酢の使用・不使用）と語源意識が存在していよう。a『宇治拾遺物語』の「すむつかり」や、b谷崎潤一郎「すむつかり」贅言」では、次のような語源意識が見られる。

a「すむつかり」の造語成分（近江国浅井郡）

す（酢）＋むつかる（漬る）の連用形

b「すみつかり」の造語成分（茨城県真壁郡下館町出身の女性）

す（酢）＋み（味）＋つかる（浸かる）の連用形

このほかにも、藤平（1972）、朝倉（1977）によって、いくつかの語源説が整理されている。藤平（1972）では「下野ばかり」「下野のカレイヒ」「下野の家例」をあげる。朝倉（1977）では「下野嘉例、下野家例、下野家札、下野餉、下野神飯、下野限り」「滲みつ餉、滲み漬かり」をあげる。大橋（1991）は、この料理も名前も、「栃木県から興り、栃木県に広まったものと見てよかろう。それが近隣の県にも交流の比較的密な地域には進出することになったのだと考えられる」とし、次のように述べている（416頁）。

おそらくこれは語源、意義のわかりにくい語形であるために、音転や語源解釈等を被りやすく、周辺に行くほど変容が先鋭化しやすかったのであろう。（元義は「凍（染）み漬かり」か。土地の人々は「^{シモツケ}下野カレー」だとの民間語源解釈を教示しがちだった。）

『宇治拾遺物語』の「すむつかり」を起源とする語形は、時間的にも空間的にも変化し、現在の栃木県を中心に図4に示した語形となって存在していると想定できる。シモツカレは比較的新しい語形である可能性は高いと見てよいだろう。「しもつけのくに（下野国）」からの類音牽引によって生じたものだとするれば、この語が定着するまでの間には、次のような異分析がくり返されていると考えられる。「*」は推定であることを示す。

	13世紀（近江国浅井郡）	→	現代（栃木県）
形式	す-むつかり	> *す-み-つかり	> *しみ-つかり
		> *す-み-つかれ	> *しみ-つかれ
解釈	酢-漬り	> *酢-味-浸かり	> *しみ-浸かり
		> *酢-味-浸かれ	> *しみ-浸かれ
		> *凍み-浸かり	> *下野-かり
		> *凍み-浸かれ	> *下野-かれ

[] 部分は、上段に記述した形式の解釈を漢字仮名交じりで記したものである。「-」は語を構成している造語成分の境界である。語形ごとに、その位置が変化している。造語がなされた当時の造語成分の境界が、ある地域、ある時代に生じた語源解釈によって変化し、本来の語源や語構成とは異なる解釈を表出させた語形変化であるとの推定が可能である。

5 まとめと課題

〈しもつかれ〉を表す語が、現代になってからの約 50 年の間に母音の音声変化を生じさせ、形式を変化させてきた様子をみてきた。語源が不明になると、それをなんとか解釈をしようとして自らの有している語彙体系に照らした語源解釈を行い、語形を変化させていく。異分析が繰り返され、現在に至っているのではないかとした。

今後、語源解釈の聴き取り調査を可能な限り行ってみたい。その結果を食物学、歴史学、民俗学の先行研究とも照合し、語形を変化させる原動力を明らかにする。仮説の検証と、シモツカレが生じた年代の特定が残された課題となる。さらに、「とちぎ食文化調査研究発信事業」としては、継承、振興、発信のための実践方言学の展開も必要である。

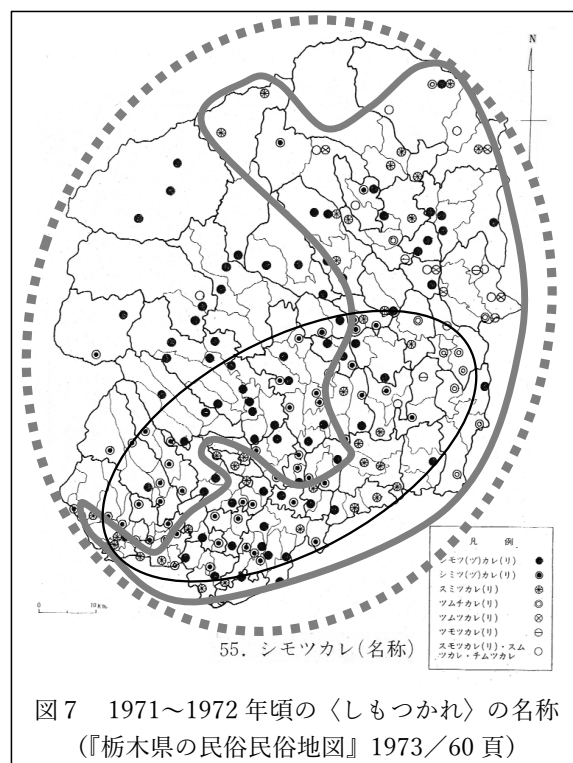


図7 1971～1972年頃の〈しもつかれ〉の名称
(『栃木県の民俗民俗地図』1973/60頁)

■注

1 それぞれのラインにおいて、火の頂点に近ければ近いほど、三要素（空気、水、油：発表者注）の介在の度合いは少ない。つまり、空気のラインで火の頂点にもっとも近いところは炎が肉を直接なめるような直火焼きであり、水のラインで火の頂点にもっとも近いところはほとんど水蒸気のないような蒸し焼きであり、油のラインのそれはハケでサッと鍋に油を引いたか引かないかといった煎りものである。これらの三種の料理は、そこからさらに火を近づけると焦げはじめ、結局は炎に包まれて同じものになってしまう。／逆に、それぞれのラインで、火の頂点から遠ざかって下へ下へがっていくにつれ、それぞれの要素の介在度は増し、同時に火の直接的な影響はしだいに少なくなって、ついに底面に達すると同時に火の影響は途絶え、そこからは冷たいナマものの世界が広がってゆく。／これが、料理の四面体の読みとりかたである。(230-231頁／玉村豊男(2010)中公文庫)

2 設問1：栃木県および茨城県・群馬県・埼玉県・千葉県・福島県にはシモツカレ・スミツカレ・ツムジガリなどと呼ばれる郷土料理があります。貴市町村には、呼称や調理法、食材、調味料がこれと同じ、または類似する郷土料理はありますか。該当するものをお選びください。①ある ②過去にはあったが現在はない ③ない

■参考文献

- 朝倉隆太郎(1977)「郷土料理シモツカレの地理的分布」『宇都宮大学教育学部紀要』第27号宇都宮大学教育学部
大橋勝男(1976)『関東地方方言事象分布地図 第3巻』桜楓社
大橋勝男(1991)『関東地方の方言についての方言地理学的研究 第3巻〔語彙事象分布論篇〕』桜楓社
玉村豊男(1980)『料理の四面体』鎌倉書房(本稿では中公文庫2010を引用した)
栃木県教育委員会(1973)『栃木県民俗資料調査報告書第10集 民俗資料緊急調査報告書 栃木県民俗地図』
藤平恵子(1972)「“しもつかれ”における郷土料理の民俗学的考察」『下野民俗』第13号下野民俗研究会

■辞書・資料

- 『日本国語大辞典 第2版』小学館
『宇治拾遺物語 古本説話集』(日本古典文学大系42 岩波書店 1990)
『海録 卷十二』山崎美成(『海録』国書刊行会 1915)
「すむつかり」贅言 谷崎潤一郎(1954(昭和29)初出)(『あまから随筆』河出書房 1956)
『令和3年度郷土料理アンケート調査報告書』(株式会社東京商工リサーチ 2022) 栃木県教育委員会

言語地図データベースについて

大西拓一郎¹

1. はじめに

日本の方言学・言語地理学は大量の言語地図（方言地図）を作成・公表してきた。地図集にして約 400 冊、地図枚数は約 28,000 枚にのぼり、世界に誇るべき数である。その多くは 1970～1990 年代を中心に編纂されたものであり、大学研究室等を中心に刊行されたこともあって、多くが入手・閲覧が困難な状態にある。また、量の多さゆえ、必要な情報にたどり着くことが難しく、どこを対象とした地図があるのか、どのような項目の地図があるのかをすぐに把握することができなかった。

このような問題に対応することを目指して、発表者は 2017 年以来、web サイト「言語地図データベース」を構築し、データを公開している（図 1）。本発表は、言語地図データベースの現状を紹介するとともに、その活用法、将来についても考察することを目的とする。

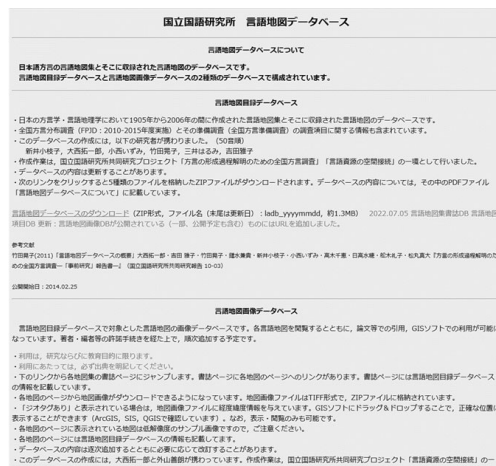


図 1 web サイト 言語地図データベース

2. 書誌データベース・項目データベース

言語地図書誌データベースは、21 世紀初頭までに日本で刊行された言語地図集（アトラス）の書誌データである（ほぼ網羅していると考えられる国立国語研究所所蔵資料をベースとしている）。書名、著者、発行年、対象地域、後述する画像データベースへのリンクなどが含まれる（図 2）。フォーマットは、タブ区切りのテキストファイル（TSV 形式）であり、エクセルにペースト（もしくはドラック＆ドロップ）すると表形式で扱うことができる。

¹ おおにし たくいちろう(国立国語研究所) takonish@ninjal.ac.jp

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
1	地図集ID	書名	著者	発行年（元号）	発行年（西暦）	調査時期	発行所	対象地域	請求番号	旧請求番号	資料ID	言語地図画像データ
2		1 徳島県におけるカマキリの分布	森 重幸	昭和38年10月	1963	1962	郷土研究発表会	徳島県	818.81/Mo45/徳島	4N-087/(N3)/	1001144987	https://www2.ninja
3		2 関東言語地図 中国言語地図							818.3/Ka59/関東	4N-087/(N12)	1000614618	
4		3 肥前島原半島方言分布図						長崎県	818.93/H79/長崎	4N-087/(N2)/	1000623379	
5		4 嶺南・嶺北（加介呂布）（全国分布図）						全国	818/Ka31	4N-087/To63	1002308813	
6		5 山口県方言分布図					手書き原稿	山口県	818.77/Y24	4N-087/(N18)	1002308839	
7		6 山形県方言地図 つらら	矢作春樹			1952.3-1952.10		山形県	818.25/Y16/山形	4N-087/(N11)	1000089399 & 1000089407	
8		7 佐波方言の研究	中沢政雄					群馬県	818.33/G93/群馬	4N-087/(N12)	1000728095	
9		8 糸魚川市早川地区の方言資料	瀬尾礼子				私家版	新潟県	818.41/N72/新潟	4N-087/(N13)	1000727485	
10		9 方言分布図（山梨県言語分布図）						山梨県	818.41/N72/新潟	4N-087/(N13)	1000727485	
11		10 言語分布図（風の名）						全国	818/G34	4N-087/Ge34	1002308805	
12		11 中国四国方言分布図						中国四国	818.1/Cb2	4N-087/Cb2	1000611788	
13		12 北海道南部地区における言語	石垣福雄					北海道	818.1/H81/北海道	4N-087/(N4)/	1000714731	
14		13 音韻調査報告書 音韻分布図 国語調査	明治38年3月17日	1905	1903	日本書籍株式会社	全国		W52-5/Ko47 & 811	4N-087/Ko47	1001637832 & 1000071421	
15		14 口語法調査報告書（上）（下）国語調査	明治39年12月7日	1906	1903	国定教科書共同	全国		818/Ko47	4N-087/Ko47	1000071413	
16		15 鳩牛考	柳田国男	昭和5年7月10日	1930		刀江書院	全国	818/Y53	4N-087/-3/Y	1000086791 & 1000086809	
17		16 岡山県植物方言辞典	佐藤清明	昭和6年8月15日	1931		私家版	岡山県	818.75/Sa85/岡山	4N-087/(N18)	1000618643	
18		17 万葉部方言地図	高橋勝利	昭和6年10月10日	1931		私家版	栃木県	818.32/Ta33/栃木	4N-087/(N12)	1000614964	
19		18 愛媛県に於けるひがなばの	杉山正世	昭和6年11月10日	1931		私家版	愛媛県	818.83/Su49/愛媛	4N-087/(N3)/	1000111219 & 1000794857	
20		19 愛媛県に於ける「燕」と「嶺」	杉山正世	昭和6年12月29日	1931		私家版	愛媛県	818.83/Su49/愛媛	4N-087/(N3)/	1000794865	
21		20 広島愛媛岡山方言分布図	藤原与一	昭和7年07月	1932		広島方言学会	広島県・愛媛県	818.76/H73/広島	4N-087/(N18)	1001144938	
22		21 幸手近傍方言分布調査資料	上野 勇	昭和8年	1933	1933.10-1	私家版	埼玉県	818.34/U45/埼玉	4N-087/(N12)	1001221553	
23		22 広島県方言の研究	広島県師範	昭和8年4月5日	1933		芸文堂	広島県全境	818.76/H73/広島	4N-087/(N18)	1000078962	
24		23 長崎県西彼杵・東彼杵両郡方言	本山桂川	昭和8年5月1日	1933		日本民俗研究会	長崎県	818.93/Mo92/長崎	4N-087/(N2)/	1001252327 & 1000623619	

図 2 言語地図書誌 DB

どのような項目（例えば、じゃがいも、かたつむり等）の言語地図（マップ）があるのかについては、やはり TSV 形式の言語地図項目データベースが扱い、地図名（項目）、調査で使われた質問文、品詞、分野などの分類、後述する画像データベースへのリンクなどが含まれている（図 3）。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
1	地図ID	地図名	地図名よみがな	質問文	分野	語彙（品詞）	語彙（分類）	文法（分類）	全国方言	全国方言	地図集ID	地図集書名	言語地図画像データベースURL		
2	8	FIG.17 Relic/Mo	FIG.17 Relic/N	¥なし¥	その他							411	パソコンによる言語地理学：その方法と実践	SEA	
3	9	アクセント（1）	あくせんと（1）	¥なし¥	アクセント							265	兵庫岡山県境	https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp	
4	10	アクセント（2）	あくせんと（2）	¥なし¥	アクセント							265	兵庫岡山県境	https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp	
5	11	アクセント分布図	あくせんとぶん	¥なし¥	アクセント							335	現代日本語方言大辞典 第1巻		
6	13	？ukibae類（意味）	？ukibaeるい	（い）¥なし¥								239	奄美大島のことばー分布から歴史へー		
7	14	？ukinijiとkutjiman	？ukinijiとkutjim	¥なし¥								239	奄美大島のことばー分布から歴史へー		
8	15	？ukiniji類（意味）	？ukinijiるい	（い）¥なし¥								239	奄美大島のことばー分布から歴史へー		
9	16	（題名なし）	・だいいめいなし	¥なし¥	その他							12	北海道南部地区における言語地理学的研究		
10	17	（題名なし）	・だいいめいなし	¥なし¥	その他							12	北海道南部地区における言語地理学的研究		
11	18	（題名なし）	・だいいめいなし	¥なし¥	その他							12	北海道南部地区における言語地理学的研究		
12	19	（題名なし）	・だいいめいなし	¥なし¥	その他							12	北海道南部地区における言語地理学的研究		
13	20	（題名なし）	・だいいめいなし	¥なし¥	その他							12	北海道南部地区における言語地理学的研究		
14	21	（題名なし）	・だいいめいなし	¥なし¥	その他							22	広島県方言の研究		
15	22	（題名なし）	・だいいめいなし	¥なし¥	音韻							35	語彙を中心とする琉球語の研究		
16	23	（題名なし）	・だいいめいなし	¥なし¥	アクセント							43	和泉方言の研究		
17	31	（題名なし）	・だいいめいなし	¥なし¥	アクセント							310	瀬戸のことば		
18	32	（題名なし）	方言	・だいいめいなし	¥なし¥	その他						166	栃木県方言辞典		
19	33	地図⑤	THE PHC/a*/のおんそか	¥なし¥	その他							163	日本の方言地理学のために		
20	34	一音節名詞一類	1 おんせつめい	¥なし¥	アクセント							68	たじまアクセント		
21	35	一音節名詞二類	1 おんせつめい	¥なし¥	アクセント							68	たじまアクセント		
22	36	一音節名詞三類	1 おんせつめい	¥なし¥	アクセント							68	たじまアクセント		
23	37	一音節名詞と一音	1 おんせつめい	¥なし¥	アクセント							68	たじまアクセント		
24	38	一音節名詞と二音	1 おんせつめい	¥なし¥	アクセント							68	たじまアクセント		
25	39	一音節名詞と三音	1 おんせつめい	¥なし¥	アクセント							68	たじまアクセント		

図 3 言語地図項目 DB

3. 画像データベース

日本の言語地図の書誌・項目はほぼ網羅できたが、任意の言語地図の存在が確認できても、実際の地図をいつでも閲覧できるわけではない。多くの言語地図は、大学研究室などを中心とした限定的な公刊であり、所蔵している図書館は多くない。

ほとんどの資料が国立国語研究所に収蔵されているが、実物を見るためには国立国語研究所を来訪するか、複写手続きをとることが必要であり、敷居が高い。そこで、活用の便を向上すべく、言語地図データベースでは地図画像の公開を進めている（図4）。2023年5月現在、50冊を公開している。

なお、一般に地図には著作権があるため、公開するには著作者の承諾を得ることが必要である。1970年代刊行のものが多いこともあり、著者と連絡をとることが難しく、この手続きで難航している資料が多い。研究会参加者の方々の協力が得られることを希望する。

地図画像を公開するには当然デジタルデータ化が必須である。データ化は、解像度 600～800dpi、ロスレス圧縮の Tiff 形式で実施している。必要十分な解像度と考えており、これ以上ファイルサイズを大きくするとサーバーに負荷をかける手前のところを選択している。

同時にこれは資料保存も兼ねている。特に初期の言語地図は紙質の関係から劣化の進んでいるものが少なくない。また、数カ所にしか収蔵がないため、極めて稀覯と考えられる資料は PDF による公開も実施している。手続き上、公開に至ることが難しい資料もデジタル化は進めておきたい。



図4 画像データの公開（上：ジオタグなし、下：ジオタグあり、例は馬瀬（1980a）『上伊那の方言』）

4. GIS 対応データ

4.1 ジオタグ付き画像データ

地図は、ジオタグ付き画像データでも公開している。スキャンしただけの画像ファイルは、その画像がどこなのかという位置情報を持たない。地図である限り、場所が特定でき

るはずであり、経度・緯度による位置情報を付与（図 5）したのが、ジオタグ付き画像データである。ジオタグ付き画像は GIS（地理情報システム）上で正しい位置に表示される（図 6）。言語地図データベースでは、ジオタグ付きとして一般的な（また、位置情報を付与するためのワールドファイルを別途必要としない）GeoTiff 形式でのデータ公開を行っている。なお、GeoTiff ファイルは通常のビューワーで閲覧できるが、位置の正規化補正を行っているので、ゆがんで表示されることがある。引用等で使用する場合はジオタグなしを使うとよい。

ただし、地図によっては経度・緯度の付与に適さないものもあり、その場合はジオタグを付与しない、画像ファイルのみによる扱いも検討したい。

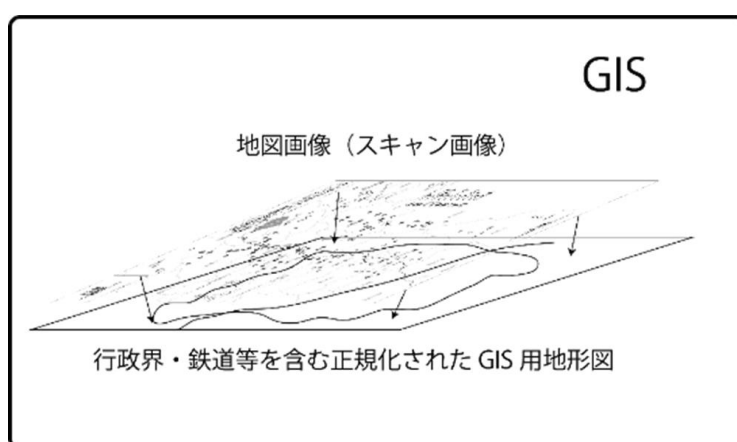


図 5 GIS 上でスキャン画像に位置情報を付与

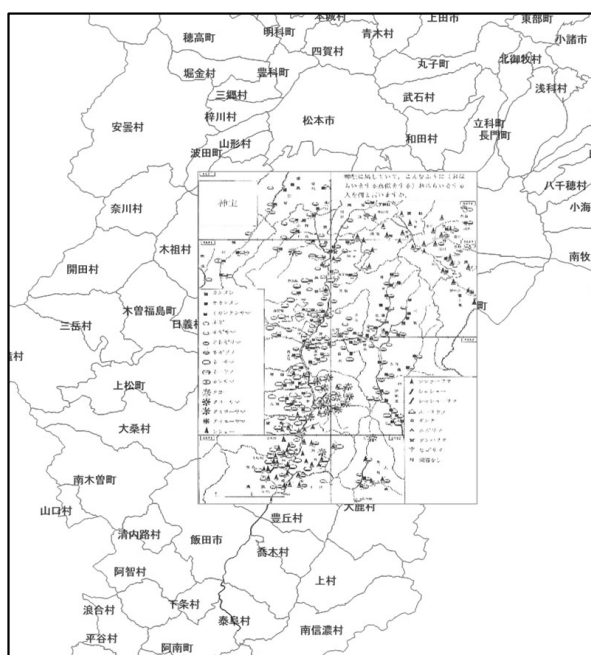


図 6 正しい位置に表示されるジオタグ付き画像（地図は『上伊那の方言』「神主」）

4.2 地理行列・シェープファイル

地図画像のほか、一部の地図集については、方言形と位置情報の対応表である地理行列も公開している。地理行列とは、場所とその属性の対応表である。言語地図であれば、地図上の地点と地図に現れているその方言形の対応表が地理行列である。地理行列には調査地点の経度・緯度も付与している。TSV 形式のテキストファイルなので、エクセルにより表として表示できる（図 7）。なお、言語地図データベースで公開しているすべてのデータは、測地系を世界測地系に統一している。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	地図番号	地図名	見出し番号	見出し	地点番号	市町村	地点名	X_JGD2000	Y_JGD2000
2	9	居る			56820971	茅野市	泉野・中道	138.2257	35.9907
3	9	居る			56928417	上伊那郡長	杉島・塩平	138.1157	35.7007
4	9	居る	1	イル	56714578	塩尻市	宗賀区・小曾部	137.8931	36.0906
5	9	居る	1	イル	56714697	塩尻市	宗賀区・洗馬	137.9157	36.0872
6	9	居る	1	イル	56714743	塩尻市	宗賀区・床尾	137.9306	36.0956
7	9	居る	1	イル	56714974	塩尻市	上西条	137.9831	36.0906
8	9	居る	1	イル	56716642	塩尻市	宗賀区・本山	137.9032	36.0623
9	9	居る	1	イル	56716849	塩尻市	北小野・古町	137.9707	36.0624
10	9	居る	1	イル	56716990	塩尻市	北小野・上田	137.9732	36.054
11	9	居る	1	イル	56717518	塩尻市	宗賀区・日出塩	137.8931	36.0507
12	9	居る	1	イル	56717847	上伊那郡辰	小野・休戸	137.9657	36.0457
13	9	居る	1	イル	56718649	上伊那郡辰	小野・飯沼山口	137.9207	36.0291
14	9	居る	1	イル	56718725	上伊那郡辰	小野・飯沼中村	137.9356	36.0324
15	9	居る	1	イル	56718800	上伊那郡辰	小野・飯沼下村	137.9482	36.0357
16	9	居る	1	イル	56719453	木曽郡檜川	麓川	137.8557	36.0107
17	9	居る	1	イル	56719698	上伊那郡辰	横川・門前	137.9182	36.004
18	9	居る	1	イル	56719734	上伊那郡辰	横川・飯沼沢	137.9331	36.014
19	9	居る	1	イル	56719962	上伊那郡辰	辰野・唐木沢	137.9782	36.009
20	9	居る	1	イル	56726216	岡谷市	西堀	138.0632	36.0674
21	9	居る	1	イル	56726433	諏訪郡下原	高木	138.1057	36.064
22	9	居る	1	イル	56726991	茅野市	北山・柏原	138.2257	36.054
23	9	居る	1	イル	56727255	岡谷市	湊・花岡	138.0607	36.044
24	9	居る	1	イル	56727468	諏訪市	小和田・北小路	138.1182	36.0423

図 7 地理行列（例は『上伊那の方言』）

ジオタグ付き地図画像を GIS 上で表示させ、地図にプロットされた各地点の方言形をもとに、場所と方言形の対応表にすることで地理行列ができる（紙の地図から読み取っていくことも可能）。地点番号が付与されている地図であれば、地点番号と地名、経度・緯度、方言形、意味の対応表が作られる。この場合、地図上の地点を 1 地点ずつ読み取り入力していく必要があり、作業には、根気と時間を要する（200 地点程度で半日から 1 日必要）。

地理行列があると、GIS を使って地図を描き直すことが可能となる。GIS は地図表現の幅が広いので、データを組み合わせることにより、さまざまな主題図を生み出すことを可能にする。例えば、『上伊那の方言』をもとに馬瀬（1980b）が明らかにした同音衝突の相補分布について、地形と照合する地図を描く（大西 2020）といったことが可能になる（図 8）。

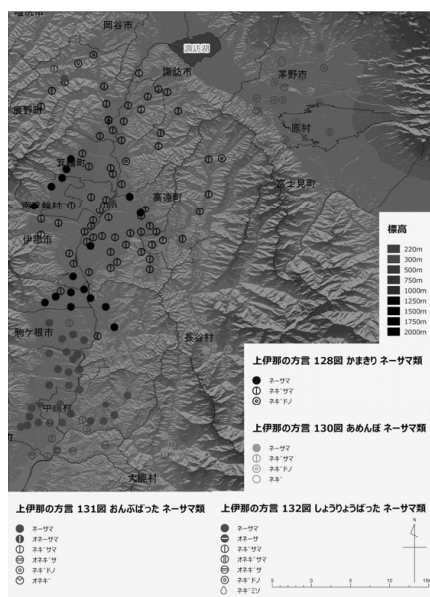


図 8 GIS を用いて新たな主題図を生み出すことが可能（大西 2020 より）

地点番号等を基準にした調査地点一覧が付載された言語地図集の場合は、それを手がかりに地理行列を作成することが可能であるが、照合作業に極めて時間を要する。ジオタグ付き地図画像を活用して、直接 GIS で、ポイントデータ化する方法もある（語形ごとにレイヤを作り、該当する地点をクリック（ペンタブレットを使うと便利）してポイントを生成させる）。この場合、地点の位置は、元の地図に依存する点に注意が必要であるが、作業時間は短くて済む（200 地点／1～2 時間程度）。この場合は、GIS で一般的なシェープファイル形式でデータベース化ができ、表形式への変換も可能である。この形式での追加公開（2023 年度に数冊）も計画している。

いずれの形式であっても、新しい時代の言語地理学に活かすことができるデータベースとなるはずである。

5. 今後の予定

5.1 地図見出し方言形データベース

画像データベースとして公開した各地図の凡例に収められた見出し語形の方言形データの公開も計画している。画像データベースの追加に合わせて順次更新しながら今年度（2023 年度）から公開を予定している。これを使うと、例えば、図 8 のネーサマ類が『上伊那の方言』の「かまきり」「あめんぼ」「おんぶばった」「しょうりょうばった」に共通して現れていることが確認できる。また、これを活用することでおおまかではあっても、どのあたり（各地図集が扱う範囲）に任意の方言形があるかを把握することが可能になる。

5.2 海外言語地図データベース

言語地図データベースは国立国語研究所所蔵のものを対象とし、先にも記したように、これでほぼすべての日本の言語地図集がカバーできていると考えられるが、そのほかに国立国語研究所は、海外の言語地図集も 100 冊弱所蔵している。世界中の言語地図集を網羅しているわけではないが、主要な資料が含まれ、かつかなりの分量に上ることは確かであり、これらのデータベース化作業も進行中である。書誌をデータベース化することにより、世界の言語地理学の概要が把握できる。また、項目をデータベース化することで、各言語でどのような対象が注目されているのか（例えば、ヨーロッパの言語地図には「曜日」が、東アジアの言語地図には「豚の去勢」が、それぞれ項目として見られる）、それを通して文化的背景なども捉えることが可能になる（実際、何を対象としているのか、すぐには理解できないような言語地図も少なくない）。書誌データを手始めに 2025 年度から公開することを計画している。

5.3 QGIS 対応地図記号

言語地図データベースで公開している（また将来公開する）データを言語地理学で活用するには GIS の利用が欠かせない。さまざまある GIS の中でもオープンソースで開発が続けられている QGIS は、これからますます重要な位置を占めると予想される。

言語地理学で用いてきた地図記号は、地図一般としてはやや特殊であり、記号データを自前で用意することが必要である。そこで、GAJ の記号をベースに QGIS で使用可能な記号を開発している。QGIS で使用する記号のデータフォーマットは SVG 形式である。SVG はベクタ形式なので、イラストレータと同様にジャギーのないなめらかな記号表現になる。従来の地図ソフトへの不満も解消されるだろう。

小規模の研究会でのチュートリアルや大学授業等でテスト使用を行った上で、2024 年度をめどに公開したい。

6. むすび

言語地図データベースのデータは、すべて静的コンテンツとして公開し、ダウンロードしてスタンドアローンで使用することを前提としている。これは、データ量とコスト（動的コンテンツは管理費用が必要）、また、将来性（大西の定年退職後）を見越してのことである。現在のコンピューター環境であれば、ダウンロードして、スタンドアローンで活用する方が使いやすく、また安定的に運用できると考えられる。

書誌・項目データベースはほぼ完成しており、地図画像データベースの拡充がもっとも望まれるところである。その場合、著作権処理が不可欠であり、皆様のご協力が必要である。

言語地図データベースを充実させることで、日本の言語地理学の下支えと発展に寄与したい。

最後に課題として、以下の3点をあげておく。

第一は、言語地図集（アトラス）が本当に網羅されているのかという点である。国立国語研究所所蔵以外の言語地図集でお気づきの点があれば、ご教示願いたい。

第二は、論文として公刊されているものの中に実は言語地図集（以下、論文地図集）があるという点である。日本方言研究会（2005b）によると、このようなケースは180件弱ある。言語地図データベースが対象とする言語地図集は研究所の図書館が単行本として分類しているものを対象としているが、実は抜き刷り類も製本されて図書扱いになっているものがあり、やや古い時代の資料では、単行本と論文の境界があいまいである。論文地図集を言語地図データベースに加えると、日本の言語地図集は600冊近くになる（論文地図集から単行本地図集に発展したものもある）。ただし、必要時間を考慮すると、論文地図集の画像データ化は難しい。

第三として、論文の中の言語地図（マップ）の扱いである。言語地理学関係の論文であれば、多くの場合に言語地図が掲載されているが、その中の地図をすべて目録化するのはやはり時間的に厳しく、論文の目録（日本方言研究会 2005a を包括）だけでも作成・公開できればと考えている。

●お願い

言語地図データベースを充実させるためには、言語地図集の著作者の了解を得ることが欠かせません。もし著作者についておわかりのことやご協力いただけることがありましたら、お知らせいただけますようお願いいたします。

本発表は、以下の研究課題の成果を活用しています。

- ・共同研究：国立国語研究所 共同研究プロジェクト 「言語資源の空間接続」
- ・科研費：20K20501、20H00015、19H01266、221H00530a

文献

大西拓一郎（2020）「言語地図を読み直す」日本方言研究会 方言研究プロジェクト

日本方言研究会（2005a）「言語地理学」『20 世紀方言研究の軌跡』409-431、東京：国書刊行会

日本方言研究会（2005b）「言語地図目録」『20 世紀方言研究の軌跡』972-981、東京：国書刊行会

馬瀬良雄（1980a）『上伊那の方言』伊那市：上伊那誌刊行会

馬瀬良雄（1980b）「神主の方言をめぐる虫たち」佐藤茂教授退官記念論集刊行会編『佐藤茂教授退官記念 論集国語学』611-329、東京：桜楓社（馬瀬良雄 1992『言語地理学研究』東京：桜楓社に再録）

南琉球宮古島与那覇方言のアクセント体系と弁別特徴

新田 哲夫¹

1 先行研究と目的

南琉球諸方言のアクセントについては、2010 年以降研究が進展し、多良間方言、池間方言のアクセントに関して、かなり詳しい分析がなされ、その体系と仕組みが明らかになりつつある。宮古諸方言に属する多良間方言、池間方言は「三型アクセント」体系を有することが明らかになり、その他、従来から三型アクセントであることが知られている八重山列島の与那国方言、さらに波照間方言、黒島方言等を含めると、「三型アクセント」が南琉球の宮古・八重山の先島諸島に集中して分布していると予想されている。

本発表で取り上げる宮古島与那覇のアクセントについては、初期段階では平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) の報告があった。その後、期間をあけて、五十嵐陽介 (2012) において実現形の概観報告がなされた。同時期の松森晶子 (2013ab) において、この方言で見られる特異なアクセント交替とアクセント体系に関して論じられた。特に松森 (2013b) では、複合語において「三型アクセント体系」が見られることが示され、またそこでは 3 モーラの H (高) が連続する音調領域の存在が、アクセントの実現に大きな役割を果たしていることが述べられている。

この発表では、松森晶子氏から提供を受けた音声データ²と発表者自身が 2022、2023 年に調査した資料³をもとに分析した結果と解釈を示す。先行研究の成果を踏まえながら、発表者が本発表でスポットを当てる主な事項は、1) この方言アクセントの弁別特徴は何かを示すこと、2) 不均衡な体系がなぜ生じているのかを説明すること、3) 松森 (2013b) で示された三型アクセント体系の 3 つの「型」は、それぞれどんなアクセントパターンであるのかを検討することである。

発表者は本土方言のアクセントを観察する際に、動的な見方を行う上野善道 (2019: 70ff.) と同様の立場を取っていたが、南琉球のアクセント分析においても、こうした動的な見方が有効であるか模索中である。本発表はその検証の途中に位置づけられる。

2 作業仮説

発表者は宮古諸方言のアクセント研究を、以下の作業仮説のもとに進めている。与那覇アクセントに関する本研究も例外ではない。

(1) 「韻律語」が音調の実現と分析の際の基本的な単位となる。

¹ につた てつお (dejikun3@yahoo.co.jp) 本研究は科研費補助金 20H01259 によるものである。

² 1947 年、宮古島市与那覇生まれの女性の話者。話者と松森氏に御礼申し上げる。

³ 上記女性のほか、1954 年、宮古島市与那覇生まれの男性の話者。話者に御礼申し上げる。

- (2) 音調を動的に捉えようとする。H（高）やL（低）のような高さの静的なラベルを当てはめる見方ではなく、韻律語間および韻律語内の音調変動に注目する。
- (3a) 「韻律語」には、有核の韻律語と無核の韻律語があり、音韻的な対立をなす。アクセント核は韻律語全体の音調の動きを示し、韻律語内の変動の位置の違いは音韻的には対立しない。
- (3b) すなわち、韻律語を単位とする「単語声調 (word tone)」として捉えることも可能で、単語声調の種類は、有核韻律語のトーン、無核韻律語のトーンの2種類あることになる。
- (4) 韻律語には「主韻律語」と「副韻律語」がある。主韻律語は固有の型をもっている韻律語（主に内容語）であり、副韻律語は固有の型をもっていない韻律語（助詞類、複合語後部要素など）である。
- (5) 宮古諸島のどの方言も「三型アクセント体系」を有している（有していた）。その体系は、主韻律語自体が無核（a 型）、主韻律語自体が有核（c 型）、主韻律語の隣接する副韻律語が有核（b 型）の3パターンを基本パターンとする。

3 韻律語

宮古諸方言のアクセント分析には、本土地方の「語」、「文節」とは異なる「韻律語」が分析上有効な韻律的単位であることが明らかになっており、それに基づく分析が進んでいる。発表者もそれを用いる。なお、1 モーラの韻律語はない。

(6) さまざまな韻律語（斜体は副韻律語）

- a. (junapa) 《与那覇 [地名]》, (mugI) 《麦》, (kakI) 《書く》, (mii) 《見る》, (miitaa) 《見た》
- b. (mii) (*uu*) 《見ている》 (sjii-du) (*uu*) 《している》
- c. (zookaa) 《よい》
- d. (junapa-nu) 《与那覇が、の》, (junapo-o) 《与那覇を》
- e. (junapa) (*kara*) 《与那覇から》, (junapa) (*mee*) 《与那覇も》, (junapaN) (*kee*) 《与那覇へ》
- f. (jaama) (*Mcu*) 《八重山味噌》, (Mcu) (*gami*) 《味噌甕》, (adaN) (*gii*) 《アダン木》, (adaN) (*gii*) (*jama*) 《アダン木山》
- g. (adaN) (*gii-nu*) 《アダン木が/の》, (adaN) (*gii*) (*jama*) (*kara-du*) 《アダン木山からぞ》

4 アクセント体系概観

次の (7) 以下にアクセント体系を示す。この方言では韻律語による分析と3型パターンが現れうる用例を視野に入れて例示される必要があるので、文節の長さごとに並べる本土地方の様式とは異なっている。

用例で用いる音韻表記のうち、N, Mなどのキャピタルは1子音で1モーラを形成する音、ただし日本語の促音のような重子音は ff, vv, ss, zz のように表記する。I はいわゆる「舌先

母音」で、pI, bI, kI, gI のとき摩擦的噪音を伴う。() は韻律語、○ はモーラ、[] ははっきりした上昇、] ははっきりした下降。()。の読点は韻律語が「言い切り」のとき、()... は「言い続け」のときを表す。**Bold** は相対的に高いセグメント、non-Bold は相対的に中～低のセグメント。[を使っていない **Bold**、(μμ), (μμμ) は緩い上昇、(μμ), (μμμ) は緩い下降となる。表中の「d'形」とは焦点助詞 du の母音が、母音から始まる語の前で落ちた形で、早い発音で現れる。フランス語の前置詞 de の振る舞いに似る。ABC は型の所属を表す語彙グループである。

(7) 2 モーラ・3 モーラ韻律語とそれを前部とする複合語

単独。	～もぞある。	～味噌。	～味噌も(ぞ)ある。
A: guma。	guma [meedu] aa。	guma M <u>cu</u> 。	guma M <u>cu</u> [meedu] aa。
d'形	guma [mee da]a。		guma M <u>cu</u> [mee da]a。
B: mugI。	mugI [meedu] aa。	mu[gI M]cu。	mu[gI M <u>cu</u>] meedu aa。
d'形	mugI [mee da]a。		mu[gI M <u>cu</u>] mee daa。
C: waa。	waa [mee du] uu。	waa M <u>cu</u> 。	waa M <u>cu</u> [meedu] aa。
d'形	waa [mee du]u。		waa M <u>cu</u> [mee da]a。
A: kacjuu。	kacjuu [meedu] aa。	kacjuu M <u>cu</u> 。	kacjuu M <u>cu</u> [meedu] aa。
d'形	kacjuu [mee da]a。		kacjuu M <u>cu</u> [mee da]a。
B: avva。	avva [meedu] aa。	av[va M]cu。	av[va M <u>cu</u>] meedu aa。
d'形	avva [mee da]a。		av[va M <u>cu</u>] mee daa。
C: [zIma]mi。	[zImami] meedu aa。	[zImami] M <u>cu</u> 。	[zImami] M <u>cu</u> meedu aa。
d'形	[zImami] mee daa。		[zImami] M <u>cu</u> mee daa。

語彙: guma「胡麻」, mugI「麦」, waa「豚」, kacjuu「鯉」, avva「脂」, zImami「落花生」, Mcu「味噌」, mee「も」, du 焦点助詞, aa「ある」, uu「居る」

以下の(8)(9)で韻律語による音韻解釈を示す。合流の在り方を示すために、(7) の行を並べ替えた。主韻律語の語根が属している語彙グループ ABC は、 $\sqrt{A}$, $\sqrt{B}$, $\sqrt{C}$ で韻律語内に示す。d'形は表層的には、(mee) (daa), (mee) (duu) と分析される可能性があるが、以下では省略。韻律語の前の「^」(キャレット) は上昇を示すアクセント核(昇り核)である。

(8) 2 モーラ韻律語

a: ($\sqrt{C}$ waa)。	b: ($\sqrt{C}$ waa) ^ (meedu) (uu)。	a: ($\sqrt{C}$ waa) (M <u>cu</u>)。	a: ($\sqrt{C}$ waa) (M <u>cu</u>) ^ (meedu) (aa)。
a: ($\sqrt{A}$ guma)。	b: ($\sqrt{A}$ guma) ^ (meedu) (aa)。	a: ($\sqrt{A}$ guma) (M <u>cu</u>)。	a: ($\sqrt{A}$ guma) (M <u>cu</u>) ^ (meedu) (aa)。
a: ($\sqrt{B}$ mugI)。	b: ($\sqrt{B}$ mugI) ^ (meedu) (aa)。	b: ($\sqrt{B}$ mugI) ^ (M <u>cu</u>)。	b: ($\sqrt{B}$ mugI) ^ (M <u>cu</u>) (meedu) (aa)。

(9) 3 モーラ韻律語

c: $\wedge(\sqrt{C}ZImami)_o$	c: $\wedge(\sqrt{C}ZImami) (meedu)...$	c: $\wedge(\sqrt{C}ZImami) (Mcu)_o$	c: $\wedge(\sqrt{C}ZImami) (Mcu) (meedu)...$
a: $(\sqrt{A}kacjuu)_o$	b: $(\sqrt{A}kacjuu) \wedge(meedu)...$	a: $(\sqrt{A}kacjuu) (Mcu)_o$	a: $(\sqrt{A}kacjuu) (Mcu) \wedge(meedu)...$
a: $(\sqrt{B}avva)_o$	b: $(\sqrt{B}avva) \wedge(meedu)...$	b: $(\sqrt{B}avva) \wedge(Mcu)_o$	b: $(\sqrt{B}avva) \wedge(Mcu) (meedu)...$

a, b, c は韻律語が並ぶ音調パターン（「型」）であり、定義は以下の通りである

- a 型 主韻律語自体が無核、次が副韻律語の場合はそれも無核。 (無) (無)
b 型 主韻律語が無核、次に続く副韻律語が有核。 (無) $\wedge$ (有)
c 型 主韻律語自体が有核、次が副韻律語の場合はそれも無核。 $\wedge$ (有) (無)

(10) ～の味噌と nudu 形

単独。	～の味噌。	～の味噌も(ぞ) ある。	～が(ぞ)...
A: guma。	gumanu Mcu。	gumanu Mcu [meedu] aa。	gumanu-du...
B: mugI。	mugI[nu M]cu。	mugI[nu Mcu] meedu aa。	mugInu-du...
C: waa。	[waanu] Mcu。	[waanu] Mcu meedu aa。	wa[anu-du...
A: jaama。	jaamanu Mcu。	jaamanu Mcu [meedu] aa。	jaama nudu...
B: avva。	avva[nu M]cu。	avva[nu Mcu] meedu aa。	avvanu-du...
C: [zIma]mi。	zI[maminu] Mcu。	zI[maminu] Mcu meedu aa。	zIma[minu-du...

語彙: jaama 「八重山」、kacjuu 「鰹」と同じ語彙グループ。

(11) 2 モーラ、～の味噌と nudu 形

a: $(\sqrt{C}waa)_o$	c: $\wedge(\sqrt{C}waanu) (Mcu)_o$	c: $\wedge(\sqrt{C}waanu) (Mcu) (meedu)...$	c: $\wedge(\sqrt{C}waanudu)...$
a: $(\sqrt{A}guma)_o$	a: $(\sqrt{A}gumanu) (Mcu)_o$	a: $(\sqrt{A}gumanu) (Mcu) \wedge(meedu)...$	a: $(\sqrt{A}gumanudu)...$
a: $(\sqrt{B}mugI)_o$	b: $(\sqrt{B}mugInu) \wedge(Mcu)_o$	b: $(\sqrt{B}mugInu) (Mcu) \wedge(meedu)...$	a: $(\sqrt{B}mugInudu)...$

(12) 3 モーラ、～の味噌と nudu 形

c: $\wedge(\sqrt{C}ZImami)_o$	c: $\wedge(\sqrt{C}ZImaminu) (Mcu)_o$	c: $\wedge(\sqrt{C}ZImaminu) (Mcu) (meedu)...$	c: $\wedge(\sqrt{C}ZImaminudu)...$
a: $(\sqrt{A}jaama)_o$	a: $(\sqrt{A}jaamanu) (Mcu)_o$	a: $(\sqrt{A}jaamanu) (Mcu) \wedge(meedu)...$	a: $(\sqrt{A}jaamanudu)...$
a: $(\sqrt{B}avva)_o$	b: $(\sqrt{B}avvanu) \wedge(Mcu)_o$	b: $(\sqrt{B}avvanu) \wedge(Mcu) (meedu)...$	a: $(\sqrt{B}avvanudu)...$

(7), (10) の実現形、(8) (9)、(11) (12) や他の事例から次のことが言える。

有核の韻律語の弁別特徴は、韻律語のはじめの「昇り」([$\circ\circ...$])にある。すなわちアクセント核は「昇り核」。核は $\wedge(\circ\circ...)$ で表記。有核韻律語は全体が H トーンになる。

有核の H 音調の持続は 1 つの韻律語内に留まる。有核の韻律語の次が無核なら L 音調になる。 $\wedge([\circ\circ...])$ ($\circ\circ...$)、有核韻律語の次も有核ならば、あわせて 2 段階の上昇 $\wedge([\circ\circ...])$

^([oo...]) が現れる (後述、5 節、8 節)。

無核韻律語の L トーンの高さは、文頭では M に聞かれる場合もあり、実質は非 High である。ただし H トーンのあとの L トーンは顕著に低く聞こえる。

言い切り音調について述べる。有核韻律語が言い切りの場所にくると最後の音節が低下する final lowering が現れる。**[zIma]mi**。《落花生》、**[tara]ma**。《多良間》。無核韻律語の言い切りでは、韻律語末尾に向かって緩く上昇していく。しばしば韻律語の真ん中が凹む音調が聞かれることもある。**kacjuu**。《鰹》、**jaama**。《八重山》。a 型の複合語では、複合語全体で凹むパターンが聞かれる。**waa Mcu**。《豚味噌》、**jaama Mcu**。《八重山味噌》。

文頭の 2 モーラ有核韻律語は欠けている。このことが通時的にこの方言のアクセント体系を動かす要因となった (6 節)。文中の 2 モーラ有核韻律語は存在するが、完全に自立的でなく、前の韻律語末位部分から上昇する (「(前韻律語) 早昇り」)。**b: (mu[gl]^(Mcu)) meedu** 《麦味噌も》。松森 (2013a) では「3 モーラのフット」あるいは「3 モーラの音調領域」を用いて説明している。有核韻律語の「3 モーラの H 連続の原則」については、この方言の音調把握に必須で同意する。一方、有核韻律語の長さが 3 モーラを超えると、当該韻律語内で上昇が遅れ、3 モーラ分の H が韻律語右寄せで形成される ((当韻律語)「遅昇り」)。**^(zI[maminu]), ^ (zIma[minudu])**。ただし、3 モーラ H 連続の原則は、final lowering がかかると H の連続する長さは 3 モーラより短くなる。**[zIma]mi**。《落花生》。なお、final lowering は 1 モーラ低下する場合と 1 音節低下する場合がある。例えば **^(zookaa)**《よい》は **zo[oka]a**。～ **zo[o]kaa**。しかしながら上昇の位置 (長母音の途中) は動かない。

a 型の 3 番目の H トーンについては別に取り上げる。

5 昇り核 (述語動詞が続くとき)

昇り核によって 2 回上昇する例について、述語動詞を例に取って見てみる。

(13) 述語動詞の対立

A: kacjuuju du nii-taa. 《鰹を(ぞ) 煮た》	kacjuu ju du nii-juu. 《鰹を(ぞ) 煮ている》
A: kacjuu ju du mi[i-ta]a. 《鰹を(ぞ) 見た》	kacjuu ju du mii-juu. 《鰹を(ぞ) 見ている》
B: avvo o du nii-taa. 《脂を(ぞ) 煮た》	avvo o du nii-juu. 《脂を(ぞ) 煮ている》
B: avvo o du mi[i-ta]a 《脂を(ぞ) 見た》	avvo o du mii-juu. 《脂を(ぞ) 見ている》
C: zI ma[mjuudu] nii-taa. 《落花生を(ぞ)煮た》	zI ma[mjuudu] nii-juu. 《落花生を(ぞ)煮ている》
C: zI ma[mjuudu mi[i-ta]]a. 《落花生を(ぞ)見た》	zI ma[mjuudu] mii-juu. 《落花生を(ぞ)見ている》
a: (kacjuuju du) a: (niitaa). 《鰹を(ぞ) 煮た》	(kacjuuju du) (nii) (juu). 《鰹を(ぞ) 煮ている》
a: (kacjuuju du) c: (mi[ita]a). 《鰹を(ぞ) 見た》	(kacjuuju du) (mii) (juu). 《鰹を(ぞ) 見ている》
a: (avvo odu) a: (niitaa). 《脂を(ぞ) 煮た》	(avvo odu) (nii) (juu). 《脂を(ぞ) 煮ている》
a: (avvo odu) c: ^ (mi[ita]a) 《脂を(ぞ) 見た》	(avvo odu) (mii) (juu). 《脂を(ぞ) 見ている》

c: $\wedge(zlma[mjuudu])$ a: (niitaa). 《落花生を(ぞ)煮た》 $\wedge(zlma[mjuudu])$ (nii) (juu). 《落花生(ぞ)を煮ている》
 c: $\wedge(zlma[mjuudu])$ c: $\wedge(mi[i-ta]a)$. 《落花生を(ぞ)見た》 $\wedge(zlma[mjuudu])$ (mii) (juu). 《落花生を(ぞ)見ている》

nii-taa. 《煮た》と $mi[i-ta]a$. 《見た》が対立している。c 型が連続する、 $zlma[mjuudu] mi[i-ta]a$.
 ($\wedge(\sqrt{c}zlma[mjuudu]) \wedge(\sqrt{c}mi[i-ta]a)$) 《落花生を(ぞ)見た》 のときは、述語に 2 度目の上昇が現れる。なお、c 型の韻律語内での上昇位置は「3 モーラ H の原則」に従う。一方、nii-uu 《煮ている》と mii-uu 《見ている》は対立を失っている。本来、 $(\sqrt{A}nii) (uu)$ と $\wedge(\sqrt{c}mii) (uu)$ の対立であったものが、有核の 2 モーラ韻律語が消失することによって両者の対立を失ったものである。 $(\sqrt{A}niitaa)$ 《煮ている》と $\wedge(\sqrt{c}mi[i-ta]a)$ 《見ている》はそれぞれ長い 1 韻律語であるが故に、対立が保たれた。

6 不均衡な体系の成立

(7) (8) など、短い単語に不均衡な体系が生じた通時的なプロセスについて考察する。前提としてあるのは、与那覇方言もかつては多くの環境において三型体系をキープしていたことである。(7) (8) よりも古い三型の姿から、① 2 モーラ有核韻律語が消失し無核韻律語に変化した、② 無核 a 型の副韻律語の助詞類が有核になり b 型に変化した、この 2 つの変化がこの方言のアクセント体系の姿を大きく変えたと推定する。以下、枠は現在の与那覇の合流の状態を示す。

(14) ①の 2 モーラ有核韻律語の消失

c: $\wedge(\sqrt{c} \circ \circ)$.	c: $\wedge(\sqrt{c} \circ \circ) (meedu) \dots$	c: $\wedge(\sqrt{c} \circ \circ) (\circ \circ)$.	c: $\wedge(\sqrt{c} \circ \circ) (\circ \circ) (meedu) \dots$
a: $(\sqrt{A} \circ \circ)$.	a: $(\sqrt{A} \circ \circ) (meedu) \dots$	a: $(\sqrt{A} \circ \circ) (\circ \circ)$.	a: $(\sqrt{A} \circ \circ) (\circ \circ) (meedu) \dots$
a: $(\sqrt{B} \circ \circ)$.	b: $(\sqrt{B} \circ \circ) \wedge (meedu) \dots$	b: $(\sqrt{B} \circ \circ) \wedge (\circ \circ)$.	b: $(\sqrt{B} \circ \circ) \wedge (\circ \circ) (meedu) \dots$

(15) ①の変化のあとから②の変化が起きる

---	---	---	---
a: $(\sqrt{AC} \circ \circ)$.	b: $(\sqrt{AC} \circ \circ) \wedge (meedu) \dots$	a: $(\sqrt{AC} \circ \circ) (\circ \circ)$.	a: $(\sqrt{AC} \circ \circ) (\circ \circ) \wedge (meedu) \dots$
a: $(\sqrt{B} \circ \circ)$.	b: $(\sqrt{B} \circ \circ) \wedge (meedu) \dots$	b: $(\sqrt{B} \circ \circ) \wedge (\circ \circ)$.	b: $(\sqrt{B} \circ \circ) \wedge (\circ \circ) (meedu) \dots$

(16) ②の変化のあとの状態

---	---	---	---
a: $(\sqrt{ACB} \circ \circ)$.	b: $(\sqrt{ACB} \circ \circ) \wedge (meedu) \dots$	a: $(\sqrt{AC} \circ \circ) (\circ \circ)$.	a: $(\sqrt{AC} \circ \circ) (\circ \circ) \wedge (meedu) \dots$
		b: $(\sqrt{B} \circ \circ) \wedge (\circ \circ)$.	b: $(\sqrt{B} \circ \circ) \wedge (\circ \circ) (meedu) \dots$

a 型から b 型への変化は多良間方言や池間方言にも見られ (五十嵐 2016)、宮古諸方言の全体的な傾向であろう。①の変化は与那覇方言独特のものである。

7 複合語および a 型の検討

これまで a 型は、「主韻律語自体が無核、次が副韻律語の場合はそれも無核」としてきた。しかしながら、複合語や「～の～」の長い主節になると、A: guma Mcu **[meedu]**...、gumanu Mcu **[meedu]**... など 3 番目の韻律語に H 音調が現れるのは、(7), (10) で見たとおりである。

ここでは、この問題を扱う。(17), (18) では、3 要素の複合語を加えた。

(17) 2 要素、3 要素の複合語

A (a 型)	B (b 型)	C (c 型)
kuba gii。	ma [mi gi] i。	[adaN] gii。
(kuba) (gii)。	(mami) ^ (gii)。	^(adaN) (gii)。
kuba gii [meedu] aa	ma [mi gii] meedu...	[adaN] gii meedu...
(kuba) (gii) ^ (meedu) (aa)	(mami) ^ (gii) (meedu)...	^(adaN) (gii) (meedu)...
kuba gii jama [meedu] ...	ma [mi gii] jama meedu...	[adaN] gii jama meedu...
(kuba) (gii) (jama) ^ (meedu)...	(mami) ^ (gii) (jama) (meedu)...	^(adaN) (gii) (jama) (meedu)...
kuba 「ビロウ」、mami 「豆」、adaN 「アダン」、gii 「木」、jama 「山」、meedu 「も(ぞ)」、aa 「ある」		

(18) ～の木、～木の～の複合語

A (a 型)	B (b 型)	C (c 型)
kubanu gii。	mami [nu gi] i。	a [daNnu] gii。
(kubanu) (gii)。	(maminu) ^ (gii)。	(adaNnu) (gii)。
kubanu gii [meedu] aa	mami [nu gii] meedu...	[adaN] gii meedu...
(kubanu) (gii) ^ (meedu) aa	(maminu) ^ (gii) (meedu)...	^(adaN) (gii) (meedu)...
kuba gii [nu juda] meedu...	mami [giinu] juda meedu...	[adaN] giinu juda meedu...
(kuba) (giinu) ^ (juda) meedu...	(mami) ^ (giinu) (juda) (meedu)...	^(adaN) (giinu) (juda) (meedu)...
～nu 「～の」、juda 「枝」		

松森 (2013b) では、それぞれの「型」の音調メロディーを A 型 LLH、B 型 LHL、C 型 HLL と定め、(17) (18) の A 型（ここでの a 型）の 3 番目の韻律語の H 音調は、LLH の H にほとんど合致するものであるが、3 要素複合語 kuba gii jama **[meedu]**... 《クバ木山も》のとき、合わなくなってしまう。LLH の H は単純に 3 番目のポジションではなく、文節末を意味すると修正した場合、今度は kuba gii**[nu juda]** meedu... 《クバ木の枝も》で齟齬をきたすのである。発表者も決定的な解決策に至っていないが、この種の H の出現には、いくつかの可能性があり、複合的に関係していると推察する。いくつかの可能性とは次の i)～iii) である。i) L 韻律語（無核韻律語）が LLL と 3 つ連続した場合は、LLH になる一種の異化。これは Igarashi et al. (2018) であげられた RA-II の交替と類似する。ii) a 型は文節末では H 音

調をもつ。これは文節の区切りの明示する働きをする。これは a 型から b 型へ変化する流れと同方向である。iii) X=nu Y 《X の Y》の連体構造において、a 型のみ Y に核をもつ。これは多良間方言でも見られることであるが、与那覇では c 型では Y の有核が当てはまらない。発表者は、i), ii), iii) の順で可能性が高いと考えている。3 要素複合語は例外で、別々の 3 つの韻律語から成るとはいえ、1 つの単語内では LLL>LLH が起きなかったと考える。いずれの場合も A の最初の語根が 3 番目、4 番目の韻律語をコントロールしているのではなく、語彙指定外 (post-lexical) の H 音調と捉えているのは共通である。

8 文例分析

(19) ～味噌の匂いはするよ

a: kacjuuMcu=nu [kaza=a] sjii=du uu.

(kacjuu) (Mcunu) ^ (kaza=a) (sjii) (duu).

b: avva[Mcu=nu] kaza=a sjii=du uu.

(avva) ^ (Mcunu) (kaza=a) (sjii) (duu).

c: [zImami]Mcu=nu kaza=a sjii=du uu.

^ (zImami) (Mcunu) (kaza=a) (sjii) (duu).

(20) ～味噌(が)ばかり(ぞ)ある

a: kacjuuMcu=nu [tiaN]=du aa.

(kacjuu) (Mcunu) ^ (tiaN) (daa).

b: avva[Mcu=nu] [tiaN]=du aa.

(avva) ^ (Mcunu) ^ (tiaN) (daa).

c: [zImami]Mcu=nu [tiaN]=du aa.

^ (zImami) (Mcunu) ^ (tiaN) (daa).

(19), (20) の実例は、先の (7) であげた「d'形」である。述語の韻律語で エリジオンの(duu), (daa) の形を書いている。

(19a) (kaza=a) 《匂いは》は H 音調で出るが post-lexical な指定によると見る。それに対して(20a, b, c) の全てで tiaN 《ばかり》は高く現れ、有核韻律語と見なされる。(20b) では b 型の ^ (Mcunu) 《味噌の》で一旦上昇した後、^ (tiaN) でさらに上昇し、2 回の上昇がある点で (20a) と対立している。「昇り核」が機能している好例である。

【引用文献】(与那覇方言以外の研究成果について出典文献の詳細を省いた。お詫び申し上げます。)

五十嵐陽介 (2012) 「南琉球宮古語与那覇方言の名詞のアクセント体系: 初期報告」『国立国語研究所共同研究報告 12-02 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書』国立国語研究所, 53-68. / 五十嵐陽介 (2016) 「名詞の意味が関わるアクセントの合流 —南琉球宮古語池間方言の事例—」『音声研究』20 (3), 46-65. / 上野善道 (2019) 「人間の言語能力と言語多様性」嶋田珠巳・斎藤兆史・大津由紀雄編『言語接触—英語化する日本から考える「言語とはなにか」—』65-96, 東京大学出版会. / 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』明治書院. / 松森晶子 (2013a) 「宮古島与那覇方言のアクセント交替」『日本女子大学紀要 文学部』62, 1-21. / 松森晶子 (2013b) 「宮古島における 3 型アクセント体系の発見」『国立国語研究所論集』6, 67-92. / Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Hayashi Yuka & Tomoyuki Kubo (2018) “Tonal neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan,” Kubozono, H. & Griko, M. (eds.) *Tonal Change and Neutralization*, De Gruyter Mouton, 83-128.

《方言関係新刊書目》(115号につづく)

国立国語研究所研究図書室が2022年9月以降に受け入れた図書の中から、2017年以降の刊行物を選びました。なお、同図書室目録に未記載の文献でも、内容を確認したものは掲載しました。

お気づきの点は、日本方言研究会事務局

〒370-1193 群馬県佐波郡玉村町上之手1395-1 群馬県立女子大学文学部国文学科 気付
hougen-jim@e-mail.jp

までお知らせください。

▼ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち 企画展示

国立歴史民俗博物館編，国立歴史民俗博物館，220p+挿図+肖像+地図-30cm. 2019(H31)年01月

▼コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論2

小川芳樹編，開拓社，440p-22cm. 2019(R01)年11月

▼おぼんでございます

桜木紫乃著，北海道新聞社，190p-19cm. 2020(R02)年11月

▼右さん左さんぎゃんぎゃん：熊本弁コード苑リターンズ

工事郎著，熊本日新新聞社，熊日出版(発売)，231p+挿図-21cm. 2019(R01)年11月

▼椎葉の歴史物語

新山芳彦著，鉾脈社，279p-21cm. 2020(R02)年12月

▼东南亚语言汉语借词研究

韦树关等著，上海辞书出版社，8+618p-27cm. 2020(R02)年13月

▼Biliteracy in young Japanese siblings (Hituzi linguistics in English: no. 32)

Joy Taniguchi, Hituzi Syobo, xiii+192p.+ill.-23cm. 2021(R03)年02月

▼安島方言集

間海幸洋編，間海幸洋，46p-30cm. 2021(R03)年03月

▼医療専門用語言い換え辞典：医療系学生のための

大久保恵美子著，メヂカルフレンド社，270p+挿図-15cm. 2021(R03)年04月

▼医療現場の外国人対応英語だけじゃない「やさしい日本語」

武田裕子，岩田一成，新居みどり著，南山堂，vii+119p+挿図-21cm. 2021(R03)年05月

▼アイヌ語系地名総覧：青森から沖縄まで

菅原進著，ツーワンライフ，791p-26cm. 2021(R03)年06月

▼商人や旅人がはこんできた山口の昔話

黒瀬圭子再話，大鷹進絵，石風社，86p-22cm. 2021(R03)年07月

▼音声：上（音響学講座6）

滝口哲也編著，有木康雄[ほか]共著，コロナ社，ix+309p+挿図-21cm. 2021(R03)年09月

▼沖縄からアジアが見える（岩波書店1999年刊の再刊）

- 比嘉政夫著, 吉川弘文館, 191p+挿図+肖像+地図-19cm. 2021 (R03) 年 11 月
- ▼ともに生きるために：ウェルフェア・リングイスティクスと生態学の視点からみることばの教育
尾辻恵美, 熊谷由理, 佐藤慎司編, ハインリッヒ, パトリック [ほか] 著, 春風社, 299p+挿図-21cm.
2021 (R03) 年 11 月
- ▼英、漢、日運動事件表达的比較研究
吳建偉著, 上海交通大學出版社, 2+4+206p-24cm. 2021 (R03) 年 12 月
- ▼地域資料のアーカイブ戦略
蛭田廣一編, 日本図書館協会, viii+160p+挿図-19cm. 2021 (R03) 年 12 月
- ▼大分弁俳句集：物すべて丸うしちから（銀鈴叢書）
油布晃, 古田恵美子著, 銀の鈴社, 77p-20cm. 2022 (R04) 年 01 月
- ▼民俗学入門（岩波新書：新赤版 1910）
菊地暁著, 岩波書店, vi+244p+挿図+肖像+地図-18cm. 2022 (R04) 年 01 月
- ▼「限界」志向のロシア語と「安定」志向の日本語：アスペクト表現のロシア語・日本語対照研究
金子百合子著, ひつじ書房, xvi+378p-22cm. 2022 (R04) 年 02 月
- ▼大里のちて一ばなし
伊芸弘子, 南城市教育委員会編, 南城市教育委員会, 522p+挿図+地図-26cm. 2022 (R04) 年 02 月
- ▼相互行為能力の諸相：共構築・ナラティブ・自己形成
佐川祥予著, 溪水社, iv+257p-22cm. 2022 (R04) 年 02 月
- ▼ナラティブ研究の実践と応用：現代社会への理解と貢献に向けて
那須雅子, 坂本南美, 寺西雅之編著, 学術研究出版, 173p+挿図-22cm. 2022 (R04) 年 02 月
- ▼日本語を母語および第二言語とする子どもの言語学習におけるインプット情報の役割
趙墨著, ココ出版, 181p+挿図-22cm. 2022 (R04) 年 02 月
- ▼記者ハンドブック：新聞用字用語集（第 14 版）
共同通信社編著, 共同通信社, 751p-18cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼更生の伊仙村史：伊仙町誌（復刻版：「令和版伊仙町誌」資料集 1）
伊仙町誌編纂室編集, 伊仙町, 555p+挿図+地図+肖像-30cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼国際日本研究への誘い：日本をたどりなおす 29 の方法
坂本恵, 友常勉, 東京外国語大学国際日本研究センター編, 東京外国語大学出版会, 381p-21cm.
2022 (R04) 年 03 月
- ▼ことば探偵の冒険新語・流行語を追え！ 小学生のミカタ
田中牧郎監修, 小学館, 127p+挿図-21cm. 2022 (R04) 年 03 月
- ▼《红楼梦》中の北京方言日译研究
刘佳著, 北京：外文出版社, i+xii+226p-23cm. 2022 (R04) 年 04 月
- ▼文法・語彙（新東京都言語地図：平成初期の東京のことば）
久野マリ子編著, 國學院大學, xv+255p+地図-30cm. 2022 (R04) 年 05 月
- ▼Data and methods in corpus linguistics: comparative approaches

- edited by Ole Schützler, Julia Schlüter, Cambridge : Cambridge University Press,
xvi+357p.+ill.-24cm. 2022(R04)年 06 月
- ▼距離分布からみる空間
腰塚武志著, 筑波大学出版会, 丸善出版 (発売), vi+233p-21cm. 2022(R04)年 06 月
- ▼八丈島 (日本語方言の研究 1 復刻)
昭和女子大学方言研究会 [編], 昭和女子大学方言研究会, 212p+挿図-26cm. 2022(R04)年 06 月
- ▼0 (ゼロ) から学べる島むに読本: 琉球沖永良部島のことば
横山晶子著, ひつじ書房, 155p-26cm. 2022(R04)年 07 月
- ▼あおり俗信辞典
佐々木達司編, 山田巖子, 小池淳一補訂, 青森文芸出版, 251p-21cm. 2022(R04)年 07 月
- ▼フィールドワークの学び方: 国際学生との協働からオンライン調査まで
村田晶子, 箕曲在弘, 佐藤慎司編著, ナカニシヤ出版, vi+145p+挿図-26cm. 2022(R04)年 07 月
- ▼「聖・俗・遊」言語遷移論: 遊戯する言語に向けて
中井孝章著, 日本教育研究センター, ii+103p+挿図-21cm. 2022(R04)年 08 月
- ▼Corpus linguistics and translation tools for digital humanities: research methods and applications
edited by Stefania M. Maci, Michele Sala, London : Bloomsbury Academic, xii+227p.+ill.-25cm. 2022(R04)年 08 月
- ▼一語から始める小さな日本語学
金澤裕之, 山内博之編, ひつじ書房, xi+258p+挿図-21cm. 2022(R04)年 08 月
- ▼エンパシー制約にみられる言語変化と語用論: 日本語古典から現代英語まで
千葉修司著, 開拓社, viii+196p-19cm. 2022(R04)年 08 月
- ▼先住民族アイヌを学ぶ: 藤戸ひろ子さんに聞いてみた
藤戸ひろ子, 石川康宏, 建石始, 大澤香共著, 日本機関紙出版センター, 148p-21cm. 2022(R04)年 08 月
- ▼Identity, language and education of Sakhalin Japanese and Koreans: continual diaspora
Svetlana Paichadze, Cham : Springer, xxv+143p.+ill. (somecol.)-25cm. 2022(R04)年 09 月
- ▼Language and gender in children's animated films
Carmen Fought, Karen Eisenhauer, Cambridge : Cambridge University Press, xiv+240p.+ill.-23cm. 2022(R04)年 09 月
- ▼あゝ: 教科書が教えない日本語 (中公新書ラクレ 772)
山口謠司著, 中央公論新社, 298p+挿図-18cm. 2022(R04)年 09 月
- ▼戦後沖縄生活史事典: 1945-1972
川平成雄, 松田賀孝, 新木順子編, 吉川弘文館, 14+484p+挿図+肖像-23cm. 2022(R04)年 09 月
- ▼東西日本境界地帯の方言: 滋賀県彦根-岐阜県大垣間方言調査報告書: 上巻
杉崎好洋著, 三恵社, 258p+挿図+地図-26cm. 2022(R04)年 09 月

- ▼遠野物語と柳田國男：日本人のルーツをさぐる（歴史文化ライブラリー556）
新谷尚紀著，吉川弘文館，9+218p+挿図+地図+肖像-19cm. 2022(R04)年 09 月
- ▼特集 フィールドワークでの「失敗」から得たこと（社会と調査：第29号）
社会調査協会編，社会調査協会，京都通信社（発売），105p+挿図-26cm. 2022(R04)年 09 月
- ▼「日系」をめぐることばと文化：移動する人の創造性と多様性
松田真希子，中井精一，坂本光代編，くろしお出版，v+229p+挿図+肖像-21cm. 2022(R04)年 10 月
- ▼歌（アヤゴ）の島・宮古のネフスキー：新資料で辿るロシア人学者の宮古研究の道程
田中水絵著，ボーダーインク，158p+挿図+肖像+地図-22cm. 2022(R04)年 10 月
- ▼音韻理論と音韻変化（最新英語学・言語学シリーズ 19）
服部範子，柴田知薫子著，開拓社，xii+232p-21cm. 2022(R04)年 10 月
- ▼言語進化学の未来を共創する
岡ノ谷一夫，藤田耕司編，ひつじ書房，xi+311p+挿図+肖像-22cm. 2022(R04)年 10 月
- ▼コーパスによる日本語史研究：中古・中世編
青木博史，岡崎友子，小木曾智信編，ひつじ書房，ix+327p+挿図-21cm. 2022(R04)年 10 月
- ▼札幌の地名がわかる本：10 区の地名を徹底解説！（増補改訂版）
関秀志編，亜璃西社，505p+図版[8]p+挿図+地図-19cm. 2022(R04)年 10 月
- ▼地域での日本語活動を考える：多文化社会葛飾からの発信
野山広〔ほか〕編，ココ出版，ix+327p+挿図-21cm. 2022(R04)年 10 月
- ▼ネーミングの言語文化（言文研研究叢書：no. 1）
玉井暲編，武庫川女子大学言語文化研究所，186p+挿図+肖像-21cm. 2022(R04)年 10 月
- ▼ハンケな島ことば：八丈島の日常会話
松岡きの著，風詠社，星雲社（発売），35p-16×22cm. 2022(R04)年 10 月
- ▼萬葉集の言語表現
影山尚之著，和泉書院，ii+274p+挿図+地図-22cm. 2022(R04)年 10 月
- ▼んきゃーんじゅくカルタ
ことわざ選定さどやませいこ，藤田ラウンド幸世編，宮古島伝承の旅 2022. 10，ひつじ書房，かるた
1 箱+解説シート 1 枚. 2022(R04)年 10 月
- ▼「移民国家」としての日本：共生への展望（岩波新書：新赤版 1947）
宮島喬著，岩波書店，vii+195p+挿図-18cm. 2022(R04)年 11 月
- ▼「日本人の日本語」を考える：プレイン・ランゲージをめぐるって
庵功雄編著，丸善出版，viii+248p+挿図-22cm. 2022(R04)年 11 月
- ▼Handbook of the ainu language
edited by Anna Bugaeva, Berlin ; Boston : De Gruyter Mouton, xli+699p.+ill.+maps-25cm.
2022(R04)年 11 月
- ▼音韻と表記史（築島裕著作集：第5巻）
築島裕著，汲古書院，7+580p+挿図-22cm. 2022(R04)年 11 月

▼関西人 vs 関東人ここまで違うことばの常識

博学こだわり倶楽部編, 河出書房新社, 222p-15cm.

2022 (R04) 年 11 月

▼北のモノ・コト・ヒト：ことばと博物館の出会い

津曲敏郎著, 北海道大学出版会, iv+438+iip+挿図+地図+肖像-21cm.

2022 (R04) 年 11 月

▼京都文化および動植物の国文学的探究：矢野貫一著作集

矢野貫一著, 勉誠出版 (発売), 10+727+13p+挿図+地図-22cm.

2022 (R04) 年 11 月

▼語用論の基礎を理解する (改訂版)

Gunter Senft 著, 石崎雅人, 野呂幾久子訳, 開拓社, xviii+324p-21cm.

2022 (R04) 年 11 月

▼社会言語学の粹組み

井上史雄, 田邊和子編著, 堀江薫 [ほか] 著, くろしお出版, vi+215p-21cm.

2022 (R04) 年 11 月

▼人文地理学のパースペクティブ

竹中克行編著, ミネルヴァ書房, x+290p+挿図+地図-21cm.

2022 (R04) 年 11 月

▼全国調査による感動詞の方言学

小林隆編, 小林隆 [ほか執筆], ひつじ書房, ix+375p-21cm.

2022 (R04) 年 11 月

▼地域発見と地理認識：観光旅行とポタリングの楽しみ方

西脇保幸著, 春風社, xvi+500p-22cm.

2022 (R04) 年 11 月

▼方言聖句, 津軽弁・大阪弁・沖縄弁篇

国吉守著, 岩橋竜介著, 鎌田新著, いのちのことば社フォレストブックス, 93p-19cm.

2022 (R04) 年 11 月

▼民俗学の射程

須藤護, 山田貴生, 黒崎英花編著, 晃洋書房, xiv+224+4p-21cm.

2022 (R04) 年 11 月

▼柳田國男のペン：書入れにみる後代へのメッセージ

茂木明子編著, 慶友社, 291p-22cm.

2022 (R04) 年 11 月

▼「させていただく」大研究

椎名美智, 滝浦真人編, 飯間浩明 [ほか執筆], くろしお出版, ii+327p+挿図+地図-21cm.

2022 (R04) 年 12 月

▼沖縄の地域文化を訪ねる：波照間島から伊是名島まで

今林直樹著, コールサック社, 350p-19cm.

2022 (R04) 年 12 月

▼コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 3

小川芳樹, 中山俊秀編, 開拓社, xiii+445p+挿図-22cm.

2022 (R04) 年 12 月

▼古代の粘土板から大航海時代、津波マップまで

ジョン・O・E・クラーク編, 伊藤晶子, 小林朋子訳, 原書房, 229p+挿図+地図-22cm.

2022 (R04) 年 12 月

▼縄文語への道：古代地名をたどって

筒井功編, 河出書房新社, 315p+挿図-20cm.

2022 (R04) 年 12 月

▼たるーの島唄まじめな研究：沖縄民謡歌詞研究の参考書

- 関洋著, ゆがふ芸能企画, 424p-26cm. 2022 (R04) 年 12 月
- ▼ユーラシアのわだち：言語、民話、小話 改訂版
下宮忠雄, 文芸社, 194p+挿図-18cm. 2022 (R04) 年 12 月
- ▼音声：下（音響学講座 7）
岩野公司編著, 河原達也 [ほか] 共著, コロナ社, ix+192p+挿図-21cm. 2023 (R05) 年 01 月
- ▼語(かだ)るびゃ・語(かだ)るべし青森県の方言報告書 2022
今村かほる編, 弘前学院大学文学部今村かほる, 86p+挿図-30cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼澤川物語 民俗と方言
澤田宏著, 桂書房, 238p-30cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼手話言語学のトピック：基礎から最前線へ
松岡和美, 内堀朝子編, くろしお出版, 292p-21cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼抄物の言語と資料：中世室町期の形容詞派生と文法変化
山本佐和子著, くろしお出版, 452p-22cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼北海道方言と東北・新潟方言の地理的・年齢的勢力分布と動態：地図とグラフによる 2000 年前後の勢力分布と動態解明の試み 2
見野久幸編著, [見野久幸], DVD-R1 枚-12cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼語用論的方言学の方法（ひつじ研究叢書（言語編） 第 191 巻）
小林隆著, ひつじ書房, 567p-22cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼福井県の方言：ふるさとのことば再発見
加藤和夫ほか著；福井県郷土誌懇談会編, 岩田書院, 171p+挿図+地図-22cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼目で見る方言
岡部敬史(文), 山出高士(写真), 東京書籍, 176p-21cm. 2023 (R05) 年 03 月

(担当：山岡華菜子)

2022 年度方言関係博士論文・修士論文・卒業論文一覧

各大学からの情報提供により、2022 年度の方言関係の博士論文・修士論文・卒業論文の題目などを掲載します。大学名は 50 音順です。一部に 2022 年度以前分の補遺も含まれます。

今後とも積極的な情報提供をお願いいたします。書式等は、以下を参考にしてください。また、情報提供の際は、研究発表会委員会宛に電子メールでご連絡ください。メールアドレスは、奥付に記載しています。

■博士論文■

【同志社大学】

○西日本諸方言におけるアスペクト形式の文法化—2つの動機に基づく待遇化プロセス—(鴨井修平)

アスペクト形式の文法化において、中国語では事実確認を標示するようにムード化するが、西日本諸方言では卑罵性を標示するように待遇化しているという問題がある。本稿は、西日本諸方言を中心とした記述に基づいて、アスペクト形式の待遇化には、“機能重複”と“待遇価”の2つの動機があるという仮説を提案するものである。

【東北大学大学院文学研究科】

○日本語教育における方言の実践的研究(後藤典子)

本論文は、留学生や就労者などの外国人が直面する方言理解の問題を、日本語教育の中でいかに解決していくか、山形方言をフィールドとして実践的に論じたものである。まず、外国人の方言理解の実態を調査し、方言教育とそのための教材作成の必要性を提言する。次に、外国人に教えるべき方言要素は何かを明らかにし、それに基づいて実際に教材開発を試みる。さらに、介護現場での会話を分析し、今後の方言教育に生かす知見の獲得に意を注いでいる。

■修士論文■

【大阪教育大学大学院教育学研究科高度教育支援開発専攻国際協働教育コース日本語教育支援高度化領域】

○日本語教育における方言教育に関する研究—関西圏で暮らす外国人留学生の方言意識を中心に—(劉夢月)

関西で暮らす留学生(日本語学校・大学・大学院)に、日本語教育としての方言教育のありかたについての意識を尋ねるアンケート調査を実施した。その結果、多くの留学生が関西方言に肯定的な興味を持ち、特に関西で進学・就職を希望する留学生の学習意欲が高いことがわかった。また、希望する学習程度については、方言の聴解に留まる回答が目立った。さらに市民と直接交流できる地域日本語教室で方言の学習を希望する回答が多かった。以上から、今後は地域日本語教室が方言研究者と協力し、留学生のニーズに応じた関西方言の学習環境を準備する必要があると考えられる。

【大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻】

○近畿地方と首都圏における若年層の依頼及び禁止言語行動の差：方言理解ツールへの示唆（BAYU BAGUS MAHENDRA）

初級日本語教材で多く取り上げられる依頼場面と禁止場面中心に、4つの場面（外的依頼、私的依頼、外的禁止、私的禁止）の言い方について、首都圏と近畿地方の若年層を対象にした自由記述の調査を行った。機能的要素と言語表現の分析を行った結果、近畿地方若年層は厳密な言語行動の切り換えを行い、対人配慮を表す要素と、言語表現の表現の婉曲さのバランスを保つという言語行動の特徴を持つことが明らかになった。さらに、より会話に実用できる方言理解ツールの開発のため、次の3点を示唆する。①従来のツールにみられることばの置き換えは語彙的地域差に関する理解の促進のため提示する、②言語行動の地域差に関する理解の促進のため、標準語が多用される首都圏の言語行動と、該当地域の言語行動に基づく会話モデルとに対して評価活動をデザインする、③学習者にとって実践的なケースに沿った言語行動の示し方を提示する。

【大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻日本語学専門分野】

○山梨県西部方言における命令形式とその運用—命令形とテ形を中心に—（相川大知）

山梨県西部方言の命令形式として命令形単独形式、連用形+ナサイ、連用形+ナ、テ形、テクレ、テクリョウ、テクダサイを取り上げ、誰に、どのように使用するのかという運用について、内省によって記述した。具体的には、発話機能および話し手と聞き手の関係を記述の枠組みとして、運用の整理を行った。また、命令形単独形式とテクリョウについては終助詞シが後接した場合の運用も扱い、ポライトネスの観点からも運用のシステムについて考察した。

【東北大学大学院文学研究科】

○言語行動の志向とその地域差についての研究（加順咲帆）

本論文は、言語行動の志向の地域差について、気仙沼市方言（東北方言）と大阪市方言（近畿方言）の特徴を論じたものである。特に、「配慮表明」と「受け止め表明」の2つの言語行動に焦点を当て、一方の地域の話者に他方の地域の会話を提示し違和感を抽出するという新たな方法論を提案することで、両地域の違いを明らかにした。

○宮城県方言における言語行動の地域差についての研究（村上璃子）

本論文は、従来大局的な地域差の指摘にとどまっている言語行動の地域差を、宮城県という一地域の方言に限定することで、狭域における詳細な地域差を明らかにしようとしたものである。名取市方言と気仙沼市方言を対象として選び、依頼言語行動における両地域の違いを、会話データと面接調査の結果から描き出している。

○岩手県岩泉町方言の音韻（和村実咲）

本論文は、岩手県岩泉町方言の音韻について、高年層を中心とした記述調査の結果をもとに論じたものである。特に、シ・ス、ジ・ズ、チ・ツの中舌化については、先行研究で指摘されている区別のある段階から、北奥方言的段階（si に統合）を経て、現在は南奥方言的段階（su に統合）へと移行

しつつあることを明らかにした。

【日本大学大学院文学研究科国文学専攻】

○千葉県下総・上総の方言と方言意識（峰島大貴）

2022年に千葉県生育者を対象とした方言と方言意識についてのアンケート調査によって得た10-30代の若年層42人の回答を整理し、報告したもの。調査項目は、フェイス項目の他、方言意識、伝統的な方言語彙、新方言、子どもの遊び、関東「ベー」の6分野計126項目である。伝統的な方言形式や生育地域を含む回答者属性差等もほとんど認められなかったが、子どもの遊びについては独特の呼称や掛け声や調査域内の地域差、「ベー」については回答者属性・用法による使用率の差などが観察された。

【広島大学大学院人間社会科学研究科】

○名古屋市方言における確認要求表現（稲熊詩帆）

本研究は、名古屋市方言の確認要求表現を対象としたものである。面接質問調査・自然談話調査から得られたデータ及び内省によるデータにもとづき、確認要求表現として用いられる種々の形式の形態統語的特徴・韻律的特徴・意味的特徴を記述し、形式を用法にしたがって体系的に整理して、世代差をもとに体系の変化について考察した。同方言に特徴的な「ガ系終助詞」に加え、標準語・他方言と共通する形式とその音調についても記述を行い、これにより、文末イントネーションや後続する終助詞と用法の関係などの点で、形式間の特徴の共通性を明らかにした。また、体系の世代差の分析により、中年層・若年層で形式が増加し、形式または音調による用法の区別が発達したことを示した。

■卒業論文■

【秋田大学教育文化学部地域文化学科】

○若者言葉の男女差（川村侑生）

若者における男女それぞれの言葉遣いの違いについて、SNSの発展という社会的事実を踏まえ、特に話し言葉と書き言葉の関係に着目して考察した。

○秋田弁の使用と意識の世代差（佐々木達夢）

秋田弁の衰退や維持について、中・若年層の使用状況と意識の面から調査し、その結果をもとに、秋田弁の将来を予測した。

○秋田県由利地域と県央地域の両地域間における方言の推移（佐藤琴音）

出身地である由利地域において世代ごとで使用する方言が異なることについて、秋田市を中心とする中央地区からの言葉の伝播や影響関係に理由を求めて考察した。

○日本語話者と日本語学習者の長音の知覚（篠山葉月）

日本語話者と日本語学習者を対象に、長音についての聴取・筆記・発話の調査を行い、日本語学習

者における知覚・生成の特徴を分析した。

○現代のオノマトペに見られる特徴（高橋綾香）

新語・流行語や商品名に用いられるなど、従来とは異なる場面・用法で使われるオノマトペの特徴を、方言を含めた旧来型のものと比較し考察した。

○日本語の意味変化の諸相（日向海帆）

本来の意味とは異なる意味で用いられている日本語について、いつ頃から、なぜそうなのかを調査し、言葉の変化のバリエーションと方向性を考察した。

【大阪教育大学教育学部教育協働学科グローバル教育講座多文化リテラシーコース】

○留学生のための日本語教育における方言の位置づけに関する考察—大阪と仙台で暮らす留学生の意識の比較を通して—（武索碩）

大阪府柏原市内の大学・大学院に通う留学生と宮城県仙台市内の大学に通う大学・大学院の留学生に方言教育の必要性に関するアンケート調査を実施した。その結果、大阪では方言教育を積極に取り入れるべきと考える留学生が仙台に比べて多かった。また、方言教育に対して大阪では日常生活のコミュニケーションの円滑化を期待する回答が多いのに対し、仙台では日本文化の理解として方言を重視する傾向が強いことがわかった。

【大阪大学文学部日本語学専修】

○大阪方言における授受表現—「テヤル」に由来する「タル」について—（河野千尋）

本稿では授受補助動詞構文の一つである「てやる」の大阪方言における形式「タル」について内省に基づいて記述し、「タル」が、主に恩恵性の遠心的授与を意味するが依頼場面に限り話し手に向かう求心的恩恵の意味でも使用できること、待遇的には標準語ほど明確な下向き待遇の意味はなく、親しい間柄では待遇的にニュートラルに用いられることを述べた。また、「タル」と「テアゲル」の使用状況や意味の違いについても述べた。

○金沢方言におけるノダ相当表現の変化（中江咲葉）

石川県金沢市には共通語の「のだ」に相当する伝統的な方言形式として「ガヤ」があり、これまで変化しながら複数の形式が成立してきた。先行研究で、世代別に収集された金沢方言話者の自然談話データをもとにノダ相当表現を形式面から分析されていることを踏まえ、本稿では、その調査から11年を経た2022年現在の若年層を対象に同様の調査を行い、現在のノダ相当表現の変化と、その変化に関わる要因について明らかにした。

○京都方言話者のLINEのことは—親しい友人とのLINEチャットにおけるスタイル切り換えに着目して—（長谷川京里）

本研究は、若年層京都方言話者を対象に、基本的には京阪方言を用いて普通体でやり取りを行う親しい友人とのLINEチャットにおいて、標準語や丁寧語がどのように使用されているのか、その切り換えの実態を記述したものである。その上で、京阪方言・標準語・丁寧語それぞれの役割・効果を考察し、方言話者が3つのスタイルを適宜選択しながら文字によるカジュアルなコミュニケーションを

行っていることを明らかにした。

○福井県金津方言の終助詞「マ」「ヤ」「ノ」—行為要求表現のテ形に接続する場合を中心に—（馬場 瞳）

福井県金津方言における終助詞「マ」「ヤ」「ノ」について、これらの終助詞がすべて接続可能な行為要求表現のテ形に焦点を当てて分析を行った。①タイミング、②矛盾の有無、③発話状況、④話し手・聞き手の意向から分析の枠組みを構成し、これを用いて各終助詞の意味や機能を明らかにした。また、終助詞の使い分けによる金津方言における行為要求表現の多様性にも言及した。

○佐賀県東部方言の待遇表現形式「ンサル」「ンシャル」に関する記述的研究（真木里沙）

【関西大学文学部総合人文学科国語国文学専修】

○断りの意味での「考えておく」について（大村侑佳里）

関西では、誘いを受けたときの「考えておく」という返事が断り文句として使用されるという言説が見られる。そこで、断りの意味での「考えておく」の使用の地域差についてアンケート調査を行ったところ、言説に反して地域差は見られないという結果となった。それにも関わらず、断りの意味での「考えておく」が関西特有の表現だとされるのは、関西では婉曲表現が発達しているため、関西人が曖昧な返事をした場合には婉曲的に断りの意味を表すと捉えられやすいためだと考察される。

○推量表現の使用の動態—ダロウ類・トオモウ類・否定疑問類を中心に—（尾関武尊）

関東・関西地域の若年層と高年層を対象にアンケート調査を行い、事態の実現可能性と聞き手と話し手の情報均衡性という2軸によって、推量的な場面で用いられる3形式（ダロウ類・トオモウ類・否定疑問類）がどのように使い分けられるかその動態を分析した。その結果、若年層において推量表現形式の選好性に地域差があり、関西では相手との心理的距離を縮める方向、関東では相手との心理的距離を確保する方向というポライトネスの方略の違いの影響が示唆された。

○和歌山方言における終助詞「ヨ」の音調について（倉橋穂実）

和歌山方言では共通語（東京方言）と比較して終助詞「ヨ」の使用頻度が高く、音調も下降調になることが多い。本稿では、東京方言話者と和歌山方言話者に対して調査を行い、結果の分析を行った。その結果、東京方言の「ヨ」には疑問型上昇調、強調型上昇調、無音調があり、これらが文タイプによって使い分けられるのに対し、和歌山方言の「ヨ」は強調型上昇調、無音調があり、そのうち主に用いられるのは無音調で、強調型上昇調は特別な意図がある場合に用いられることがわかった。

○滋賀県長浜市若年層の素材待遇語の動態—(ヤ)アルと(ヤ)ンスに注目して—（坪井菜央）

滋賀県長浜市では、(ヤ)アル、(ヤ)ンスといった素材待遇語が盛んに使用される。本稿ではこれら素材待遇語の使用実態と運用方法を、若年層を対象としたアンケート調査から明らかにした。その結果、(ヤ)アルがほぼ専用されるという使用実態があることがわかった。また、従来から見られた運用方法の他に、すべての場面、待遇対象に対して使用されるという新たな運用方法も見られた。このような運用方法の変化は複数の素材待遇語の使用頻度や運用方法が影響し合っていると考察される。

○近畿地方における副詞「また」の意味拡張について（樋渡萌）

近畿地方では、副詞「また」が本来の用法である「再び」という意味から拡張した「今度」という意味で広く用いられる。本稿ではアンケート調査によって、近畿地方では「今度」という意味の「また」は使用が許容される割合が高いことや、勧誘場面で「また」を使用した場合、その勧誘の実現可能性が高くないことを明らかにした。この「今度」という意味の「また」は誘いや行為を保留、曖昧にすることで最終的な判断を相手に委ねるという社交辞令的な表現として機能していると言える。

○若年層における関西方言の変容—大阪泉州地域を中心に—（山田千捺）

大阪府泉州地域は泉北と泉南で方言差があるとされる。大阪の中心部発祥の言語表現の泉州地域への流入と近畿南部発祥の言語表現の大阪中北部地域への流入の分析を目的として、アンケート調査を行った結果、泉北地域は大阪中心部に隣接して泉州弁の特徴を失いつつある地域と、泉南地域に隣接し泉州弁の特徴を維持している地域に分けられることがわかった。以上により、泉州地域の方言は泉北地域北部、泉北地域南部、泉南地域という3地域の対立関係にあると捉えられる。

【四国大学文学部日本文学科】

○鹿児島方言における方言意識と標準語化（鎗流馬聖）

鹿児島県における標準語化について、方言意識の観点から調査・分析を行った。調査は二段階で実施し、まず鹿児島方言話者10代から60代の計40名に方言意識と鹿児島方言語彙に関するアンケート調査を行った。その後、詳しく内容を尋ねるため、各世代1～2名ずつにインタビュー調査を行った。結果として、若年層から高年層まで方言に対する意識の差が標準語化の要因の一つではないかと結論付けた。

○高知方言のアスペクト表現形式「ユー形」「チュー形」について（戸田涼太）

筆者の内省を基に、木部・沖・井上（2002）「テンス・アスペクト」『方言文法調査ガイドブック』にて示された調査例文について、高知方言のアスペクト形式「ユー」「チュー」の文法性判断を行った。結果、将然相・継続相では「ユー」を、結果相では「チュー」を優先的に用いており明確な使い分けが行われていた。一方、痕跡、反復習慣、心理状態継続では「ユー」「チュー」の両形式の使用が認められた。ただしこれらも細かなニュアンスが異なっており、両形式が中和しているとは言い切れないと分析した。

○消滅する危機にあるしまくとうばを継承していくための公共図書館の取り組み（板倉芹夏）

しまくとうばを含めた文化継承のための取り組みが沖縄の公共図書館でどのように行われてきたか、過去の図書館だより等を調査した。その結果、1990年代から、「方言を学ぶ会」の開催、読み聞かせ、しまくとうばによる絵本の編纂をしていた図書館があった。このことから、県内の図書館では、2006年の「しまくとうばの日」条例制定及び2009年のユネスコ勧告以前から、しまくとうばを継承する取り組みを実施していたと考察した。

【昭和女子大学日本語日本文学科】

○ウチナーヤマトグチについて—『琉神マブヤーシリーズ』にあらわれたウチナーヤマトグチ—（上

村ののか)

沖縄県ご当地ヒーローのテレビ番組『琉神マブヤー』に現れた、「はず」「わけ」「なんか」、指示詞、終助詞などについて、共通語との意味用法のずれを中心に、内省を加えつつ論じた。

○SNS におけるエセ関西弁の使用実態と役割～エセ関西弁の効果と注意点について（東中風薫）

Twitter から「エセ関西弁」を抽出し、使用形式と役割について検討した結果、「注目を集める、発言に関心を持たせる」等 4 点を代表的な機能として想定した。その想定の妥当性と SNS 上の「エセ関西弁」使用に関する意識を非関西方言話者・関西方言話者にアンケートで調査した結果、「直接的ではなく柔らかくする」という役割は多くが認めるところであったが、使用頻度によって好悪の印象が変化すること等も示された。発信者と受け取り手のずれを抑えることが「エセ関西弁」の効果的な使用方法となり、二面性を持った役割に注意が必要である。

【中京大学文学部】

(2022 年度)

○西三河方言における命令表現の使用範囲（佐々木優里）

○岐阜県方言の推量・確認要求表現（山本和実）

○三河方言における「だら」等の使用について（古澤里菜）

(2021 年度)

○人工知能による方言歌詞の感情分析と各地域の特徴（浜田祐菜）

○石川県鹿島郡中能登町方言の談話資料（野村海翔）

○徳島方言辞書・テキスト（藤本周）

○三重県松阪市方言の世代差（松浦亜美）

【東京大学文学部言語学研究室】

○肥筑方言のアスペクト形式「V+ヨク」の福岡県内における使用状況の分析と考察（池田舞）

福岡県内の若年層において「V+ヨク」はアスペクト形式として広く使用されている。「V+ヨク」は様々な形に活用させられるが、一人称主語で使用される(疑問文と命令文では二人称主語も可)ことと意志の意味が含まれることから、第三者の力が作用する表現や三人称を主語にしなければ使用できない表現については活用させることができない。「ヨク」をつけることができる動詞の条件は、意志を持ってその行為をすることができること、その行為が瞬間的でなく一定の時間経過を伴うことである。

○富山県滑川市方言における名詞アクセントの動態（大久保紗那）

伝統的な富山県方言のアクセントは音調の「下げ」の有無と位置を弁別特徴とし、 n 拍語に $n+1$ 個のアクセントがある。滑川市方言話者(50 代 4 名、20 代 4 名の計 8 名)の調査の結果、全体的に共通語

化が進行していることがわかった。共通語化を阻害する要因として、新田(1997)が指摘する語音の条件の他に、語末母音の無声化、母音構成の対称性/非対称性などが指摘できる。無声化した語末母音は低いピッチで実現するため、語末が高いピッチで実現される無核型や語末に核があるアクセント型への共通語化が起きにくい(例:ガラス・梅干・足・梨・夏・橋・話)。また、母音の構成上の対称性がアクセント上の対称性を指向し、同じ母音が連続する場所では音調の「下げ」が起きにくい。

○宮崎弁の文末助詞について(梨子田昂生)

宮崎方言の文末表現「チャジ」「チャガ」の機能を比較した。「ジ」は「聞き手に新しく情報を提供する役割」を持つ。「ガ」は、「提供する情報が既定のものであることを示す役割」を持つ。このため、「ジ」は押し付けがましい印象を持ち、「ガ」は主観や共通認識を示す際に用いられる。「ジ」は、標準語の「よ」が担う役割のうち、「言述の文における聞き手への積極的な働きかけ」という役割を担う。一方で「ガ」は、憤りや不快感といった話者の心情を伝える働きや、言外の意味を伝達する働きを持つ。「チャジ」という形は、「聞き手にとって新しい情報を示す」働きの持つ「ジ」と、「話し手にとって情報が新しいこと」を示す助動詞「チャ」が共起したものである。

○連濁の地域的傾向と音韻条件: 複合語地名を手掛かりに(平井偉在耶)

「歴史地名辞書データ」のうち、『大日本地名辞書』を出典とする部分から、Python を用いて複合語地名を抽出し ArcGIS Online を用いて音韻条件ごとに分布を地図に示した結果、複合語地名の連濁には次の地域的傾向が見られた。

- a. 直前拍初頭が /k/: 九州北部で非連濁傾向
- b. 直前拍初頭が /s/: 中部地方西南部で連濁傾向、四国で非連濁傾向
- c. 直前拍初頭が /c/: 福島県・東海地方南部で非連濁傾向、九州北部で連濁傾向
- d. 直前拍初頭が /w/: 東日本で連濁傾向、西日本で非連濁傾向
- e. 直前拍初頭が /n/ または /m/: 中国地方東部で非連濁傾向
- f. 直前拍初頭が後部要素初頭と同じ無声子音: 東北地方北部で非連濁傾向

【東京大学文学部日本語日本文学(国語学)専修課程】

○ソ系指示詞を含む接続詞の地理的バリエーション(北村壮)

『日本語諸方言コーパス』を用いて、ソ系指示詞を形成要素とする接続詞の形態の地理的バリエーションを整理し、考察した。

○「首都圏方言におけるジャネとジャン—ジャンイカ類の用法差と使用話者属性—(馬越日向子)

首都圏方言のジャン・ジャンカ・ジャネの用法やその変化、話者属性について、若年層を対象とする調査と『日本語日常会話コーパス』の用例から分析・考察した。

【東北大学文学部】

○東北方言における漢語の研究(石川武)

本論文は、「ごしゃく（後世）」「しょうしい（笑止）」など、東北方言で使用される漢語由来の方言について考察したものである。『日本方言大辞典』『日本国語大辞典』などの資料を駆使しながら、変異形の多寡、語形成のあり方、意味変化の様相といった観点から分析することで、中央語から方言への変容の姿を明らかにしている。

○石川県金沢市方言における疑問の終助詞の研究（清水菜月）

本論文は、金沢市方言における疑問の終助詞について体系的な記述を行うとともに、世代的な変化の様相を明らかにしたものである。まず、石川県全域を対象に疑問の終助詞の使用実態を文献資料から把握した上で、金沢市方言のカ類、カイ類、ケ類、ガ類について詳細な記述を行い、さらにそれらの変化の状況について論じている。

○宮城県方言における格助詞「サ」の用法（山本理帆）

本論文は、宮城県方言で使用される格助詞「サ」の用法について、会話資料を用いることで考察したものである。『方言文法全国地図』と FPJD の結果を比較すると、「存在の場所」の用法が拡張しているが、会話資料を分析すると、その用法は、補助動詞用法が先に獲得され、そこから本動詞用法へと発展していったことが明らかになった。

【日本大学文理学部国文学科】

○医療現場におけるコミュニケーション：方言に注目して（益子有紗）

医療現場におけるコミュニケーション、とくに方言使用に着目し、医師・看護師を対象とした意識調査を実施し、そこで得た 91 人分のデータの集計・報告・解釈を行った。共通語中心社会である東京都多摩地区（八王子市）と方言主流社会寄りの茨城県（取手市）の医療機関の比較、医師と看護師の比較、無勤続年数による比較などを行った。医療行為中に方言を使用することには全体的に肯定的な意見が多く、勤続年数が長くなるほど肯定感が高くなることが分かった。医療行為中の方言の使用頻度については、医師より看護師の使用が多く、接触する患者の方言のバリエーションは茨城より東京に多いことが分かった。自由記述として収集した医療行為中の方言にまつわるエピソードには地域差が認められた。

○東京都多摩地区昔話の『方言』：西多摩地域と南多摩地域の昔話を比較して（田中菜々実）

西多摩地域の青梅市・羽村市・あきる野市・日の出町・檜原村・奥多摩町と、南多摩地域の八王子市・町田市・稲城市の昔話を収録した計 14 冊の直接会話文に現れる非標準的要素をデータとして収集した。昔話に現れる非標準的な要素にはどのようなものがあるのか整理した上で、地域や登場人物による非標準語要素の出現の偏りについて報告をした。非標準的要素として、「べー」「/ai/連母音の融合」が目立って多く、南多摩よりも西多摩に、身分の高い登場人物・知識人・神仏よりも地域で生活する人々や動物の会話文に非標準的要素が多く現れることを報告した。

【広島大学教育学部】

○大分方言におけるアスペクト—日出町の若年層を中心に—（廣瀬憲人）

本研究は、日出町出身の若年層話者を中心に、大分方言のアスペクト形式（主にヨル形式／ Chol

形式)の使い分けについて論じたものである。アスペクト体系の概観を示した上で、本来ヨル形式が用いられる〈動作過程継続〉においてヨル形式と Chol 形式が併用される点に注目して調査・分析を行い、その結果、個人差はあるものの、Chol 形式が用いられる条件として、動作の目撃に該当しないこと、テンスが過去であること、自動詞であることが関与的であることを明らかにした。

【福岡教育大学国語教育研究ユニット】

○筑後方言における当為表現について（入部尚子）

福岡県南部で使用されている筑後方言の当為表現に着目し、その使用実態について調査した。筑後方言では、「行かなければならない」を「イカントイカン」、「イカヤン」のように、2通りの言い方で表現する。調査の結果、「イカントイカン」は、(1)主体的判断の余地がない場合、(2)主体的判断の余地があり、かつ話者が負担に感じる事柄である場合に用い、「イカヤン」は、(3)主体的判断の余地があり、かつ仕方ないと許容できる事柄である場合に用いることを明らかにした。

【三重大学教育学部国語教育コース】

○打ち言葉における言語表現—句末マーカ—の使い方に着目して—（岡井陽菜）

本論文では、LINE 等のやりとりで見られる書き言葉を「打ち言葉」と定義づけ、打ち言葉における句末マーカ—の使い方に着目して調査を行った。先行研究や予備調査から見えた課題を基に、依頼の場面における受け手の句末マーカ—の使用の仕方や、使い分けの要因を明らかにすることを目的として、アンケート調査を実施した。その調査から相手の条件に合わせて自分の句末マーカ—の使い方を調整することや、使い方の傾向は7分類できること、親疎が最も影響を受ける要素であることを示した。

○日本語から見るジェンダー（松井亜香音）

本論文では COJADS から得た感動詞「あら」のデータをもとに、「あら」がどのような場面で使われているのか、どのような音調で使われているのか、またそこから見られる男女差はどのようなものがあるのかということについて調査を行った。「あら」が使われる場面における性差や、場面と音調を組み合わせた分析で明らかになった性差について述べている。

○多気郡明和町の方言について（西山新平）

本論文では、三重県多気郡明和町の方言に焦点を当てて、明和町出身者に面接調査を依頼し、明和町方言の特徴や残存を調査した。明和町沿岸地域の風位語彙と性向語彙を中心に、調査結果と先行研究を比較することで、その特徴を考察した。調査から、語彙の使用に生業環境が関わっていること、語彙を使用する年代・範囲が限定される傾向にあることを示した。

【宮城教育大学教育学部】

(2022年度)

○青森県青森市方言の研究（小笠原紫帆）

○沖縄方言の教材化に関する研究（三好李佳）

(2021 年度)

○青森県黒石市における方言語彙の研究（木村友輔）

○栗原市方言の言語行動に関する研究（菅原麻衣）

○「ばやばや」考（宗像笑）

(2020 年度)

○芸能における方言の機能に関する研究（内海壮太）

○文学における青森方言の利用について（佐々木真奈）

○宮城県伊具郡丸森町における方言語彙の研究（佐藤みなみ）

○東北方言における言語行動の研究（村上璃子）

(2019 年度)

○山形県米沢市方言の研究（齋藤亘）

○山形県山形市における方言語彙の研究（新海黎二）

○方言の機能に関する研究（千葉隼人）

【立正大学文学部】

○埼玉県の方言—埼玉北部方言・埼玉特殊アクセントについて—（黒澤拓也）

関東方言の推量・意志表現「べー」および埼玉特殊アクセントについて先行研究をまとめたうえで、埼玉県本庄市方言の話者を対象に「べー」の使用意識調査をおこなった。中高年層の男性話者は推量や意志の様々な用法で「べー」を使用すると回答したが、女性や若い話者はほぼ「べー」を使用しないと回答した。また、中高年層男性には方言と共通語の使い分け意識が見られるのに対し、女性や若い話者には使い分け意識が希薄である。

○方言話者の印象形成における方言が与える影響（中村優斗）

約 100 名の非広島方言話者（20 代，30 代，40 代の 3 世代）に対して，広島方言のイメージを調査した。主にメディアを通じて形成されたステレオタイプのイメージとしては「陽気，明るい」のほか「怖い，荒っぽい」という回答も特に年齢の高い世代に見られた。しかし，実際の広島方言の音声を聞いてもらったうえでイメージを尋ねたところ，「怖い」というマイナスイメージの回答は少なくなった。音声面のパラ言語的情報が印象形成に影響を与えたと考えられる。

○同意要求表現「クナイ」の使用実態について（宮川竜二）

現在の日本語における同意要求表現クナイの使用状況について，高木千恵，平塚雄亮などによる先

行研究をふまえながら、twitter のツイートを対象に調査をおこなった。動詞では「あるくない?」「違うくない?」など状態性の動詞でクナイの使用が多い。「寒いくない?」「無理くない?」「雨くない?」など他の品詞での使用も見られる。また、「違うくね?」のようにクネという形での使用も見られる。クナイの使用は今後も広まると見られる。

○日本の罵倒表現—婉曲的な意味を持つアホ・バカ方言—（山本楓華）

松本修（1996）『全国アホ・バカ分布考』（新潮社）で主な分析対象になっていない罵倒語を取り上げ、真田信治・友定賢治編（2011）『県別罵詈雑言辞典』（東京堂出版）、『日本国語大辞典』、「日本語歴史コーパス」の記述からその成り立ちや特徴を分析した。マヌケ、フヌケ、ボンクラ、ノータリンはもともと婉曲的な罵倒表現として生まれたと考えられる。クソは接頭語か接尾語、あるいは「くそにする」などの慣用句として使われやすい。

— お 知 ら せ —

〈次回のお知らせ〉

次回の第117回の研究発表会は、**2023年10月頃オンライン**で開催の予定です。4月1日現在、詳細は未定ですが、決まり次第、日本方言研究会のホームページ等でお知らせします。

〈発表募集〉

1. 応募資格・条件：方言研究に関心をお持ちの方なら、どなたでも応募することができます。研究発表は、日本語方言とその関連領域に関する未発表のものとし、1題につき発表30分、質疑20分（予定）です。
2. 応募締切：**未定（2023年7月下旬を予定しています）**
3. 応募書類：次の2点（A4判用紙計2枚）をご提出ください。
 - a. 申込書：A4判用紙1枚に、発表題目・氏名・所属・研究略歴・連絡先（住所、電話番号、メールアドレス）を記載してください。
 - b. 発表要旨：冒頭に発表題目を記した上で、研究の目的・方法・結論を具体的に明記してください。氏名・所属は記載せず、本文においても応募者が特定できるような表現を避けてください。分量は、図表等込みでA4判用紙1枚以内です。
4. 応募先と応募方法：下記連絡先①（研究発表会委員会）宛に、メールの添付ファイル（Microsoft WordもしくはPDF）でお送りください。その場合、特殊な記号を使うなど、文字化けが予想される場合には、郵便でもお送りください。なお、メールをお使いでない方は、郵便でお送りください。
5. 応募可能数：筆頭発表者として応募できるのは1件です。応募書類の提出者を筆頭発表者として扱います。
6. その他：研究発表会委員会で審査の上、採否を決定します。採用決定後、発表題目、発表者名（連名発表の場合、氏名の順序も）は変更できません。採用された方には、発表原稿集の原稿を提出していただきます（**提出期限は2023年9月末～10月初め頃を予定しています**）。その他、詳細はホームページをご覧ください。

連絡先①

研究発表会委員会（委員長：大橋純一）
〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1
秋田大学教育文化学部
地域文化学科気付
hougen-happyou@e-mail.jp

連絡先②

事務局（総務委員長：新井小枝子）
〒370-1193 群馬県佐波郡玉村町上之手1395-1
群馬県立女子大学文学部
国文学科気付
hougen-jim@e-mail.jp

日本方言研究会ホームページ <http://dialectology-jp.org/>

Conference Papers of the Dialectological Circle of Japan

No.116 (May 19, 2023), Aoyama Gakuin University

Presentation

1. YAMADA Haruka: The problem of not understanding dialect in nursing care: The case of Sendai City
2. MINEO Kaisei, TANIGUCHI Joy: Polysemy of Shizuoka dialect *iinisuru* and its usage
3. SAKAGAMI Takeo: Main-clausalization of reason clauses in the Kumamoto dialect
4. YASUI Kazue: Formulaic dialect used in *Kamigata rakugo*: A case study of '*Kamigata Hanashi*'
5. AKAMA Sakura: Distribution and history of dialect onomatopoeia: A case study of "crying in a quiet voice"
6. ARAI Saeko: Dialectal variations of *shimotsukare*, a local dish in northern Kanto region
7. ONISHI Takuichiro: On the *Database of Linguistic Atlases and Maps of Japan*
8. NITTA Tetsuo: The accent system and its distinctive features in the Yonaha dialect of Miyako Ryukyuan